

梶山女学園大学・大学院 F D 委員会活動報告書
(平成26年度)

梶山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第2号 (通巻 第15号)

平成 26 年度

相山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告書

相山女学園大学・大学院 ファカルティ・ディベロップメント

第2号（通巻第15号）

栢山女学園大学・大学院 F D 委員会活動報告書（平成26年度）

目 次

はじめに 全学 F D 委員会委員長・大学院 F D 委員会委員長 戸部 栄一

I 大学F D委員会の活動

- 1 全学F D委員会の活動記録(平成26年度).....3
- 2 全学F D活動報告(平成26年度).....6
- 3 学部F D活動報告(平成26年度)
 - ・生活科学部F D活動報告.....15
 - ・国際コミュニケーション学部F D活動報告.....19
 - ・人間関係学部F D活動報告.....26
 - ・文化情報学部F D活動報告.....44
 - ・現代マネジメント学部F D活動報告.....48
 - ・教育学部F D活動報告.....52
 - ・看護学部F D活動報告.....56

II 全学F D小委員会の活動

- 1 授業アンケート小委員会の活動記録(平成26年度).....61
- 2 授業改善小委員会の活動報告(平成26年度).....106
- 3 教員研修小委員会の活動報告(平成26年度).....114

III 大学教育の質の向上に向けて

- 1 大学院F D委員会の活動記録(平成26年度).....119
- 2 大学院F D活動報告(平成26年度).....119
- 3 研究科F D活動報告(平成26年度).....120

はじめに

相山女学園大学全学FD委員会委員長

相山女学園大学大学院FD委員会委員長

戸部 栄一

文部科学省のホームページでは、FD(ファカルティ・ディベロップメント)の定義は、「教員が授業内容・方法を改善し向上させるための組織的な取組の総称。その意味するところは極めて広範にわたるが、具体的な例としては、教員相互の授業参観の実施、授業方法についての研究会の開催、新任教員のための研修会の開催などを挙げることができる。」(中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像」答申(平成17年1月)による)とされている。FD活動が始まったころは、「個々の教員の自助努力による授業改善」という色彩が強かったが、その後ここに示されたように「組織的取組」が強調され、大学として、あるいは各学部学科としてどのように授業改善に取り組むべきかという議論が高まってきた。このことは、私立大学等改革総合支援事業の申請・採択条件にも反映されるようになり、こうした組織的な取組が重要となるに至っている。

こうした状況の中で、本学の全学FD委員会も、他大学等の様々なFD活動の事例等を参考としつつ幅広い展開を図っている。平成26年度は、8月6日に公益法人私立大学情報教育協会主催の「教育改革FD/ICT理事長学長等会議」、11月6日に一般財団法人私学研修福祉会主催の「私立大学の教育・研究充実に関する研究会」、平成27年2月28日、3月1日に公益財団法人大学コンソーシアム京都主催の「第20回FDフォーラム 学習支援を問う～何のために、何をどこまでやるべきか～」、3月7日に大学教育改革フォーラムin東海実行委員会、名古屋大学高等教育研究センター主催の「大学教育改革フォーラムin東海2015」などにそれぞれ参加し、貴重な見識、事例紹介などを勉強し、これらを参考としてFD活動の進化に努めてきた。

こうした動向を含めて、平成26年度の全学FD委員会の主な活動は以下の3つの視点から展開され、それなりの成果を得たといえるだろう。

- ① 多様な教員研修の採用とその成果の教員への伝達
- ② 学生の主体的な学修を引き出すための授業アンケートの改善とそのリフレクションの作成、学生への公開、それらを踏まえた上でのシラバスの工夫と徹底
- ③ アクティブ・ラーニングの推進を支援するために仕組みの検討及び参考授業のピックアップと勉強会の開催

これらの情報の共有とそれらを取り入れた授業改善、学生との対話などは、上記の「組織的取組」に向かっており、今後のFD活動の方向性を示しているものと思われる。今後とも、関係各位のご理解のもと、授業改善と学生の主体的学修の進展に努めていきたいと思うものである。

I 大学 F D 委員会の活動

- 1 全学 F D 委員会の活動記録（平成26年度）
- 2 全学 F D 活動報告
- 3 学部 F D 活動報告

I. 1 全学FD委員会の活動記録（任期：平成26年5月1日～平成27年4月30日）

(第1回) 平成26年4月22日(火) 17:00～18:00 ※平成25年度第10回 委員会と合同開催	1. 報告事項 (1) 平成25年度全学FD委員会活動状況について (2) 平成25年度全学FD委員会予算の執行状況について (3) 平成26年度全学FD委員会予算について (4) 平成26年度前期授業アンケートの対象科目選定について (5) 平成26年度新任教員研修プログラムについて (6) 平成26年度新任教員研修(学外)について (7) 学士課程教育の質的転換のための改革アクションプランについて (8) 「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」について (9) その他 2. 議 題 (1) 平成26年度全学FD委員会活動の方針に関する件 (2) その他
(第2回) 平成26年5月27日(火) 17:00～17:50	1. 報告事項 (1) 平成26年度前期授業アンケートについて (2) 平成26年度前期授業改善のための授業公開期間について (3) その他 2. 議 題 (1) 平成26年度全学FD委員会活動案に関する件 (2) その他
(第3回) 平成26年6月24日(火) 17:00～17:55	1. 報告事項 (1) 新任教員研修(学外)について (2) 平成26年度前期授業アンケートについて (3) 平成26年度前期授業改善のための授業公開期間について (4) その他 2. 議 題 (1) 平成26年度科研費取得のための研修会に関する件 (2) 平成26年度FD研修会に関する件 (3) 平成26年度GLEXA(E-learningシステム)活用に向けての講習会開催に関する件 (4) アクションプラン2014における全学FD委員会の課題に関する件 (5) その他
(第4回) 平成26年7月22日(火) 17:00～18:15	1. 報告事項 (1) 平成25年度学生による評価アンケートについて (2) アクションプラン2014における全学FD委員会の課題について (3) その他 2. 議 題 (1) 平成27年度シラバス記入要領に関する件 (2) 平成26年度後期授業アンケートに関する件 (3) 授業支援相談窓口に関する件 (4) アクティブ・ラーニング調査に関する件 (5) 学修時間調査に関する件 (6) その他

(第5回) 平成26年9月11日(木) 15:30～16:30	1. 報告事項 (1) 平成26年度FD研修会等について (2) 平成26年度前期授業アンケート実施状況について (3) 平成26年度前期公開授業実施状況について (4) 小委員会の検討状況について (5) その他 2. 議 題 (1) 平成27年度『シラバス』作成に関する件 (2) 平成27年度全学FD委員会活動に関する件 (3) 平成27年度予算に関する件 (4) その他
(第6回) 平成26年10月28日(火) 17:00～18:30	1. 報告事項 (1) 平成26年度前期授業アンケート実施状況について(修正版) (2) 平成26年度リフレクション・ペーパーの提出状況について (3) 小委員会の検討状況について (4) 平成25年度全学FD委員会活動報告書の作成に関する件 (5) その他 2. 議 題 (1) 平成27年度全学FD委員会活動に関する件 (2) 平成27年度全学FD委員会予算に関する件 (3) 平成27年度授業アンケートに関する件 (4) 平成27年度シラバス(授業計画)に関する件 (5) 平成26年度全学FD委員会活動に関する件 (6) 平成26年度後期授業改善のための授業公開期間について (7) その他
(第7回) 平成26年11月25日(火) 17:00～18:10	1. 報告事項 (1) 平成26年度全学FD委員会予算執行状況について (2) 平成26年度後期授業改善のための授業参観週間実施について (3) 平成25年度全学FD委員会活動報告書の作成について (4) 小委員会の検討状況について (5) 参考となる授業レポートについて(途中経過) (6) 平成27年度全学FD委員会事業計画及び予算について (7) その他 2. 議 題 (1) FD委員会活動報告書に関する件 (2) 平成26年度教育・学修環境及び学生の学修時間等に関するアンケート調査に関する件 (3) 平成27年度シラバス(授業内容一覧)に関する件 (4) 平成27年度授業評価アンケートに関する件 (5) その他

(第8回) 平成27年1月27日(火) 17:00～18:00	1. 報告事項 (1) 平成26年度全学FD委員会予算執行状況について (2) 平成26年度後期授業改善のための授業参観週間実施について (3) 平成26年度学生の学修時間等に関するアンケート調査について (4) 大学教育改革フォーラム及びFDフォーラムについて (5) 新任教員研修プログラム (6) その他 2. 議 題 (1) 平成26年度FD委員会活動報告書に関する件 (2) 平成26年度全学FD委員会活動に関する件 (3) 小委員会の活動に関する件 (4) 平成27年度授業評価アンケートに関する件 (5) その他
(第9回) 平成27年2月24日(火) 17:00～18:20	1. 報告事項 (1) 平成26年度全学FD委員会予算執行状況について (2) 平成26年度後期授業改善のための授業参観週間実施について(訂正) (3) 私立大学情報教育協会コンテンツオンデマンド配信について (4) 文部科学省による他大学の設置計画履行状況等調査の結果等について (5) その他 2. 議 題 (1) 平成27年度全学FD委員会予算案に関する件 (2) 小委員会の活動に関する件 (3) 平成27年度授業評価アンケートに関する件 (4) その他
(第10回) 平成27年3月23日(月) 13:00～13:50	1. 報告事項 (1) 「今年度の振り返り」と「来年度の目標」のアンケートについて (2) 平成26年度全学FD委員会予算執行状況について (3) FDフォーラムの参加報告について (4) 平成25年度新任教員研修(学外)について (5) その他 2. 議 題 (1) 平成27年度事業計画に関する件 (2) その他

I. 2 平成26年度 全学FD活動報告

1. 授業アンケート

・実施時期：平成26年7月16日(水)～22日(火) ※前2週間は予備期間

・授業アンケート対象科目

科目選定：卒業研究、集中講義及び受講者数が10名未満の科目を除くすべての前期開講科目

授業アンケート実施率

学部	対象 科目数	実施 科目数	実施率	未実施 科目数
生活科学部	209	205	98.1%	4
国際コミュニケーション学部	267	251	94.0%	16
人間関係学部	205	195	95.1%	10
文化情報学部	207	198	95.7%	9
現代マネジメント学部	138	131	94.9%	7
教育学部	141	136	96.5%	5
看護学部	57	57	100%	0
計	1,224	1,173	95.8%	51

◎リフレクション提出 885科目/1,173科目 (75.4%)

2. 授業公開（授業改善のための授業参観）

期間：平成26年7月1日（火）～22日（火）

平成26年12月1日（月）～22日（月）

対象：本学教職員及び非常勤講師

趣旨：教員・事務職員が授業を参観する。参観した者は、参観の後、フィードバックシート、メール等で感想を授業担当教員に伝える。参観した教員は、よい工夫を自分の授業に活かすとともに、授業公開した教員も、意見やアドバイスを参考にし、授業改善を図っていく。専任教員全員が、授業の公開または参観を行う。参観した事務職員は、事務側の視点で授業支援を考える契機とする。

前期

学部	授業公開人数	授業参観人数	授業公開科目数	参観者有科目数
生活科学部	7	12	6	4
国際コミュニケーション学部	7	1	8	1
人間関係学部	12	2	12	2
文化情報学部	14	1	10	1
現代マネジメント学部	6	2	6	2
教育学部	20	21	46	13
看護学部	6	9	6	4
事務	－	3	－	－
計	72	51	94	27

後期

学部	授業公開人数	授業参観人数	授業公開科目数	参観者有科目数
生活科学部	7	6	7	2
国際コミュニケーション学部	8	1	13	0
人間関係学部	5	3	5	2
文化情報学部	7	2	8	5
現代マネジメント学部	6	2	6	2
教育学部	19	7＋助手 1	47	7
看護学部	4	3	4	3
非常勤講師	1	1	－	－
事務	－	2	－	－
計	57	27＋助手 1	90	21

3. 参考授業

アクティブ・ラーニングやICTを活用して、効果を上げている授業を参考授業として公開、教育方法を開発する議論の素材とする。

◎全学FD委員が、「目から鱗の授業」、「特徴ある授業方法で行われている授業」、「オーソドックスな授業方法でも、学生からの評価の高い授業」等を選定し、その授業担当者や受講生にインタビューのうえ、「参考となる授業レポート」を8科目作成し、12月の教授会で報告した。

4. 研修会

①科研費取得のための研修会

- ・日時：9月11日（木）13：30～15：00
- ・場所：国際コミュニケーション学部棟206室
- ・報告者：（各報告：10分～15分）
佐川佳之 人間関係学部講師 （若手研究）
安本卓也 看護学部講師 （若手研究）
向直人 文化情報学部准教授 （若手研究）
坂本徳弥 教育学部教授 （基盤研究）
- ・参加者数：39名

②FD研修（ハラスメント研修と同時開催）

- ・日時：9月12日（金）10：30～12：00
13：30～15：00
- ・場所：大学会館 大会議室
- ・テーマ：「アクティブラーニングを促す教授法の基本」
- ・講師：中井俊樹 氏（名古屋大学高等教育研究センター准教授）
- ・形式：カフェ形式のグループ研修 ※発表にオープンノートを使用
- ・参加者数：174名

③G l e x a 講習会

- ・日時：9月12日（金）15：30～17：00
- ・場所：文化情報学部メディア棟324室
- ・テーマ：G l e x a の活用のための実技講習
- ・講師：V e r s i o n 2（開発業者）講師
- ・参加者数：26名

5. 学修時間アンケート

「教育・学修環境及び学生の学修時間に関するアンケート」を見直し、S*map のアンケート機能を使い、「学修時間アンケート」を次の通り実施した。

学生の皆さんの、1/17（土）～1/19（月）の学修時間について、お伺いします。

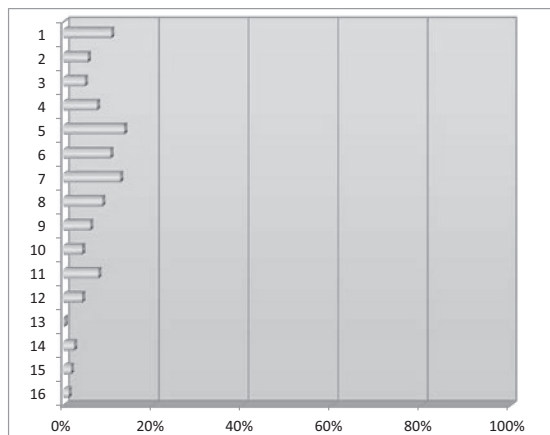
この3日間、授業の時間以外で、「準備学習」「課題、復習」「授業に関するその他の学習」「授業以外で関心がある勉強」について、何時間勉強しましたか？勉強の場所は、図書館でも、自習室でも、自宅でも、電車の中でも構いません。3日間、それぞれの日の、学修時間の実績を回答してください。（このアンケートは、皆さんの学修のスタイルを把握し、本学がより価値の高い授業を提供するために行います。）

1 所属学科（専修・研究科）を選んでください。（必須）

No	回答	回答数
1	管理栄養学科	47
2	生活環境デザイン学科	24
3	国際言語コミュニケーション学科	21
4	表現文化学科	33
5	人間関係学科	60
6	心理学科	46
7	文化情報学科	56
8	メディア情報学科	38
9	現代マネジメント学科	26
10	保育・初等専修	18
11	初等・中等専修	34
12	看護学科	18
13	生活科学研究科	1
14	人間関係学研究科	10
15	現代マネジメント研究科	7
16	教育学研究科	5

有効回答数： 444

10. 6%
5. 4%
4. 7%
7. 4%
13. 5%
10. 4%
12. 6%
8. 6%
5. 9%
4. 1%
7. 7%
4. 1%
0. 2%
2. 3%
1. 6%
1. 1%

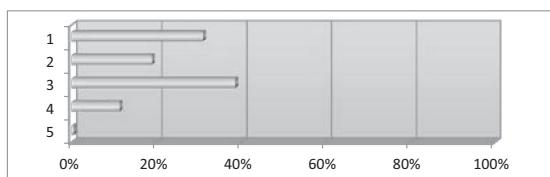


2 学年を選んでください。（必須）

No	回答	回答数
1	1年生	137
2	2年生	84
3	3年生	171
4	4年生	50
5	大学院生	2

有効回答数： 444

30. 9%
18. 9%
38. 5%
11. 3%
0. 5%

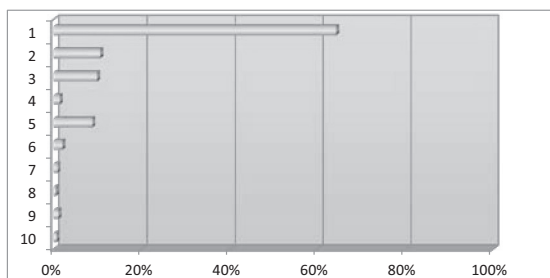


3 【土】 あなたは、1/17（土）に「準備学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	285
2	15分前後	47
3	30分前後	44
4	45分前後	6
5	60分前後	39
6	90分前後	9
7	120分前後	4
8	150分前後	2
9	180分前後	5
10	210分前後orそれ以上	3

有効回答数： 444

64. 2%
10. 6%
9. 9%
1. 4%
8. 8%
2. 0%
0. 9%
0. 5%
1. 1%
0. 7%

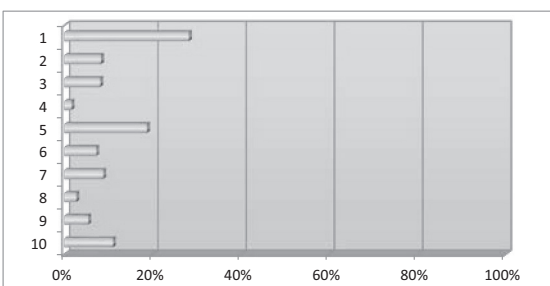


4 【土】 あなたは、1/17（土）に「課題・復習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	125
2	15分前後	37
3	30分前後	36
4	45分前後	7
5	60分前後	83
6	90分前後	32
7	120分前後	39
8	150分前後	12
9	180分前後	24
10	210分前後orそれ以上	49

有効回答数： 444

28. 2%
8. 3%
8. 1%
1. 6%
18. 7%
7. 2%
8. 8%
2. 7%
5. 4%
11. 0%

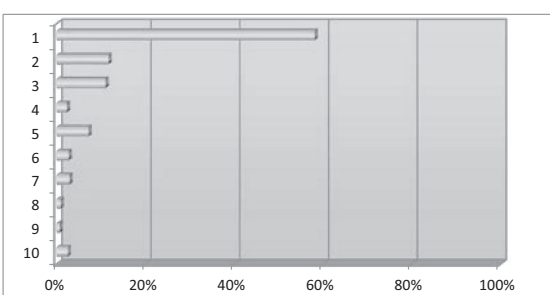


5 【土】 あなたは、1/17（土）に「授業に関するその他の学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	258
2	15分前後	52
3	30分前後	49
4	45分前後	10
5	60分前後	32
6	90分前後	12
7	120分前後	13
8	150分前後	4
9	180分前後	3
10	210分前後orそれ以上	11

有効回答数： 444

58. 1%
11. 7%
11. 0%
2. 3%
7. 2%
2. 7%
2. 9%
0. 9%
0. 7%
2. 5%

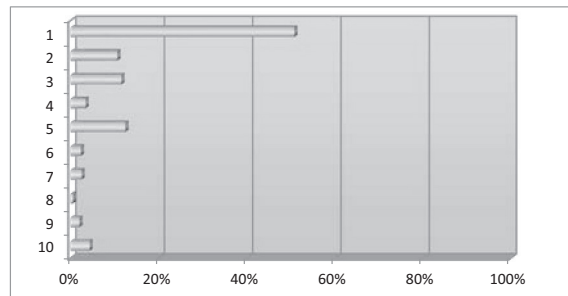


6 【土】 あなたは、1/17（土）に「授業以外で関心がある勉強」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	225
2	15分前後	47
3	30分前後	51
4	45分前後	15
5	60分前後	55
6	90分前後	10
7	120分前後	11
8	150分前後	2
9	180分前後	9
10	210分前後orそれ以上	19

有効回答数： 444

50. 7%
10. 6%
11. 5%
3. 4%
12. 4%
2. 3%
2. 5%
0. 5%
2. 0%
4. 3%

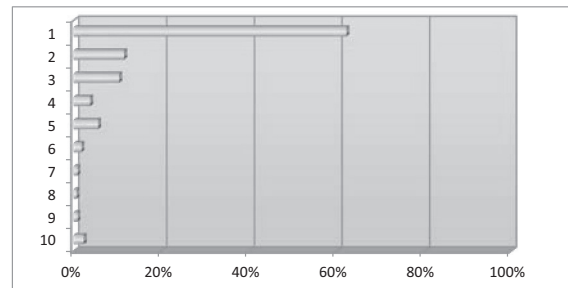


7 【日】 あなたは、1/18（日）に「準備学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	276
2	15分前後	51
3	30分前後	46
4	45分前後	17
5	60分前後	25
6	90分前後	8
7	120分前後	4
8	150分前後	3
9	180分前後	4
10	210分前後orそれ以上	10

有効回答数： 444

62. 2%
11. 5%
10. 4%
3. 8%
5. 6%
1. 8%
0. 9%
0. 7%
0. 9%
2. 3%

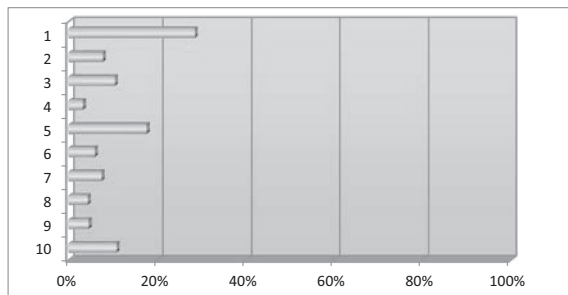


8 【日】 あなたは、1/18（日）に「課題・復習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	126
2	15分前後	34
3	30分前後	46
4	45分前後	14
5	60分前後	78
6	90分前後	26
7	120分前後	33
8	150分前後	19
9	180分前後	20
10	210分前後orそれ以上	48

有効回答数： 444

28. 4%
7. 7%
10. 4%
3. 2%
17. 6%
5. 9%
7. 4%
4. 3%
4. 5%
10. 8%

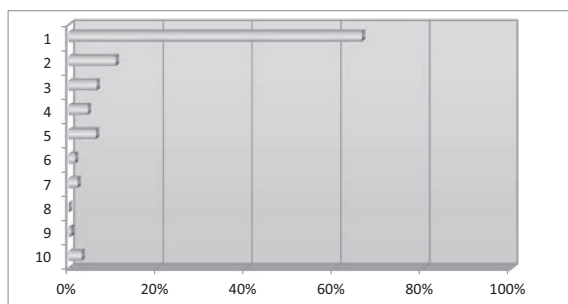


9 【日】 あなたは、1/18（日）に「授業に関するその他の学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	293
2	15分前後	47
3	30分前後	28
4	45分前後	19
5	60分前後	27
6	90分前後	6
7	120分前後	9
8	150分前後	0
9	180分前後	2
10	210分前後orそれ以上	13

有効回答数： 444

66. 0%
10. 6%
6. 3%
4. 3%
6. 1%
1. 4%
2. 0%
0. 0%
0. 5%
2. 9%

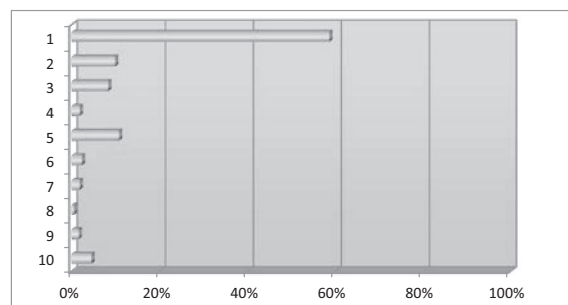


10 【日】 あなたは、1/18（日）に「授業以外で関心がある勉強」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	260
2	15分前後	44
3	30分前後	37
4	45分前後	8
5	60分前後	48
6	90分前後	10
7	120分前後	8
8	150分前後	2
9	180分前後	7
10	210分前後orそれ以上	20

有効回答数： 444

58. 6%
9. 9%
8. 3%
1. 8%
10. 8%
2. 3%
1. 8%
0. 5%
1. 6%
4. 5%

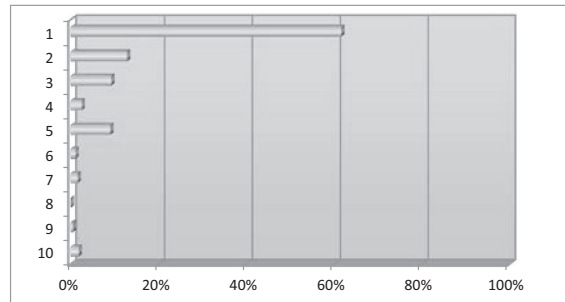


11 【月】 あなたは、1/19（月）に「準備学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	273
2	15分前後	57
3	30分前後	41
4	45分前後	11
5	60分前後	40
6	90分前後	5
7	120分前後	7
8	150分前後	0
9	180分前後	2
10	210分前後orそれ以上	8

有効回答数： 444

61.5%
12.8%
9.2%
2.5%
9.0%
1.1%
1.6%
0.0%
0.5%
1.8%

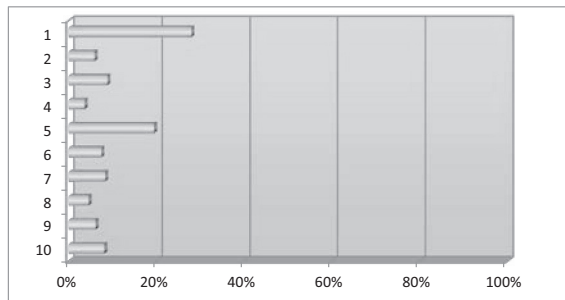


12 【月】 あなたは、1/19（月）に「課題・復習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	124
2	15分前後	26
3	30分前後	39
4	45分前後	16
5	60分前後	86
6	90分前後	33
7	120分前後	37
8	150分前後	20
9	180分前後	27
10	210分前後orそれ以上	36

有効回答数： 444

27.9%
5.9%
8.8%
3.6%
19.4%
7.4%
8.3%
4.5%
6.1%
8.1%

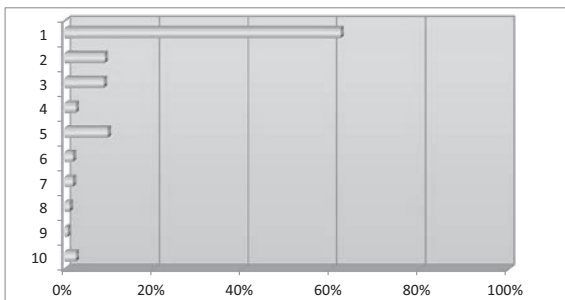


13 【月】 あなたは、1/19（月）に「授業に関するその他の学習」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	276
2	15分前後	40
3	30分前後	39
4	45分前後	11
5	60分前後	43
6	90分前後	8
7	120分前後	8
8	150分前後	5
9	180分前後	3
10	210分前後orそれ以上	11

有効回答数： 444

62.2%
9.0%
8.8%
2.5%
9.7%
1.8%
1.8%
1.1%
0.7%
2.5%

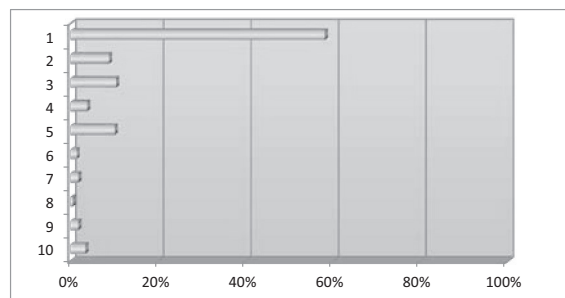


14 【月】 あなたは、1/19（月）に「授業以外で関心がある勉強」で何時間勉強しましたか？（必須）

No	回答	回答数
1	0分	258
2	15分前後	39
3	30分前後	46
4	45分前後	17
5	60分前後	45
6	90分前後	6
7	120分前後	8
8	150分前後	2
9	180分前後	8
10	210分前後orそれ以上	15

有効回答数： 444

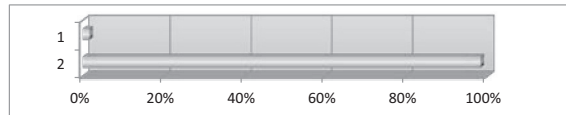
58.1%
8.8%
10.4%
3.8%
10.1%
1.4%
1.8%
0.5%
1.8%
3.4%



15 あなたの学修時間に関して、思っていることを自由に書いてください。（例：大変と感じていること、やりたいこと、工夫 等）

No	回答	回答数
1	回答あり	100
2	回答なし	5754
回答対象者数：		5854

1. 7%
98. 3%



No	学科	学年	回答
1	管理栄養学科	1年生	もっと集中してやれば時間をうまく作れるだろうな～と思う。洋楽を聴きながらやるとはかどる。
2	管理栄養学科	1年生	実習ノートの作成に時間がかかる。 土日は実習で習ったことを忘れないようにできるだけ料理をするようにしている。
3	管理栄養学科	3年生	レポートが最後にまとめて出されるので大変
4	管理栄養学科	3年生	今は課題が多い。
5	管理栄養学科	3年生	課題が多いため課題をこなすだけで精一杯でほかの学習ができない。
6	管理栄養学科	3年生	課題以外はまだ勉強していないと思う。 管理栄養学科なので管理栄養士を目指しているが4年生になるまで本格的な国家試験対策は学校でやらないため、やったほうがいいのかといつも感じながらやっていない。
7	管理栄養学科	3年生	隙間時間を上手に使い学習ができるように気を付けています。
8	管理栄養学科	4年生	密な計画を立てすぎない。
9	生活環境デザイン学科	1年生	建築に関した展示などあれば、積極的にいきたいと思っています。 課題は大変ですが、やりがいがあり、一生懸命取り組んでいます。
10	生活環境デザイン学科	3年生	パソコンを使うものは家でやり、持ち運べるものはアルバイトの合間にやっている。
11	生活環境デザイン学科	3年生	美術館に通いたい。
12	生活環境デザイン学科	4年生	興味のある勉強しか取り組めていない
13	国際言語コミュニケーション学科	2年生	バイトがない日に積極的に勉強に励もうと思っている。
14	国際言語コミュニケーション学科	2年生	授業以外でも自分のためにしたいことが多いので、朝早起きをして、学校とのバランスを調整している。
15	国際言語コミュニケーション学科	2年生	控室に電子レンジ、できればポットがほしいです。
16	国際言語コミュニケーション学科	3年生	もっと勉強したいので図書館の利用時間を延ばしてほしい。
17	国際言語コミュニケーション学科	3年生	隙間学習を多用している。運転中にトイックのリスニングCDをきいている。
18	表現文化学科	1年生	もっと自分の好きなことを調べる学習時間を取り入れられるように工夫したい。
19	表現文化学科	1年生	テストの日時の発表が遅く、アルバイトとの両立が難しいと感じることがある。
20	表現文化学科	2年生	土日はバイトとの両立が難しい。
21	表現文化学科	2年生	復習をもっときちんとやるべきだと考えているが、実行できていない。
22	表現文化学科	2年生	復習等はその日のうちに、遅くともその週の週末に行うようにしています。 現在は試験準備、特にレポートに手を掛けていたため上記のような結果になりました。
23	表現文化学科	2年生	英語のスピーキング力の強化
24	表現文化学科	3年生	TOEICの勉強がしたいが、自分のやりたい英語の授業や資格の授業、卒業単位のことなどを考えて授業を取っていると、課題などがたくさんあり、なかなか時間が取れない。 他の学校は一年、二年で授業を取る上限がないため、一、二年のうちに必修の授業を取り、三年生で自分の勉強(資格取得の勉強など)などできるが、 相山は履修時に上限の単位数が決まっているので、なかなか自分の時間を作るのが難しい。
25	表現文化学科	3年生	テスト前はちゃんと勉強するけど終わったら何もしない。語学勉強と読書は好きだからする。
26	表現文化学科	3年生	平日は電車に乗っている時間が長いのでその時間に学習している。
27	表現文化学科	3年生	時間が足りないと感じている
28	表現文化学科	3年生	登下校時は英語の勉強をするように心がけている。
29	表現文化学科	4年生	シラバスが明確かつ興味深い分野でない自主的な学習は難しい。 教科書でも参考資料でも何でも良いから特定した方が分かりやすいと思う。
30	人間関係学科	1年生	ない
31	人間関係学科	1年生	学修時間が少ないと思うけれど、なかなかやる気になれない。
32	人間関係学科	1年生	準備学習をしようと思って次の授業で何をやるか提示されていない講義が多くて手がつけれない
33	人間関係学科	1年生	英会話をやりたいです。
34	人間関係学科	1年生	要領良くやりたい。
35	人間関係学科	1年生	計画性がないので計画を立ててやっていきたい。
36	人間関係学科	1年生	試験が近いときは多く勉強をするが、普段は自発的に勉強をすることは少ない。
37	人間関係学科	1年生	語学(ドイツ語)の勉強が大変
38	人間関係学科	1年生	課題がない講義は聞くだけになってしまっていると思います。
39	人間関係学科	1年生	電車などの移動時間を使う。
40	人間関係学科	1年生	電車の中でも勉強している。
41	人間関係学科	2年生	理解すること
42	人間関係学科	3年生	テストが近いですが、バイト先が人手不足なので入る必要があるため勉強時間についてはある程度仕方ないと諦めています
43	人間関係学科	3年生	今は資格をとるための勉強をしっかりとやりたい。

No	学科	学年	回答
44	人間関係学科	3年生	授業内容で関心のあるものはあるが、そちらよりも教養試験の勉強の方が重要だと思うため、授業内容の勉強はほとんどしていない。
45	人間関係学科	3年生	期末レポートと中間レポートが重なり、課題に追われてしまい、他の学習が手に付かなくなりま
46	人間関係学科	3年生	自分のためにやること。
47	人間関係学科	3年生	赤池からのスクールバスが少なすぎて思うように学校へ勉強をしに来れない。 また、朝9時だいのバスなど、必要な時間に走っていない。 赤池からのスクールバスを増やし、そちらの方面からくる学生も、学校での勉強がしやすい環境を整えてほしい。同じだけお金を払っているのだから、星ヶ丘に新たにラッピングバスを作るよりも、赤池のバスの本数を増やしてほしい。学校へ勉強しに来れない。
48	心理学科	1年生	学習したいと思っていることや方法は頭にあるが、実際に行動に移す時間があまりなく過ぎてしまっている。
49	心理学科	1年生	特になし
50	心理学科	1年生	部活、バイト、勉強の両立がとて難しく、休息時間が全くなくレポートをやる時間も限られ、完璧な状態で提出するのが難しい。
51	心理学科	1年生	集中力がなくて困ってる。
52	心理学科	2年生	もっと効率よく学習時間を増やしたいため、学修環境を整えてほしい。
53	心理学科	3年生	なかなかやる気が出なくて、時間数は短い。
54	心理学科	3年生	バイトをしており時間に限りがあるため、そんなに多くできていません。 そのため、少しずつこなしていく感じでやっています。大変だと感じるときは時にあります。
55	心理学科	3年生	レポート等、いつもぎりぎりまでやらないので、余裕をもって、内容の濃いレポートを作成したい。
56	心理学科	3年生	授業日は必然的に夜、準備・復習・課題等をすることになるため、入眠が遅れたり、翌日の授業にひびくときがあります。これは自己管理の域なので優先事項を考えながら学修時間を得ようと思います。 それでも難はあり、自分の好きな事をやる時間と学修時間の両立に悩まされることが多いです。
57	心理学科	3年生	春休みなどの長期休暇の際には、普段できない講座の受講や資格の勉強に力を入れたい。
58	心理学科	3年生	毎日するものではなく、興味があることを、調べたいときにすべきだと思います。
59	心理学科	3年生	課題はなるべく大学で終わらせる努力をしている。
60	心理学科	4年生	やるべきことを、ここまでやったら遊んで良いなど、自分に課題を出してやりたいこととやるべきことを両立するようにしている。
61	文化情報学科	1年生	もっとたくさん勉強しなければと、感じています。レポートの作成に時間がかかってしまうので、勉強する時間が疎かになってしまいます。疎かにしないように注意していきたいと思います。
62	文化情報学科	1年生	学校のパソコンも利用しやすいし、もっと活用していきたい
63	文化情報学科	1年生	資格をとる勉強がしたいと思っている。
64	文化情報学科	1年生	通学時間で勉強時間が減っていることが大変。
65	文化情報学科	2年生	もう少し時間が取れれば勉強したいと思っています。
66	文化情報学科	2年生	テストの前の予備日(補講期間)の週になるとレポートが増えて大変
67	文化情報学科	3年生	ゼミとの兼ね合いが大変で、普段の授業勉強に支障が出たため、テスト勉強が大変でした。もう少し余裕を持って取り組みたかったです。
68	文化情報学科	3年生	土日はリフレッシュする時間、平日は勉強する時間とメリハリをつけてやっている。
69	文化情報学科	3年生	学習時間をつくることが大変です。
70	文化情報学科	3年生	長い間勉強していると姿勢が悪くて集中力が保てないので姿勢を直したい。
71	メディア情報学科	1年生	バイトをしているから時間がなかなかとれないことです。
72	メディア情報学科	1年生	学校のwordやExcelが家のパソコンと対応していないため、これらの課題が学校でしかできない。
73	メディア情報学科	1年生	複数の科目でレポート提出を求められた時が大変だと感じます。
74	メディア情報学科	2年生	資格の勉強を進めていきたい。
75	メディア情報学科	2年生	資格取得や、就活の勉強がしたい
76	メディア情報学科	3年生	今はバイトや授業で忙しくて、勉強時間がなかなかとれないので大変です。
77	メディア情報学科	4年生	関心があることを学べているので、勉強も苦にならない。
78	現代マネジメント学科	3年生	大学の勉強と、SPIなどの就活対策と並行して学習するのが大変。
79	保育・初等専修	1年生	どれだけ短時間でしっかり学修できるかを目標にしたい。
80	保育・初等専修	1年生	テスト勉強をする期間にレポート提出が重なり大変だと感じます。
81	保育・初等専修	1年生	自分の計画性がないために提出期限の直前に課題をやっているため、毎日何時間と決めて、効率よくやっていこう心掛けたいと思う。
82	保育・初等専修	1年生	集中してできるので、地元の図書館や大学に残って勉強することが多いです。
83	保育・初等専修	2年生	この3日間は泊まり込み実習中でした。
84	保育・初等専修	3年生	やりたいとは思っているが、思っている以上に時間がない
85	保育・初等専修	3年生	授業でのレポートに追われているため、自分が勉強したいことに十分な時間を確保できない
86	保育・初等専修	3年生	課題が多いため、他の勉強や読書などをやる時間が取れない。
87	保育・初等専修	4年生	卒業なので準備することがありません。
88	初等・中等専修	1年生	学校で残って勉強することが多いので、もう少し長く学校が空いていたら学習時間も伸びるかなと思います。

No	学科	学年	回答
89	初等・中等専修	3年生	風邪で寝込んでいて、この三日間は勉強出来ていない。 しかし、課題などの授業において必要な学修は全て終えている。 今は、自分の将来に関わる学修に集中していきたい。
90	看護学科	1年生	工夫:毎日の空いている時間、5分でも電車の中で授業プリントやノートを見直す
91	看護学科	2年生	課題が多くて、自己学習ができない。睡眠時間がなくなる。
92	看護学科	2年生	課題に時間をかけすぎている気がするので、もっと早く終わらせたい。試験勉強に時間をかけられない
93	看護学科	3年生	実習中のため、記録や事前学習などに時間がかかる。
94	人間関係学研究科	3年生	レポート作成の度に参考文献を読んで理解するのにとても時間がかかってしまうので、 空コマに図書館等を利用して、読解力を身に付けたいと思っています。
95	人間関係学研究科	3年生	授業に関する復習等はしてません。就職試験合格のための勉強はしています。
96	人間関係学研究科	大学院生	実習など色々なことに追われてしまう。
97	現代マネジメント研究科	1年生	興味のある事と、ない事では、モチベーションも変わってくるとありますが、 「必ず決めたところまではやりぬく」という気持ちを持って、課題や授業準備に取り組んでいます。
98	教育学研究科	1年生	もっと大学で受けている授業に対して真面目にならなければな、と思う。でも、 今年は英検の勉強や車の免許をとるための勉強もしたいなと思っているし、バイトもあるし、 大学生って思ったより忙しなって思います。
99	教育学研究科	3年生	教育学部棟が閉まるのが早い
100	教育学研究科	3年生	自分の興味のあることや、学びたいと思うことは積極的に 自ら時間をつくって勉強しようという気持ちが生まれる。

生活科学部FD活動報告（平成26年度）

生活科学部FD委員会委員

（管理栄養学科）石原健吾、及川佐枝子

（生活環境デザイン学科）阿部順子、橋本令子

（学部長・オブザーバー）間瀬民生

【1】活動計画（目標）

- ① 全学で実施される授業アンケートや授業参観などの参加率を高めるよう努力すること。
- ② 学部のFD活動を推進するために、学部教職員からの提案を積極的に募ること。
- ③ 予定されている学科行事をつつがなく達成すること。
- ④ 改革アクションプランのうち、FD委員会担当部分の推進

【2】実施報告

① 委員会の開催

平成26年4月22日（木）12:30～13:00 生活科学部1F小会議室にて。

その後、協議事項については、FD委員間のメール会議および各学科会議・教授会にて対応。

＜協議事項＞

- 改革アクションプランに関して、FD委員会としての対応を行うことを決定。具体的には新たに卒業時アンケートを実施する。
 - 授業アンケートは例年通り実施することを確認。
 - 授業参観は例年通り実施すること、参加率を高めるように呼びかけることを確認。
- ② 学部FD委員会ウェブサイトの更新
H26年度は喫緊に更新すべき内容がなかったため、H26年度学部FD活動報告の完成を待って、ウェブサイトの更新は行わなかった。
- ③ 購入した書籍
H26年度はFD活動に予算が割り当てられなかったために該当する執行はなし
- ④ H26年度に企画・実施されたFD活動
- H26年4月 新任教員に対し、各担当教員及び事務室からガイダンスを実施（管理栄養学科）（及川佐枝子 講師）
 - H26年6月 授業アンケート実施（全学）
 - H26年6月 授業参観週間（全学・7/1-7/22）、科研費取得のための研修会（全学・7/12）
 - H26年9月 新任教員研修合宿（八王子セミナーハウス）に参加（管理栄養学科・及川佐枝子講師）
 - H26年10月 教授会にて新任教員研究合宿参加者の感想の発表
 - H26年11月-12月 授業参観週間（全学・12/1-12/22）
 - H27年3月 卒業時アンケートの実施

【3】課題点

- 目標①については、本学部は授業アンケートでは、実施率 98.1%(全学 95.8%)、リフレクションペーパー提出率 82.4%(全学 75.4%)、授業参観でも前期 59.4%(全学 47.4%)、後期 37.5%(全学 36.7%)を達成しており、全学的にみれば健闘しているといえる。参加率アップのための働きかけは、教授会や学部メーリングリストを通じて全員にアナウンスという形で行い、非回答者・非参加者を把握してピンポイントで依頼をするという手間はかけていない。H27 年度はさらに FD 活動の意義をより丁寧に説明したうえでアナウンスを増やし、前年度より参加率が上がるようにしたい。
- 目標②については、各教員の研究教育分野に応じた FD 活動を推進するために学外における FD 研修への参加を呼びかけた。その結果、生活環境デザイン学科から建築系教員用 FD 研修会「建築学教育におけるアクティブ・ラーニング研究対話集会」(12/13(土) 芝浦工業大学)への参加希望の申し出があり、学部教授会で審議を行い学部教員 2 名の参加を決定した。しかし、本研修会は主催者側の理由により開催中止となり、参加を断念せざるを得なかった。H27 年度はこのような事態も踏まえて、より多くの学外 FD 研修の機会を捉えて参加を呼びかける必要がある。また、予算申請計画の折など、その都度、教授会でアナウンスを行ったが、積極的な提案はなかった。今年度より学部自動的に FD 活動のための予算がつかず、活性化予算を申請して獲得するシステムになったことも、低調に終わった要因かと思われる。
- 目標③については、予定通り実施することができた。
- 目標④については、今年度より卒業時アンケートを実施し、学生の 4 年間の学びに対する感想・意見を把握できたことは、教員にとって今後の教育の指針を確かめるために大変有益であった。

【4】次年度へ向けた計画

H26 年度に掲げた目標①②③④の達成度をみると、積極的に FD 活動を推進する力がまだまだ弱いことがわかる。FD 活動の意義と重要性を FD 委員がまず理解し、他の教職員の理解を助け、積極的な提案や活動が生まれるように、アナウンスの仕方を工夫する。また、FD 委員自らも積極的に提案を考え、実施報告の内容が増えるように、学部の協力のもと様々な活動を実現していきたい。そのためには、参加率など既存の学部 FD 活動の現状をより詳細に把握していく必要もあるかもしれない。

両学科教員とも、個人レベルではそれぞれ授業や学科運営業務などで様々な改良を試みていることと推察される。しかしながら、各自の試みが現状では十分相互に認識されているとはいえない。個々の努力と成果をどのように共有できるか、そのためのプラットフォームづくりも次年度検討していきたい項目のひとつである。

卒業時アンケートは今年度初めての実施となり、両学科で得られた結果をふまえ、さらなる授業改善の材料としていくこと、ならびに卒業時アンケートの実施内容についても引き続き検討することが必要だと考えられた。(以上)

管理栄養学科 卒業時アンケート

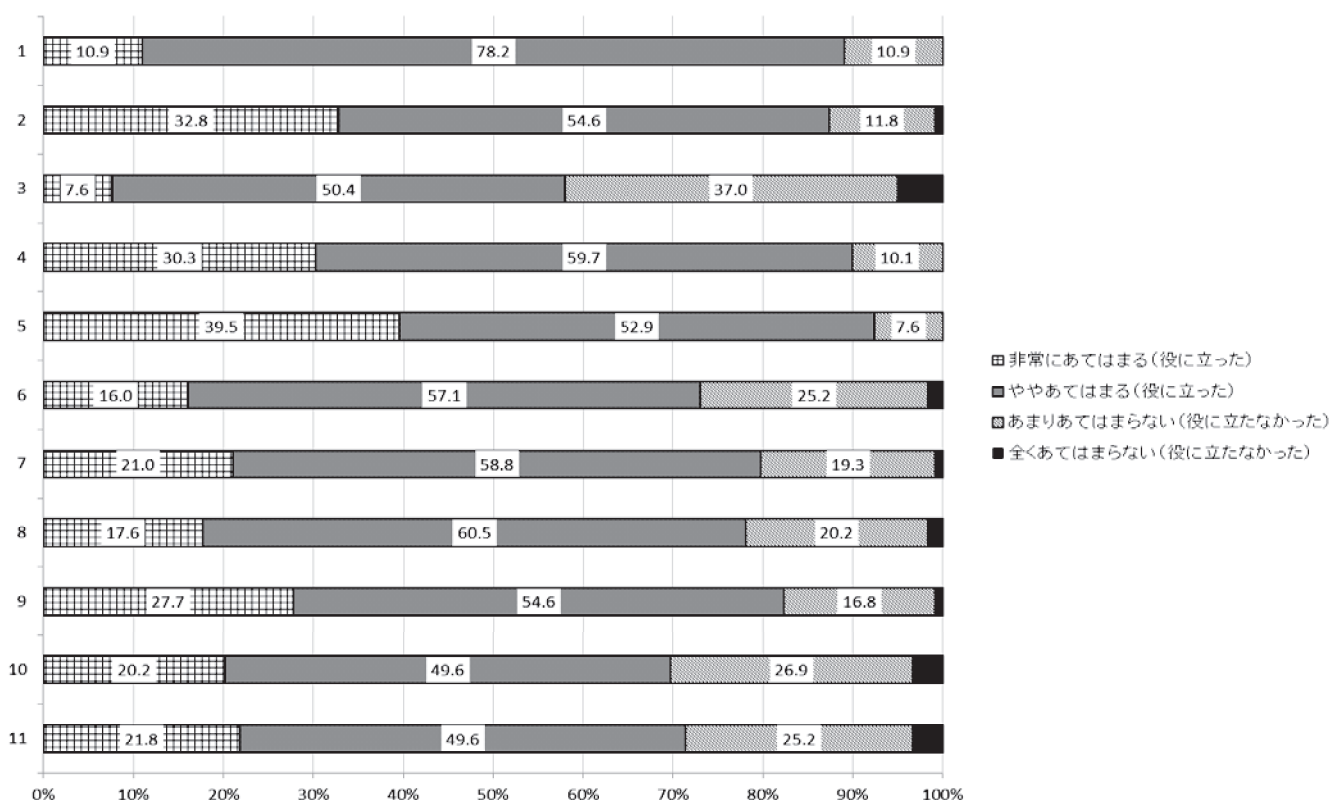
〔概要〕

管理栄養学科4回生を対象として2015年3月2日(月)に実施。121名にアンケート用紙を配布し、119名から回答が得られた。

〔設問〕

1. 「講義」、「実習・実験」、「臨地実習」を組み合わせたカリキュラムによって、知識と技術の修得とともに、情報の収集とまとめ方、プレゼンテーション力及びコミュニケーション力、管理栄養士としての実践力を養うことができたか？
2. 3年次の「専門演習」と4年次の「卒業研究」を通じて、研究テーマに関わる情報収集と知識の修得、研究手法と科学的考察を通じ、論文作成力などを養うことができましたか？
3. 4年次の「栄養総合演習」を通じて、管理栄養士に必要な知識と技術の総復習と横断的な知識及び応用力を強化することができましたか？
4. (知識・理解) 4年間の学びを通じて、食と健康に関連する幅広い知識・技能を身につけ、それらの知識・技能を社会貢献のために発揮するための基盤を築くことができましたか？
5. 4の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
6. (思考・判断) 4年間の学びを通じて、健康で快適な暮らしを提案するために、食と健康に関連するさまざまな課題を的確に分析し、実践的かつ創造的に自らの見解を形成するための基盤を築くことができましたか？
7. 6の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
8. (態度・志向性) 4年間の学びを通じて、地域やコミュニティ、食品産業や医療・福祉現場などで、食と健康に関連するさまざまな問題に責任感を持って対処するための基盤を築くことができましたか？
9. 8の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？
10. (技能・表現) 4年間の学びを通じて、さまざまなライフステージの人とのコミュニケーションを図ることができ、食と健康に関連した分野で高い専門性を発揮するための基盤を築くことができましたか？
11. 10の目的に、本学科の教育はどのくらい役に立ちましたか？

〔結果〕



〔まとめ〕

「栄養総合演習」については、半数近くが、「あまりあてはまらない」、「全くあてはまらない」を選択したが、その他の項目については、7割以上の学生が肯定的な回答をした。特に、項目1,2,4,5の「知識・技術」、「専門演習」、「卒業研究」については、約9割の学生が「役に立った」と実感していることがわかった。

生活環境デザイン学科 卒業時アンケート

〔概要〕

生活環境デザイン学科 4 年生(90 名)を対象として 2015 年 3 月 14 日(土)に実施した。

〔設問〕(非常にあてはまる、ややあてはまる、あまりあてはまらなかった、全くあてはまらない)の 4 択で回答

1. 学科の目的に関して：
専攻した分野のもののづくりの実践を通して、次世代の快適な生活環境を創造することができる人材に、あなたはなれそうだと思いますか？
2. 学科のディプロマ・ポリシーに関して：
大学生活の 4 年間で、生活環境について、生活者・消費者の視点から科学的に探求する素養とともに、それを具体的なデザインとして提案・実践することができる基本知識と技術を身につけることができたと思いますか？
3. 学科のディプロマ・ポリシーに関して：
豊かな教養と人間性を持って、生活環境の向上に貢献できそうですか？
4. 学科のディプロマ・ポリシーに関して：
生活環境を、生活者・消費者の視点から科学的に探求することができるようになったと思いますか？
5. 学科のディプロマ・ポリシーに関して：
専攻した分野の専門知識と技術を身につけ、それを具体的なデザインをして提案・実践することができるようになったと思いますか？
6. 知識・理解について：
生活環境全般への幅広い視点を得た上で、選択した分野における高度な専門知識を修得したと思いますか？
7. 思考・判断について：
生活環境に関わる諸問題に、修得した専門性を活かして創造的に取り組むことができると思いますか？
8. 態度・志向性について：
ものづくりの喜びを感じながら、心地よい暮らしのデザインを試行錯誤を重ねて提案できますか？
9. 技能・表現について：
職業人として必要な生活環境に関する資格取得を可能にする専門的技能を有し豊かな表現力・企画力を身につけたと思いますか？
10. 入学時に目指した資格や免許に必要な科目を十分履修することができましたか？
11. 本学科の 4 年間の学びは、あなたにとって充実したものでしたか？
12. 本学科の 4 年間の学びに、あなたは満足していますか？
13. 本学科の 4 年間の学びは、あなたの将来に役立ちそうですか？
14. 大学生活全体は楽しかったですか？
15. 本学科に愛着を感じますか？
16. あなたは本学科で 4 年間がんばって学んだと思いますか？
17. 本学の学びはあなたに自信をつけましたか？
18. 本学科の 4 年間の学びについて、ご自由にご意見・ご感想をお書き下さい。

〔結果〕

設問 1 では、「非常にあてはまる」20%、「ややあてはまる」68.9%と大多数が学科の目的に合致していた。

設問 2-5 のディプロマポリシーについても、82-90%が肯定的な回答を寄せた。育成する 4 つの能力に関する設問 6-9 についても、肯定的回答が 77.1-87.8%を占めている。とりわけ、設問 8 では、「非常にあてはまる」が 40%、「ややあてはまる」46.7%となっており、学科が大切にしている「ものづくりの喜び」を多くの学生が経験できたことがわかった。

設問 10 では、57.8%が「非常にあてはまる」、25.6%が「ややあてはまる」と回答し、資格取得については 6 割近くの学生が当初の目的を達成できたことがわかった。

設問 11-14 は 4 年間の学びの満足度を問うたものであるが、「非常にあてはまる」がいずれも約 65%であった。設問 15 では愛着を尋ねているが、63.3%が「非常にあてはまる」、32.2%が「ややあてはまる」と回答しており、回答者のほとんどが学科への愛着を抱いていることがわかった。設問 17 では、94.4%が肯定的な回答で、うち 44.4%が「非常にあてはまる」を選択していた。

設問 18 の自由記述では、卒業研究時のルール違反に関する疑義等が 2 件示された以外は、「たいへんなこともあったけど身に付くものが多かったと思います」「たくさんのことを学びました。女子大だからこそ、相山だからこそ学べることを後輩にもたくさん気づいてほしいと思います。4 年間本当に楽しかったです！」「環デに入ってよかったです！」など、高い満足度を表す記述ばかりであった。

〔まとめ〕

以上の回答結果から、本アンケートの回答者の多くが、学科の設定している目標に到達し、充実感・満足感をもって卒業していることがわかった。今回のアンケート回答者は任意であったので、肯定的な回答が多く寄せられた可能性があるため、次年度以降、できるだけ多くの学生の回答を回収し、より精度の高い調査を行いたい。

国際コミュニケーション学部 FD 活動報告

1. はじめに

国際コミュニケーション学部では現在、大幅なカリキュラムの改革が為されている。特に英語科目における変化が大きい為、英語科目に関する調査を縦断的に行うこととした。今年度は、その1回目である。卒業する学生に対し、英語科目に特化し、自分がどの程度の修得をしているかを達成度として尋ねた結果を以下に報告する。

2. 調査の内容と方法

使用した調査用紙を、資料として巻末に付す。

大学4年間で、どこまで語学を習得出来たかを尋ねるのには、具体的な選択肢を提示し、客観的に答えられるようにした。主観的な選択肢（例：「よくできた」「まあまあよくできた」等）の場合、無意識に謙虚な答えになってしまうことが考えられるので、それを避ける為である。英語が調査の目的となるが、表現文化学科では英語をとらない学生がいる為、言語コミュニケーション学科とは別の質問を用意した。さらに、ドイツ語やフランス語に興味を持つ学生が一定数いることも配慮した構成とした。

実施したのは、卒業式の学位記授与の後である。慌ただしい雰囲気も考慮して、できるだけ○をうつだけで終わるようにしたが、具体的な科目名と今後の希望は記述式とした。

3. 国際言語コミュニケーション学科

有効回答数は105名であった。

問1. の英語がどの程度身に付いたと感じているかに対する回答は以下の通りである。

議論	日常生活	旅行	少し分かる	身に付かない
13	43	41	8	0

1割を越す学生が、議論や研究と言った活動を行うのに十分な英語が身に付いたと感じている。9割以上の学生が、旅行レベルでは不自由しないと感じており、身に付かなかったと感じる学生はいない。十分な英語力を身に付けて卒業出来る、と感じている学生がほとんどである。それでは、それらは学生の入学前の期待にどれくらい沿えているのだろうか。

問2. の期待に答えられたかの問いに関しては、以下のような回答があった。

十分上回る	やや上回る	ほぼ期待通り	やや期待外れ	期待外れ
16	30	41	16	2

ここでも、半数近い学生が期待以上の教育を受けられたと評価している。一方で、「まったく期待に答えていない」との評価も2名あった。いずれも、他の質問にほとんど答えておらず、アンケート自体に対してネガティブな態度を持っていたようである。学習された言語のレベルは、「少しわかる程度」「旅行等で役に立つ程度」であった。

ここで、言語の習得レベルを得点化して、「期待に応えてもらえた」という実感と「どの程度、英語が習得できたと感じているか」の関係をみることにする。

「期待を十分上回る」とした学生の平均は 4.41 であった。ほとんどが、議論や研究が可能なレベルに達している。「期待をやや上回る」とした学生の平均は 4.00 であった。「ほぼ期待通り」では 3.60、「やや期待外れ」では 2.75 となった。入学前の期待を、伸ばしたいと思った能力をいくつか挙げているかで比較したところ、すべての群で 2.00 前後でほとんど変わらない値だったが、伸びた能力では「十分」の群が 2.76 であるのに比べ、「やや期待外れ」の群では 1.38 と大きな差が見られる。もともとのモチベーションには違いがないと考え、入学後の何が、満足度の違いを生むのかを、来年度以降の調査で明らかにすることが望まれる。

「役に立った科目」では、一年生のときに毎日学ぶ communicative English が「読む」「書く」「聞く」「話す」のすべてにおいて、圧倒的な多さであった。Advanced English、expressive English も多く挙げられていた。「TIME/Newsweek を読む」も「書く」以外で挙げられた。

「こういう科目があったら」というアイデアを募る設問に対しては、「会話を強化する授業」「英語で講義を受けたい」「TOEIC の授業をもっと受けられるようにしてほしい」といった内容が多く見られた。

多くの学生が、毎日積み重ねていく学習が身についたと評価していることが明らかにされた。

4. 表現文化学科

当学科では、外国語の履修は一種でも卒業できる。2種を履修することも可能であり、通年で前・後期1コマずつで開講される「中国語」「スペイン語」もある。当学科の特徴として、国際言語コミュニケーション学科を第一希望としていたが、こちらに来た学生が一定数存在し、英語への意欲が高い一方で、英語が苦手だから当学科を志望した学生も多く、後者はすでに実力差のある英語ではなく、フランス語・ドイツ語を選択することも多い。新たな言語を学びながら、同時にその言語圏の文化を学び、留学等を通していわゆる「はまった」状態になる学生も見られる。複数の言語を学ぶ学生の動機として、複数の文化について知りたいということもある。

それらを踏まえて、表現文化学科のデータは主に学んだ言語を軸として分析した。有効回答数は90、それぞれの言語を選択した学生数は以下の通りである。1名、主に学んだ

言語を中国語とした学生がいたが、当学部のカリキュラムではあり得ないので、分析から外した。

英語	ドイツ語	フランス語	中国語	スペイン語
65	34	24	34	12

中国語を選択した学生が多いのは、前・後期合計4単位の授業が行われており、国語やアジアに興味のある学生が、多くいることの表れと考えることができる。

主に学んだ言語を英語とした学生は、47名だった。言語を習得したと感じているレベルは以下の通りである。

議論	日常生活	旅行	少しわかる	身につかない
3	6	22	15	1

言語と比較して、やはり全体の値は低い。しかし、3名が議論や研究ができるとしており、2割近くが英語圏で生活するのに苦労はしないところまで、英語が習得できていると感じている。

どの授業が役に立ったと思うかの質問には、言語学科と同様の **communicative English** も多く挙がっていたが、それよりも資格の取得に役立った **TOEIC** の評価が高かった。表現学科では、それとは別に、面白かった授業という問題も設けたが、こちらは多彩で通訳・対照言語学・**Reading Strategy** といった実用的な英語や、**international teachers**（当学部では **native** という言い方をしない。多彩な言語に関する科目を開講した結果、必ずしも母国語を教えている教員ばかりではなくなったからである）英語以外のこと（映像や文化の違い、政治）について教える科目が挙げられていた。

主に学んだ言語をドイツ語とした学生は、29名だった。言語を習得したと感じているレベルは以下の通りである。

旅行	少し	身につかない
3	19	7

大学生になってから学び始めた言語ということで、英語と比較して、身についた実感は薄い。しかし、旅行に行って困らないとした学生が3名いるのは、4年間で相当熱心にドイツ語を学んだ結果と考えられる。

役に立った授業としては、木村クリスタ先生のドイツ語が一番多く挙がっていた。「総合

ドイツ語は本当に役に立ちます」「難しかったけど、基礎はしっかりわかりました」といった詳細なコメントがつけられていることも多く、学生の支持の大きさがわかる。

同科目は面白かった授業にも挙げられている。他にも、「ジブリをドイツ語で学ぶのが面白かった」「ドイツ語が意外と日本語に入ってきていることを教えてもらえた」等の意見があった。さらに「海外演習」つまり留学を挙げている学生が複数おり、当学科らしい深い学習がされていたことが示唆される。

主に学んだ言語をフランス語とした学生は、13名だった。言語を習得したと感じているレベルは以下の通りである。

日常生活	旅行	少し	身につかない
1	3	6	3

日常生活レベルの学生が1名あり、自身の習得レベルを高く評価している学生の割合が多い。これも、ゼロから初めて、4年間しっかり学習した結果だと思われる。

役に立った授業としては、フランス語Ⅰ・Ⅱが「基礎から学べてよかった」「ことば以外のフランスのことも教えてもらえた」等の意見と共に挙げられていた。

面白かった授業では、「映像を使った授業」「日本との比較をしてくれると面白い」といった意見が挙がっており、また、こちらでも「海外演習」が挙げられ、ドイツ語とフランス語の傾向を合わせると、少数の学生が深い学習をするというのが現状であろう。

今後、どのような語学関連の科目があったら良いと思うかについては、韓国語が圧倒的に多かった。それ以外にも、アジア圏について学ぶ科目があれば良いとの意見が多かった。その一方で、やはり英語に対するニーズも高く、TOEICの授業を増やして受講の機会を広げてほしい、international teachersによる語学以外の授業があれば受けたい、といった内容の意見が見られた。

5. まとめと展望

全体に学生の自己評価も満足度も高く、記述科目への対応も熱心であった。英語教育に主眼を置いて作成した調査であったが、表現文化学科における英語以外の言語学習に対する熱意を確認する結果にもなった。

2015年度、新たに導入された科目の中には、ここで見られた学生の要望と一致したものもあり、今後どのような成果を得られるかに注意を払う必要があるだろう。

国際コミュニケーション学部FD委員としては、今後も同様の調査を行い、カリキュラムの改定が学生にどのように受け止められているかを見ていく所存である。

【附録 1】 国際言語コミュニケーション学科調査用紙

平成 27 年 3 月 14 日

国際コミュニケーション学部
国際言語コミュニケーション学科
達成度調査

ご卒業おめでとうございます。

卒業にあたり、みなさんが大学４年間で英語を修得したと感じている程度について、以下の質問にお答え下さい。

1. 大学4年間の課程を修了して、英語はどの程度まで修得出来たと思いますか。
 - a. 英語で研究・議論等の日常生活以上の活動ができるレベル。
 - b. 日常生活を送るのに支障がないレベル。
 - c. 旅行等に行ったとき役立つレベル。
 - d. 少しはわかるレベル。
 - e. あまり身につかなかった。
2. それは、入学前の期待を上回ることができていますか。
 - a. 期待を充分上回ることができた
 - b. 期待をほぼ上回っている
 - c. だいたい期待通り
 - d. やや期待に届かなかった
 - e. 期待以下
3. 入学前に、伸ばしたいと期待していた能力は以下のうち、どれですか。(複数回答可)
 - a. 読む b. 書く c. 聞く d. 話す
4. 実際に伸びたと感じている能力は以下のうち、どれですか。(複数回答可)
 - a. 読む b. 書く c. 聞く d. 話す
5. 以下の能力を伸ばすのに、役立ったと思う科目はなんですか。(複数回答可)

読む	→	(		)
書く	→	(		)
聞く	→	(		)

話す → ()

6. この学科に、こういった英語の授業があればいいというアイデアがあれば挙げて下さい。

()

ありがとうございました。みなさんの新しい日々が幸多いことをお祈りします。

【附録 2】表現文化学科調査用紙

平成 27 年 3 月 14 日

国際コミュニケーション学部

表現文化学科

達成度調査

ご卒業おめでとうございます。

卒業にあたり、みなさんが大学４年間で外国語を修得したと感じている程度について、以下の質問にお答え下さい。

7. 4年間の課程内で、どの言語の授業をとりましたか。

a. 英語 b. ドイツ語 c. フランス語 d. 中国語 e. スペイン語

8. 主として学んだ言語はなんですか。そしてそれは、どの程度達成されていますか。

() 語

f. 研究・議論等の日常生活以上の活動ができるレベル。

g. 日常生活を送るのに支障がないレベル。

h. 旅行等で外国に行ったとき役立つレベル

i. 少しはわかるレベル

j. あまり身につかなかった

9. 4年間で、役立ったと思う外国語の授業を挙げて下さい。できれば理由もお願いします。(複数回答可)

10. 4年間で、学んで良かった、面白かったと思う外国語の授業を挙げて下さい。出来れば理由もお願いします。3. と重複しても結構です。(複数回答可)

11. この学科に、こういった外国語の授業があればいいと思うものがあれば挙げて下さい。

ありがとうございました。みなさんの新しい日々が幸多いことをお祈りします。

アクティブ・ラーニング論：e-Learning システムを利用して

人間関係学部

杉藤重信

1、はじめに

本論の目的は、報告者がこれまで実施してきた授業の手法を振り返りながら、「アクティブ・ラーニング」の効果について検討し、昨年度実施した授業科目の「授業アンケート」の分析を試みることにある。本論の背景となる手法は、もともとは、講義科目の授業において出欠管理のために学生証をもちいて磁気カードリーダーをもちいる方法を思いついて出欠を Excel で管理しはじめたこと、また、「電子掲示板」を演習形式の授業で利用しはじめたことにある。いずれの試みも、じつは大学の危機管理をきっかけにしたものであった。それは、2003 年度のことであった。まずは、その時点までさかのぼってみることにしよう。

2、危機管理と出欠管理

【危機管理】 報告者は、当時、学部長二期目（2003／2004 年度）で、全学の「危機管理」に関するワーキンググループを主管していた。現在でも状況は同様ではあるが、当時は、東海沖地震の発生が懸念されて、大学における危機管理手法の模索が行われていた。現在は、S*map の形で授業管理システムが導入されているが、当時のワーキンググループでは、危機管理のために授業管理システムをどのように活用運用すべきかを検討していた。

すなわち、学生が授業管理システムを日常的に利用することにより、大学との連絡を緊密にするということが大学の危機管理にとって極めて重要という考え方であった。現在の S*map のシステムでは、学生は受講登録の際に全員が利用しているはずであるが、これまで 10 年ほどのシステム運用が行われているにもかかわらず、必ずしも全員が利用しておらず、期限までに完了できない学生が少なからず存在する。ましてや、日常的に「ジャーナル」をチェックしている学生の割合はどの程度であろうか。

S*map の「ジャーナル」は開封をチェックできるので確認することができる。たとえば、授業対象者にジャーナルを流してみても、つまり、授業連絡については少なくとも 1 週間に一度は見るだろうとおもいきや、開封率は 1 週間後で 20%に届くかどうか、数週間たっても 50%を超えるかどうかというのが、ジャーナル開封率の現状である。ましてや、セミナーの案内など、学部学生全員を対象としてジャーナルを送ってみても、その開封率は当然のことながら授業よりも低い。関心が低いからであろう。

2003 年当時の問題意識は、緊急の連絡、たとえば、危機管理の必要上、大学が学生全体に連絡をして、学生の安全確認をしようとした場合、全員は無理としても、「ほぼ」全員に連絡が取れなくてはならない。そのためには、日常的にチェックしてもらえるようなシステムはどうあるべきかを検討していた。

当時のワーキンググループは、地震の専門家を開いてセミナーを開催し、また、避難訓練を提言して最初の避難訓練が実施された。しかし、残念ながら、授業管理システムにかかるワーキンググループの最終報告は生かされなかった。現行の授業管理システム S*map の導入にあたって、われわれの議論の経緯とは、まったく関係なく導入が検討されることとなった。

危機管理のためには、学生たちが日常的に授業管理システムを利用しなければ、危機の際にだけ利用するわけもない。日常的にシステムを利用するよう習慣付けしなければならないのである。そのためには、すべての授業で利用してもらう必要がある。しかしながら、とりあえず可能であったのは、報告者の授業で実践してみるということであった。出欠管理のために磁気カードである学生証を利用し、また、日常的に担当者との連絡を密にするようなシステムを自分の授業で模索し始めたのは、以上のような経緯があったからである。

【出欠管理】 出欠管理の目的は、キャンパス内に滞留する学生が誰かを把握することにある。すなわち、あつてはならないことだが、地震で校舎が損傷をうけてグラウンドなどに避難した場合、教室に残された学生がいいるか確認する必要があるだろう。現状ではキャンパスへの出入りは自由で、授業での出欠管理は厳密ではない。そうした場合、学生の安否情報を確認できるだろうか。実際問題、完璧を期すことはほぼ不可能といえるが、せめて受講する学生を把握することはできないだろうか。大学によっては、教室の壁面に非接触型の IC カードリーダーを設置している事例がある¹が、これは、学生が自発的に利用

	A	B	C	D	E	F	G	H
1	平成26年度 後期 現代文化論							
2	日付	9月25日	93		10月2日	130		10月9日
3	1	○	○	○	○	○	○	○
4	2	○	○	○	○	○	○	○
5	3	○	○	○	○	○	○	○
6	4	○	○	○	○	○	○	○
7	5	○	○	○	○	○	○	○
8	6	○	○	○	○	○	○	○
9	7	○	○	○	○	○	○	○
10	8	○	○	○	○	○	○	○
11	9	○	○	○	○	○	○	○
12	10	○	○	○	○	○	○	○
13	11	○	○	○	○	○	○	○
14	12	○	○	○	○	○	○	○
15	13	○	○	○	○	○	○	○
16	14	○	○	○	○	○	○	○
17	15	○	○	○	○	○	○	○
18	16	○	○	○	○	○	○	○
19	17	○	○	○	○	○	○	○
20	18	○	○	○	○	○	○	○
21	19	○	○	○	○	○	○	○
22	20	○	○	○	○	○	○	○
23	21	○	○	○	○	○	○	○
24	22	○	○	○	○	○	○	○

図 1 Excel による出欠管理

¹ 報告者の個人的な経験では名古屋学院大学白鳥キャンパスの教室に設置されていた。以前、非常勤講義を担当したおり目撃したが、当時、教員は必ずしも活用する義務はないようであった。

する場合や教員が出欠管理をしない場合には、教室内の学生個人の所在を確認することはできない。そこで、せめてもと始めたのが、自分自身の授業での出欠管理のための磁気カードリーダーの活用であった。

現在、学生証の磁気情報は、図書館の出入り管理や貸出管理、証明書発行機で利用されていて、磁気情報にふくまれるのは学籍番号である。USB 形式の磁気カードリーダーで読み取ると Excel の所定のカラムに入力することが可能である。あらかじめ Excel に受講登録者の学籍番号や学生氏名を記録しておき、入力された学籍番号と照合することによって出欠管理することが可能である。報告者の場合、おなじ表に期末試験の成績も入力して、成績つけにあわせ活用している。学則では 3 分の 2 の出席により成績評価を受けることができるとあるので、とくに、就活中の 4 年生や教職課程や社会福祉コースの学生の欠席について考慮に加えることができる。

一方、演習形式の授業では、いわゆる「電子掲示板」²をもちいることとした。4 年生になると学生はどうしても就活に積極的になる。とくに、演習授業のように学生の主体的参加が重要な課題となる授業では問題である。そこで、テーマやディスカッション内容について、できるかぎり忠実に入力して電子掲示板に記録し、たとえ、授業そのものに参加できなくても、授業終了後のディスカッション（書き込みのこと）に参加できるようにした。現在利用しているのは、WebClass という e-Learning システムで、S*map の「授業サポート」タブから利用が可能である。しかし、このシステムは報告者にとって 3 代目にあたり、WebClass の前には NetCommons という国立情報学研究所のサービスを利用していた³。しかしながら、自分自身でシステム・アップデートを管理しつつ運用することは荷が重いと考え、バージョンアップを期に 2013 年度当初より本学の学園情報センターがサービスのひとつとして実装していた WebClass という e-Learning システムに移行することにした。電子掲示板を演習形式で利用しはじめたのは、2003 年後期からであるから、WebClass 以前は、ほぼ 10 年自分自身で管理運用したことになる。

3、双方向的な授業、e-Learning システムの利用

【双方向的な授業】 WebClass は e-Learning システムとして、電子掲示板のほか、チャットや資料提示、アンケート、テストなどのサブシステムがふくまれていて、以前

² たとえば、総務省のウェブページには「電子掲示板」について、以下の様な記載がある。

http://www.soumu.go.jp/main_sosiki/joho_tsusin/security/basic/service/06.html

³ 国立情報学研究所で開発された NetCommons をダウンロードしてサーバにインストールして、運用していた。バージョンの更新を考えると、おそらく、2005 年に以前のシステムから、NetCommons に移行している。<http://www.netcommons.org/>

の NetCommons では、電子掲示板しかもちいていなかったが、WebClass への移行を契機として講義科目でも双方向的な授業を実現してみることにした。これがもう一つの理由であった。もともと e-Learning システムを活用する目的は、あらかじめ予習教材としての教材提示の手段とすることが多いが、報告者の場合、むしろ、振り返り学習（復習）の手段として e-Learning システムをもちいることとした訳である。

将来的には教材提示による事前学習と組み合わせる方法を検討してみたいが、報告者には、いささか、懐疑的である。と言うのは、例えば、ハーバード大学のサンデル教授らが行っているいわゆる反転授業、あるいは「ソクラテス形式」の授業は、チュートリアルと一体になってはじめて可能であると考ええる。つまり、授業と同時間のチュートリアルとがセットになっていて、チュートリアルにおいてはチューターがあらかじめ与えられた教材をもとに事前学習を行わせ、問題点の整理をおこなう。受講生はチュートリアルにおける事前学習を経て、「ソクラテス」の役割を担う担当者とのディスカッションに臨むのである。そのような授業方法であれば、反転授業が可能であるかもしれないが、チュートリアルのない本学の授業方法で可能であろうか。

自習による教材の事前提示に基づく事前学習では、自習を行うかどうかは学生次第である。この場合、学生の基礎学力レベルや動機付けの高さに依存することになり、たとえば、反転授業あるいは「ソクラテス形式」授業が可能であったとしても、ごく一部の学生のみが、その学習成果を享受できると思われる。そこで、まずは、振り返り学習の手段としてこの e-Learning システムをもちいることにより、学習成果を享受できる学生数を



図 2 WebClass ログイン後のレイアウト

をかさ上げできるのではないかと考えた理由である。

【e-Learning システムの活用】

さて、WebClass のシステムは S*map の認証システムを利用するので、担当者と学生は、S*map にログイン



図 3 WebClass のコンテンツ

ンして利用できる⁴。また、WebClass はパソコン環境のみならず、スマホや携帯電話での利用も可能であるので、最近の学生の利用環境としても利便性が高いといえるだろう。

年度始めに学園情報センターの担当者に、開講授業名と時間割をつたえ、初期設定を依頼する。その後で、受講登録の完了とともに S*map から受講者名簿の csv ファイル形式ダウンロードし、受講学生を授業ごとに一括登録する。

演習形式の授業では、「会議室」というコ

ンテンツに「掲示板」を用意し、「テスト／アンケート」というコンテンツには授業日ご

との書き込み欄の「今日の授業で学んだこと」を用意する。「会議室」コンテンツの内容は受講生と担当者の誰もが読み書きできるが、「テスト／アンケート」は各受講生が書き込め、担当者だけが閲覧することができる。

また、講義科目では「会議室」コンテンツは用意せず、「テスト／アンケート」コンテンツに「今日の授業内容」（何を学んだのか詳細を記入させる）と「コメント／質問」の欄を用意して、学生に記入させる。テスト／アンケート」は個々の受講生が書き込み、担当者だけが閲覧することができるのは演習形式のそれと同様である。

初回授業で、利用方法に関する文書を配布しガイダンスをおこなう。前期授業の場合、学生名簿が整い受講者全員が利用可能になるのは2週目以降のことであることを留意しなければならない。しかし、後期の場合、既に前期で受講登録済みの名簿があるので、履修登録修正はわずかな数にとどまる。

講義形式の授業では、学生は、すでに記したように2項目の記入を書き込み期限付きで求められる。書き込みは授業時間終了10分前から記入可能であり、当日の夜半1時半まで記入を許可している。当初は0時までとしたが、夜間のアルバイトをしている学生が帰宅して記入するためには締切時間の設定が早過ぎると指摘されたからである。

授業回数分だけ、書き込み欄があり、また、記入の少ない学生（主として、4年生を想定しているが対象は全員である）に対して「補足レポート」の記入を求めた。その内



図 4 WebClass : 「会議室」コンテンツの例

⁴ S*map を経由せずに、<https://webclass.sugiyama-u.ac.jp> にアクセスすることも可能である。このサイトを利用すれば、S*map のメンテナンス中にもアクセス可能である。

容は、「これまでの授業で取り上げられたテーマの中から一つ選び、そのテーマについて考えるところを記入しなさい」というもので、これは、レポートとみなして、一週間の書き込みを許可した。そして、報告者の独自項目による「授業アンケート」も同じシステムをもちいて実施した。「授業アンケート」については、のちに触れる。

授業は、毎回テーマを選んで講義を行い、学生には2項目の記入を求めた。2回目以降は、目標としては15-20分程度の時間を目安として、回答を要とするコメントや質問を選び、これに答えた。すべての書き込みに答えるわけではなく、振り返り学習してもらいたい項目について、「コメント返し」を実施し、その後、その時間の講義テーマに基づく講義を実施した。学生の中には、当日のうちに書き込みを失念したものもあり、紙ベースのコメントシートが望ましいと訴えたが、失念するかどうかは自己判断・自己責任であると答えて、訴えは受け付けなかった。

4、2014年度後期 「現代文化論」を事例にして

【授業のプロフィール】 2014年後期の「現代文化論」の受講登録者は142名であった。この授業は「情報倫理学」と隔年で開講しており、WebClassを活用システムをもちいての授業は2014年度に初めて実施した。WebClassを導入したのは2013年度からであることになっている。

成績	人数	比率
S	9	6.3%
A	15	10.6%
B	74	52.1%
C	30	21.1%
D	1	0.7%
欠	0	0.0%
失	13	9.2%
合計	142	100.0%

表1 成績の分布

また、成績評価は、表1のとおりで、「B」が最も多く受講者の約半数となっている。成績評価の基準は、書き込み内容の「当日の授業内容」および「コメントと質問」の内容によっている。また、実習などで複数回の欠席を余儀なくされた者、また、就職活動を行っている4年生については、出席日数が不足がち（当然、書き込み回数も少ない）であっても、事情を配慮して成績をつけた。

出席率	人数	比率
80~100%	97	68.8%
60~80%	33	23.2%
40~60%	2	1.4%
20~40%	6	4.2%
0~20%	4	2.8%
合計	142	100.0%

出席率は、表2の通りで、受講登録者の約70%が80%以上の出席率となっている。なお、成績の失格者数13名

表2 出席率の分布

と出席率60%以下合計の12名の数の異動は、60%以上の出席者のうち2名がWebClassへの書き込みをしていないため「失格」とし、また、就活に集中していた4年生1名を救済したためである。

シラバスに記載した「授業テーマ」は、「現代日本文化の諸相を学ぶ」であり、「授業の到達目標／育成する能力」は、「日本における現代文化の諸相を学ぶこと(知識・理解)を通じて、日本文化の伝統と変容の現状を理解し、近未来日本に対する想像力を高める(思考・判断)ことができる」とした。また、「授業内容」には「グローバリゼーションの進行とともに現代文化はますます、その多様化と変容の速度を加速させている。本講義では、現代日本に焦点をしぼり、現代文化の諸相を明らかにする。あわせて、日本文化の伝統と変容について考察する」とした。

シラバスに記載していた＜年度当初の授業計画＞および、＜授業実施内容＞は以下のとおりである。ただし、当初の授業計画でリストした項目は、取り上げる予定の項目を羅列したものであって、順番などは変更することがあるとシラバスには記載している。実際の授業ではこれらの項目が組み合わされて選択されるし、また、先に述べたようにコメント返しや学生の関心に従って、大枠はこの枠組に従うにしても、取り上げる授業テーマを適宜修正しながら授業を進められた。また、＜授業内容＞のうち、1回目3回目11回目14回目の授業において「アンケート」と書かれている授業においては、後に触れるように、クリッカーをもちいて授業内でアンケートを実施して、その結果をその場で授業に反映させた。

＜年度当初の授業計画＞

1. イントロダクション
2. コンピュータ:計算機からコミュニケーションツールへ
3. SNS などのソーシャルメディア、ライフログ
4. メディアの変容:マスメディアからパーソナルメディアへ
5. 小説、同人誌、携帯小説、コミケ
6. アニメ、マンガ、ポップアート
7. ビジュアルアート、美術館と博物館
8. 映画、ストーリーミング
9. パフォーミングアート、音楽と演劇
10. 身体、かわいい、化粧、ファッション
11. グルメ、消費、都市
12. ポストモダン:思想と建築
13. グローバリゼーション、宗教、カルト、原理主義

14. 災害、ボランティア、社会起業家
15. まとめ:日本文化の伝統と変容

<授業実施内容>

1. イントロダクション: インターネットの利用他現代文化の諸相アンケート
2. コンピュータ: とくに、電子書籍について
3. SNS について、書籍情報の管理について: SNS の利用状況アンケート
4. ハロウィン関連で: コスプレ、コマーシャルリズム

授業日	出席者数	出席率
9 月 25 日	93	65.5%
10 月 2 日	130	91.5%
10 月 9 日	120	84.5%
10 月 16 日	119	83.8%
10 月 23 日	128	90.1%
10 月 30 日	120	84.5%
11 月 6 日	119	83.8%
11 月 13 日	130	91.5%
11 月 20 日	129	90.8%
11 月 27 日	130	91.5%
12 月 4 日	126	88.7%
12 月 11 日	118	83.1%
12 月 18 日	83	58.5%
1 月 8 日	119	83.8%
1 月 15 日	125	88.0%

表 3 授業日ごとの出席率

【磁気カードリーダーと WebClass、クリッカーの利用】 授業では、授業開始の時点で磁気カードリーダーをもちいて、出欠を取る。この授業は受講者は 142 名であるが、はじめのうちは学生たちの動きもスムーズではなく、10 分程度の時間を要するが、3-4 回目 の授業以降はほぼ5 分程度で出欠を取り終えることができる。なお、15回の授業における出席状況は表 3 に見るとおりであるが、平均出席率は84.5%であった。

WebClass をもちいた授業方法については先に述べたとおりであるが、「コメント返

し」の時間は、理想的には 15 分から 20 分程度と考えるが、授業によっては 30 分を越えた日もあった。長いことは特定の授業におけるテーマ性が薄らぐことになり、この事については、別の授業の「授業アンケート」において、学生からの指摘があったところである。

クリッカーについては、Imakiku.Com⁵のシステムを利用している。他にも試みたが、一長一短で、現時点では、このシステムの利便性が高い。この利用は 2014 年前期より開始した。クリッカーを利用して実施したアンケートは「現代文化論」では 4 回であった。これらのアンケートは、授業に先立ち準備を行い、学生はプロジェクタで表示された QR コードにより、同サイトに各自のスマホでアクセスして回答する。学生の回答結果はリアルタイムで集計され、グラフ化される。クリッカーを利用した授業には学生の関心が高い。ただし、学生の持っているスマホの環境によってはうまくアクセス出来ないこともあって、クリッカー・アンケートへの参加率は出席者の 70%程度に留まる。また、学内の WiFi 環境を利用する学生の割合が高いと、アクセスポイントの許容範囲を越えてしまい、アクセスが困難になる場合があることがわかっている。当然、担当者のパソコンが、WiFi を利用している場合、アンケート結果の提示がうまくいかないという事態に陥ったこともあった。

【授業アンケート結果について】 報告者は、最近では、全学で実施している「学生による授業評価」アンケートは一切行っていない。「学生による授業評価」アンケートが実施され始めた頃は参加していたものの、毎年アリバイ作りのための実質を伴わない「授業評価」となってしまった現状ではその意義は感じられないので不参加になった。数年の不参加の後、2013 年後期からは、担当科目の「授業アンケート」を実施し始めた。これは WebClass を利用し始めたタイミングと一致している。つまり、自前の独自項目からなる「授業アンケート」を実施する環境が整ったのである。2013 年後期には、担当している授業科目のうち 1 科目だけ S*map のジャーナルを利用して学生に返してみた。また、昨年度は、演習科目へも同様のアンケートを実施してみた。しかし、受講者のすくない科目でのアンケートはあまり意味が無いと思われるので、別の形を模索することとし、今年度は、実施する予定はない。また、昨年度のアンケート結果に関する回答は、学生へのそれではなく、かわって本論を書くことにした。

「授業アンケート」結果の全体は添付資料に見るとおりであるので、自由記述部分も含めて詳しくはそちらをご覧ください。ここでは、いくつかの項目を取り上げる

⁵ 株式会社「天間堂」の提供する現時点無償（2015 年 9 月までとアナウンスされている）のシステムで、<https://imakiku.com/> から、ユーザ登録の上アクセスして設問を作る。

まず、「振り返り学習」について聞いてみた。これによると、肯定的に答えた者は 88.8% におよぶ。また、WebClass への書き込み自体が「振り返り学習」につながっているとの自由記述もある。ただし、ノートを振り返ったかとの問いには肯定的に答えた者は 33.8%にとどまっていて、自発的な振り返りを求める工夫が必要と思われる。受講態度の変化についても肯定的な答えが多いが、他の授業への適用については、必ずしも高くない。このことは、個々の授業だけでなく、大学全体での取り組みが必要であることを示していると思われる。

本論では、これまで報告者のこれまでの授業運営にかかる経緯をふまえて、演習形式の授業、講義形式の授業で利用している e-Learning システム WebClass の紹介も兼ねて、報告者の実施する「アクティブ・ラーニング」、すなわち学生と担当者との双方向的な授業方法について報告してきた。

また、授業が始まると、コメント／質問を読んだ上で、それに対して答えを用意しておかねばならない、事例として取り上げた2014年度後期の「現代文化論」の「コメント返し」について Excel のスプレッドシートを図示したのが右の図である。学生からのコメント

	騙してみたら、そこまで大事なのかと改めて宗教の信仰の強さを感じました。	
「ある。ゴリー、デンない。」	人間は繊維を分解することが出来ないのが繊維が入っているものはあんまり食べないほうがいいのかと思った。	間違いですよ。消化吸収はできませんが、何らかの役目を果たしています。少なくとも便通はよくなりますね。ほかにも効果があるとされてはいますよ。だから、繊維質は食べなくては行けません。
「いてデとがアである。」	人間の体は複雑だなと思いました。	
うに食	一年中同じものを食べていても健康に生きていると聞いて驚きました。では、発酵食品ばかり食べたら健康に生きているのでしょうか。それとも菌をさえずらせてしまい、逆に体に悪影響を与えて	
多様なうで寝は食はいうこ栄養学開食	「しょうがない、どうも私は体重の増減が激しく、常に自分の食生活と運動に気を付けています。実際、今から5ヶ月前の体重と比べると、15kg減っています。さらに時をさかのぼれば、最大25kgの増減を経験しました。いわゆる、ガリガリもふつうもデブもほとんど体験しています。・・・良くないことですね。」	Q: 自分としては、「その人にとっての健康」「自分にとっての健康」、最後に「みんなが言う一般的な健康」があっていいんじゃないかなと思います。
1. イス、後	多様な食文化を尊重し、私たちが日本人の食文化と比較することは面白いと思いました。私は海外	A: その理解に間違いはないと思いますよ。個人差があるので一般的なものは最後でよろしい。

や質問について、あらかじめメモを用意して授業に臨み、これをもとに

– 35 –

学期末が近づくと、成績つけたための書き込みの整理をはじめなくてはならない。期末試験をせずに、書き込みを前提とした「平常点」による成績づけをするからである。**Excel** のスプレッドシートに毎回の書込結果を **csv** 形式の文書として、ダウンロードし、出欠を管理している文書に「シート」別に管理し、成績づけにもちいている。この文書の整理も面倒である。そこで、今年度からは、毎週この作業を行うこととした。学期末のまとまった作業量を分散化するためである。

最後に、アクティブ・ラーニング論としてのこれまで述べてきたことをまとめておくことにする。少なくとも、担当者の担当する科目では、予習ではなく振り返り学習をおこなう反転授業ではない双方向授業の方法のほうが、向いているようである。先に述べたように、学生の基礎学力や「お勉強」についての習慣付けのレベル、また、入学時から続く、動機付けのレベルの違い、こうしたことが、**e-Learning** システムの予習的な利用を困難にしているからである。しかし、こうも言えるだろう。多様な学生を教えることは、決してつまらないことではなく、大変なことに決めるけることもできない。むしろ、社会の縮図として多様な学生がクラスにいることは望ましいとさえ言えるだろう。レベルを向上させ、一定のレベルにまとめるというよりも、むしろ、多様性をいかに維持して、学生たちにもその多様性の存在を理解してもらうような授業ができないだろうか。学生たちは、他の学生のコメントや質問を聞いて、刺激を受けている様子が見える。**WebClass** をもちいた現在の授業方法にたどり着いてまだ間もないので、まだしばらくは、このやり方で学生たちと付き合っていけたらと思う。

付け足しめくが、以下のようなエピソードを記しておくことにする。**Excel** をもちいた出欠管理をはじめてからしばらくたったある年、学生の中に学生証を磁気カードリーダーに通しおわると知らん顔をしてそのまま教室を出て行ってしまう学生がいることに気がついた。しばらく放置していたが、数年前、1 年生が少なからず関わっていることがわかった。この春に卒業した学年と今年度の 4 年生の学年だ。これは何とかしなくてはと思って、授業の終わりにもう一度出欠をとって、リストアップした学生に注目して、期末試験の内容とも照らしあわせて、大勢を失格にしたことがあった。こうしたことができるのも、学生証と **Excel** のシステムがあるから出来るのだが、こうしたことは一回きりで、その後やめてしまった。実は、**WebClass** を導入してからは、出欠管理と書き込みをクロスチェックすることで、2 度手間な出欠管理はする必要がないことがわかったからだ。教室をエスケープするができたとしても、書き込みの回避することはいかない。

危機管理を動機としてはじめた出欠管理と e-Learning の活用は、とりあえず、報告者の個人的な授業事例として本論において提示することでひとまずの役割を終えることとなるが、現在の大学全体の教学にかかる最近の動向とどのように関わっていくか、それが、第二ステージということができるだろう。二度目の学部長任期が始まったこの4月以降、報告者だけの課題としてではなく、大学全体の課題と関連させつつ報告者の授業運営について再考してみたいと思っている。

添付資料：2014 年後期「現代文化論」の「授業アンケート」結果

(1) この授業では、e-Learning システムをもちいて、授業の振り返りを試みましたが、書き込みを通じて授業内容を振り返ることができましたか？

1. とてもそう思う	2. ややそう思う	3. どちらとも言えない	4. あまりそう思わない	5. まったくそう思わない	未解答	計
40	31	4	2	1	2	80
50.0%	38.8%	5.0%	2.5%	1.3%	2.5%	100.0%

(2) あなたはこの授業で、次の授業に望む前に事前に前回の授業ノートを読むなど振り返りができましたか。

1. とてもそう思う	2. ややそう思う	3. どちらとも言えない	4. あまりそう思わない	5. まったくそう思わない	未解答	計
8	19	27	16	8	2	80
10.0%	23.8%	33.8%	20.0%	10.0%	2.5%	100.0%

(3) この授業スタイルによって、あなたの授業に臨む態度はほかの授業と比べて変わりましたか？

1. とてもそう思う	2. ややそう思う	3. どちらとも言えない	4. あまりそう思わない	5. まったくそう思わない	未解答	計
24	37	11	5	1	2	80
30.0%	46.3%	13.8%	6.3%	1.3%	2.5%	100.0%

(4) その結果、あなたの受講態度は好ましいものになりましたか？

1. とてもそう 思う	2. ややそう思 う	3. どちらとも 言えない	4. あまりそう 思わない	5. まったくそ う思わない	未解答	計
22	35	14	5	2	2	80
27.5%	43.8%	17.5%	6.3%	2.5%	2.5%	100.0%

(5) 他の授業で同じような受講態度を試みてみましたか？

1. とてもそう 思う	2. ややそう思 う	3. どちらとも 言えない	4. あまりそう 思わない	5. まったくそ う思わない	未解答	計
5	16	34	20	3	2	80
6.3%	20.0%	42.5%	25.0%	3.8%	2.5%	100.0%

(6) あなたは、この授業に興味を持って臨むことが出来ましたか？

1. とてもそう 思う	2. ややそう思 う	3. どちらとも 言えない	4. あまりそう 思わない	5. まったくそ う思わない	未解答	計
37	36	2	2	1	2	80
46.3%	45.0%	2.5%	2.5%	1.3%	2.5%	100.0%

(7) 授業の進め方について聞きます。その早さはどうでしたか？

1. 速すぎる	2. やや速い	3. どちらとも 言えない	4. やや遅い	5. 遅すぎる	未解答	計
2	4	66	5	1	2	80
2.5%	5.0%	82.5%	6.3%	1.3%	2.5%	100.0%

(8) あなたは、この授業によって、新たな知識／考え方を得ることが出来ましたか？

1. とてもそう 思う	2. ややそう思 う	3. どちらとも 言えない	4. あまりそう 思わない	5. まったくそ う思わない	未解答	計
38	37	2	0	1	2	80
47.5%	46.3%	2.5%	0.0%	1.3%	2.5%	100.0%

(9) この授業の授業内容についてどのように考えますか？

1. 難しすぎる	2. やや難しい	3. どちらとも 言えない	4. やや やさしい	5. やさしすぎる	未解答	計
0	16	54	8	0	2	80
0.0%	20.0%	67.5%	10.0%	0.0%	2.5%	100.0%

(10) この授業について、感じたことについて、もしあれば記入してください。（自由記述）

- 1 最新の授業みたいで楽しいです
- 2 自分の知らなかった事を、この授業を通してたくさん知ることができた。
- 3 とても楽しい授業でした。オンラインで受講者の意見をアンケートで比較することが目に見えて面白かったです。
- 4 半期間ありがとうございました！
- 5 日本のことは住んでいるから当たり前知ってることが多いと思っていたが、この授業を聞き知らない気づきが多かった。
- 6 外国人との交流は難しいけど楽しいなと、改めておもいました。現代の日本文化と昔の日本文化、さらに日本の問題も知らないといけないなと思いました。海外ばかりに目が向いて日本について知らなかったの、今度は日本に目を向けて更に国際交流に目を向けたいなと思いました。ありがとうございました。
- 7 特にありません。
- 8 リアルタイムでアンケートをしたのが楽しかったです。
- 9 授業内で、携帯を使っの生徒へのアンケートがとても良かったです。どの質問も、その場で結果をすることができ、とても興味をもって授業に臨めました。
- 10 身近な文化について自分が知らなかったことも面白く、わかりやすく教えて下さったので興味をもって講義に臨むことができました。ありがとうございました。
- 11 半期間ありがとうございました。授業では毎回前回の授業のコメント返しをしてくださるので、より理解を深め、興味深く授業を聞くことができました。また、授業で使うアンケートも、非常に面白いものが多く、「あ、私って少数派なんだ！」と気づけたり、「こういう考え方もあったんだ」と新たな発見も多く、非常に勉強になりました。テーマも、初めはオタクやアニメ、コスプレ、カラオケなど身近でとつきやすい話題から入ってくれたおかげで、最後のほうの難しい話題でもついていくことができました。
- 12 毎回先生の話聞くのが楽しみでした。受講できてよかったです。

- 13 毎回コメントの書き込みをすることで授業内容を振り返ることができる点はとても良いと思
いました。
- 14 スマホなどを使ってリアルタイムでみんなの意見をきけるのはとてもいいと思ったし、自分
も授業に参加できている感じがしてよかった。
- 15 興味をもてるジャンルもあって楽しく感じた
- 16 他の授業と比べると好きではありますが、イマイチ何をやりたいのかわからない気もします。
この授業を通して、今までの知識や知ったつもりになっていたことについてより深い理解を
17 することができました。
- 18 授業は興味のあることばかりでとても良かったと思います。クラスみんなでアンケート
をとるとというのがとても面白かったと思います。
- 19 自分が実際に行っていなくても行ったような感覚にひたれて、すごく外国に興味をもちまし
た。機会があれば先生がいくつか紹介されていたところにもいつてみたいと思いました。
- 20 毎回違う話題で興味深かった。
自分の知る日本のサブカルチャーについて、新しく発見できたことがあり、視野が広がった
気がする。伝統を伝えていくことと、新しいものを恐れないことの二つをうまく融合させる
21 ことができたなら、日本文化はもっとクールになれるのではないかと思った。外国に憧れてい
るだけでなく、もっと自分の国の良さを知っていこうと思った。また、発展する国や文化の
裏で苦しむ人々がいることを忘れないように肝に命じます。
- 22 先生が色々な知識を持っており話を聞いてなるほどなと思うことがよくありました。自分の
見聞を広げることができ、受講してよかったなと思いました
- 23 今普通に生活している中で考えなければいけないことがわかりました。問題になっているこ
とについて深く考えることができました。
- 24 ボカロなどの話が身近すぎて話をよく聴いてた覚えがあります。
ウェブクラスで授業を振り返ることで、理解が深まった。授業内容も興味のある内容だった
25 ので今後に活かしていきたい。
- 26 授業中のアンケートは、その場で生の声が聞けるので、とても面白かったです。コメント返
しでは、自分とは違った考え方の意見が出てきたりしたのでおもしろかった。
ミクロネシアやアボリジニなど自分の知らない国の体験話を聞くことができ面白い講義でし
27 た。先生は実際に行ってらっしゃるので説得力があり、もっと知りたいと思うようになりま
した。
- 28 ウェブクラスへの書き込みは毎回必ずしなければならないので、どの授業も集中して聞くこ
とができ、とても良いと思いました。また、日本の文化について新たに知り得た情報もあり、

日本の奥深さというものを改めて感じました。個人的にはサブカルチャーや、オタク、コスプレなどの話が大変興味深かったです。

29 新たな知識や考え方を学ぶことができた

30 いつか海外に住みたいと思っているのでとてもためになりました。

31 コメント返しの際にみんなが前回の授業をどう考えているのか聞けて面白かった。

32 現代の話題についての授業で、知識を増やすことができてよかった。

33 教養も学べたと思う。すごく有意義な時間になった。

34 QRコードを使いみんながアンケートに答えるという今の時代ならではの方法で、とても楽しくいろいろなことが学べた。

35 日本文化について、忘れていたことや、知らなかったことを教えていただけて、すごくいい経験になったと思います。また、現代の新技术の危険性や利便性について、危機感がたりなかったり、知識が浅いままだ現代のツールを使っていたことを思い知りました。半期の間でしたが、ありがとうございました。

36 初めて知ったことが多く、授業で行うアンケート方式の授業は楽しく、皆がどのような思い、考えなのかよくわかった。授業が終わってだすレポートは、授業内容を振り返ることが出来るので良いと思う。

私の授業論

人間関係学部 小榮住 まゆ子

1. はじめに

社会福祉を学問として学びはじめたのは、本校と同様の「人間関係学科」であった。専攻を社会福祉に置きながら、臨床心理専攻、生涯教育専攻の学生とともに共通履修する人間論をはじめ、心理学や社会教育学等自ら学びたい授業をカスタマイズできるシステムであった。私は、社会福祉士国家資格に関わる授業以外で興味・関心ある授業を履修していったことを覚えている。

そして大学院へ進学し、出会った恩師からこんな質問を受けた。「小榮住さんは、社会福祉学科出身かな？」と。「いえ、私は人間関係学科です。」と答えると「社会福祉学科ではなく人間関係学科で社会福祉を学んだことについてよく思案しなさい。社会学ではなく人間関係学があなたの出身校の思いなんですよ。その思いに応えられる社会福祉士になりなさい。」と言われた。それが何を意味するのか、当時、私は考えあぐねていたが、今では「社会福祉制度から人を見るのではなく、人や人と人とのつながりから社会福祉制度が創造できる社会福祉士になること」が人間関係学科出身の社会福祉士ではないかと考えるに至った。

そして、昨年、私の母校と同じシステムで社会福祉士養成が行われている本校に赴任することになり、本校の履修システムが母校の雛形であることを知った。そして、私は、先述した恩師のことばを思い出したのである。今度は私が「人や人と人とのつながりから社会福祉制度が創造できる社会福祉士」を養成しなければと日々その使命を感じながら校務や研究に勤しんでいる。

2. 私の講義

私は、主に福祉実践論（ソーシャルワークⅠ～Ⅳ）の講義を受け持っているが、次の3つを柱に授業を展開している。1つ目は「難しいことを分かりやすく説明すること」、2つ目は「理論がどう実践されるのか具体例をあげ支援過程をイメージさせること」、3つ目は「グループワークを通じて個々の支援方法における取捨選択能力を高めること」である。

某TV番組で人気の池上彰氏は、「難しいことを分かりやすく説明してくれる」ためニーズが高く評価も高いそうだ。しかし、それを成すためには、多くの準備期間を要する。私も、社会福祉、とりわけ実践者ですら敬遠しがちなソーシャルワークに関連する専門用語はなるべく使わないこと、使ったとしてもその時々で関心が高まっている社会福祉問題や、より身近で誰もが体験するような

日常生活問題を具体例に用いて分かりやすい説明を加えている。また、教材においても、例えば「福祉デマンドと福祉ニーズの理解」をテーマにした授業ならば、女子学生の関心が高い美容福祉実践の手技であるオイルマッサージやネイルを使ったロールプレイによる体験学習を通じて理解を深めている。教材を自作することもあるが、既存のものであれ自作したものであれ、教材というツールにより分かりやすく説明する方法を模索することは非常に楽しく、準備期間に多くの時間を割いている。

次に、理論がどう実践されるのか具体例をあげ支援をイメージさせることについて、社会福祉は実践科学、支援科学というだけあって、誰に、何を根拠にその支援方法を選択し、どのように支援過程を展開するのか、常に考えなければならない。そのために実践理論を説明した後、視聴覚教材やゲストスピーカーからのお話等により、具体的なイメージをもってもらおう工夫をしている。福祉現場での経験が少ない学生でも、そこで知り得たロールモデルを通じて「教科書にあった理論」という空論を「実践のための理論」という地に足がついた理論へと昇華することができている。

最後に、ソーシャルワークという科目は非常に専門性が高く、社会福祉士として現場で活躍しなければ使わない知識が多数ある一方、履修生は、社会福祉士を目指す学生ばかりでない。こうしたあらゆる学生の意欲を満たすために、扱う事例は社会福祉に関係のない、よくある日常生活での悩みや不安、問題等を主にした事例を提供している。こうした演習課題の事例を、学んできた実践理論から取捨選択し、課題解決にむけ支援計画を練るという反復練習を通じて学生の専門的スキルを高めようと努力している。もちろん、こうしたプロセスは個人でもできることではあるが、グループワークで行うことにより、学ぶ仲間同士での「助け合い、教え合い」を通じて「技」だけでなく「人」としての成長も期待している。

3. 今後の課題

人間関係学科の自律性や主体性を重視した現行カリキュラムの大義をより実感できるように、そして、私自身がそうであったように、人間関係学科で学び育った社会福祉士を1人でも多く養成できるように、今後も本校の先生方をはじめ、他校や福祉現場とも連携を図りながら柔軟な授業が展開できるよう努力していきたい。

文化情報学科 FD 活動報告書

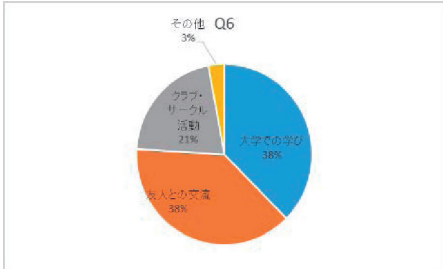
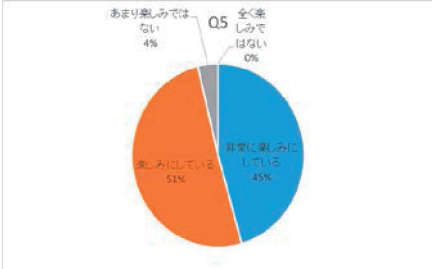
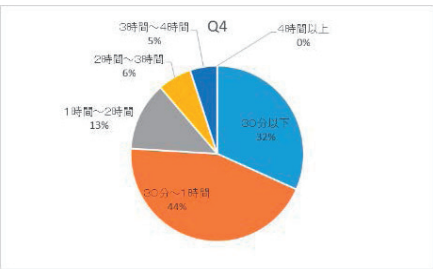
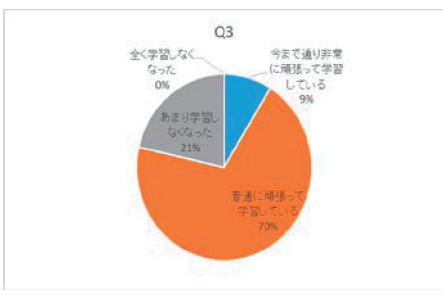
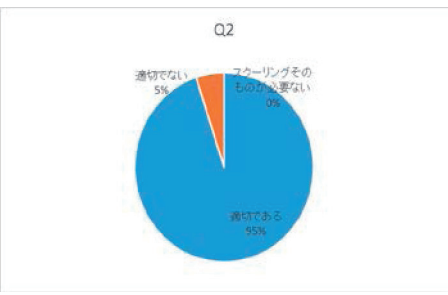
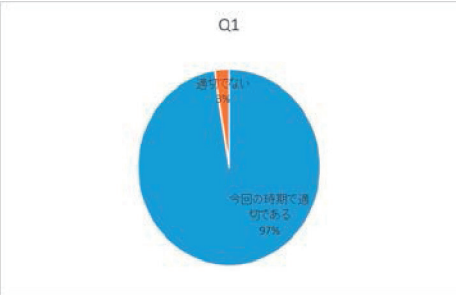
文化情報学科では平成 26 年度の FD 活動として、平成 26 年 12 月 20 日開催の第 1 回スクーリング、また、平成 27 年 3 月 7 日開催の第 2 回スクーリングに参加した高校 3 年生（平成 27 年度入学生）に対してアンケートを実施し、入学前教育の効果検証を行った。特に高校 3 年生が入学前に不安を感じていることを洗い出し、入学後に円滑な学生生活を送るために、スクーリングにおいて取り組むべき事柄を明らかにすることを目的とした。

第 1 回スクーリング

AO 選抜、併設校推薦、公募推薦の合格者が対象者である。第 1 回スクーリングの前半は「世界遺産と世界遺産検定」をテーマとした講演、後半は「本×デジタル 電子書籍を作る」をテーマに PC を利用した演習を実施した。アンケートの有効回答者は 79 人であった。表 1 がアンケートの設問、図 1 が回答である。

表 1 アンケートの設問（第 1 回スクーリング）

Q1	今回の第1回入学前スクーリングの時期について	Q8	入学後に不安だと考えていることは何ですか？
Q2	本学の入学前スクーリングは2回ですが、その回数について	Q9	学科において入学者受け入れ方針を示していますが、それについて知っていますか。
Q3	大学合格後に、高校での学習に関してどのように変化しましたか？	Q10	「世界遺産と世界遺産検定」の内容についてどう感じましたか？
Q4	大学合格後に、学習している時間は、1日あたり、平均してどれくらいですか？	Q11	「世界遺産と世界遺産検定」についての感想を教えてください。
Q5	大学への入学を楽しみにしていますか？	Q12	「本×デジタル・・・電子書籍を作る」の内容についてどう感じましたか？
Q6	入学後、大学生活で楽しみにしていることは何ですか？	Q13	「本×デジタル・・・電子書籍を作る」についての感想を教えてください。
Q7	来春から大学生になるにあたって不安がありますか？	Q14	本日のスクーリングに参加した感想や今後の展望など、あれば書いてください。



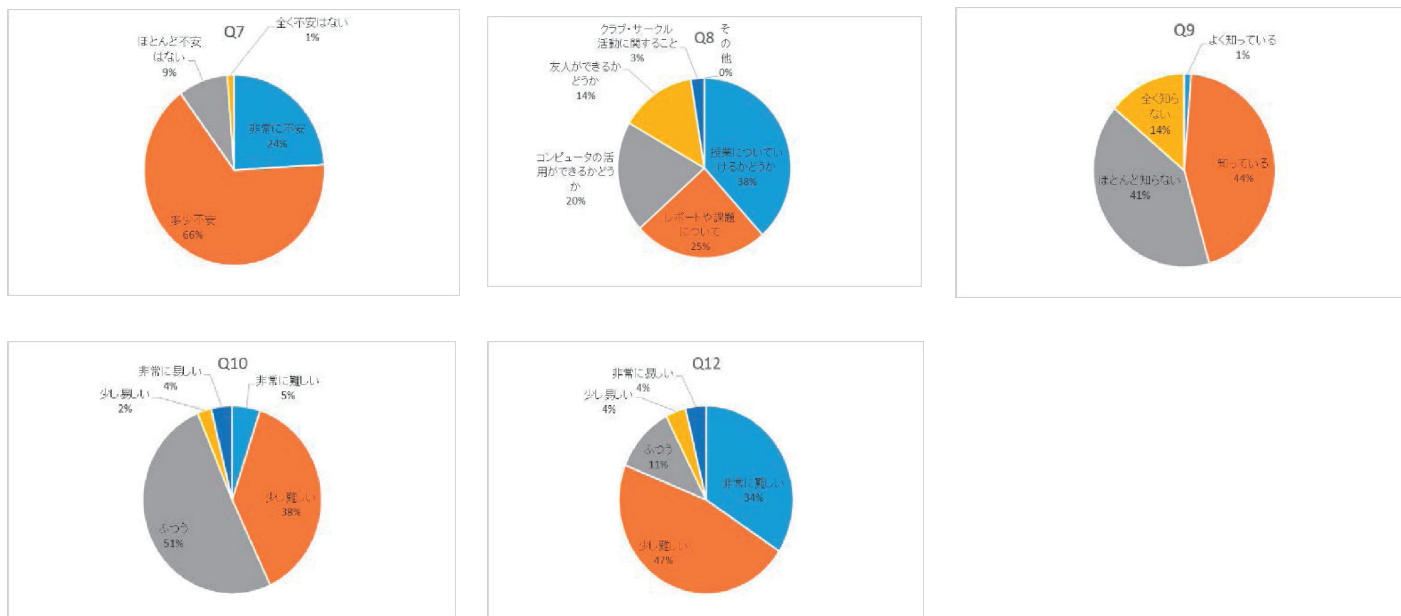


図1 アンケートの回答（第1回スクーリング）

設問3に対しては、最多の35人が「30分~1時間」と回答し、次いで25人が「30分以下」と回答した。対象者が大学での学びに対して十分な準備時間を確保できていないことが分かる。また、設問8に対しては、46人が「授業についていけるかどうか」、30人が「レポートや課題について」に不安を感じていることが明らかとなった。上記の結果から、高等学校とは異なる大学での主体的な学びに不安を感じている一方で、何をすれば良いのか分からないといった実態が読み取れる。入学予定者の不安を解消し、円滑に大学に適応できるよう図ることは、入学前教育の重要な課題である。

第2回スクーリング

第1回の対象者に加え一般入試の合格者が対象者である。第2回スクーリングは「教員・先輩との懇談会」をテーマに高校生の不安を取り除くことを目的とした。アンケートの有効回答者は109人であった。表2がアンケートの設問と回答である。

表2 アンケートの設問と回答（第2回スクーリング）

下記項目に対する不安は変化しましたか。	不安はなくなった	一部不安が残る	不安なまま
①授業内容に関して	34	70	5
②単位の修得に関して	39	63	7
③部活動など学生生活に関して	58	46	5
④アルバイトに関して	69	35	4
⑤コンピュータの利用に関して	41	46	21
⑥友人関係に関して	42	59	8
⑦就職先など将来に関して	32	62	15

教員、在学生（学部3年生）と直接話し合う機会を設けることで、対象者の不安の一部を取り除くことが出来たことが分かる。しかし、文化情報学科の専門領域の一つであるコンピュータの利用に関しては、不安を感じる学生が多く残った。このことから、入学前にコンピュータの利用に関するガイダンスを設けるなどの改善が必要である。また、この企画の継続を希望する声は非常に多く、今後も継続して実施することが望まれる。

メディア情報学科 FD 活動報告書

メディア情報学科では平成 26 年度の FD 活動として、平成 26 年 12 月 20 日開催の第 1 回スクーリングおよび平成 27 年 3 月 7 日開催の第 2 回スクーリングに参加した高校 3 年生（平成 27 年度入学生）を対象に行ったアンケートで得られた回答をもとに、今後の入学前教育や FD の課題について検討した。

第 1 回スクーリング

AO 選抜、併設校推薦、公募推薦の合格者が対象者である。参加者は、学科説明を受けた後、具体的な授業内容を体験するために「スポーツはメディアだ」「習字から探るメディアの魅力」の中から希望する講座を受講した。スクーリングの最後にアンケートを実施・回収した（有効回答 63 人）。

高校での学習時間／得意・不得意科目

高校 3 年生になってからの学習時間は、入試前では「1 時間以下」が 24 人、さらに入試後は大きく増加（46 人）となり、約 7 割が入学後は学習時間が 1 時間以下と回答。もともと学習習慣を持たない学生の割合が高く、また特に入試後の学習習慣も維持できていない様子が見えてくる。これらのことから、スクーリングの機会を活かして課題を出すなど、学習習慣を維持させる仕掛けの検討が必要である。

得意な科目は「国語」（21 人）が最も多く、続いて「体育」（17 人）、「数学」（15 人）であった（図 1-2）。不得意な科目は「英語」（33 人）が最も多く、「国語」と「数学」は 18 人が回答。これらのことから、スクーリングをきっかけに苦手な科目を克服できるような支援の検討が必要である。

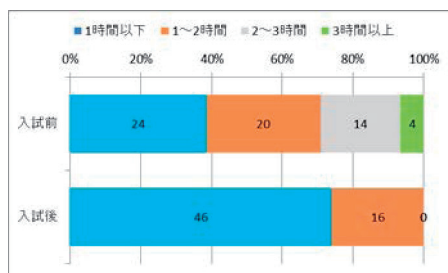


図 1-1 入試前後の学習時間推移
※入試後は学習時間減少

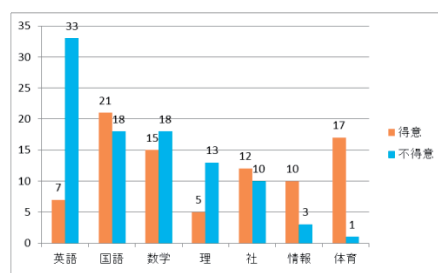


図 1-2 科目の得意・不得意

入学までにしておいた方がよいと思われること

スクーリングを受けて、入学までにやっておくべきこととして参加者があげたのは、高校の復習や、時事問題に日々接すること、ノートテイキングなどといったことを習慣づけることであった。下記の参加者の意見からわかるように、スクーリングで、入学までの学習に対する意識付けができていることから、入学までにしておいた方がよいと思われることを具体的な課題や提出などを課すと効果的であると言える。

（回答から抜粋）教科書を読むこと、新聞を読むこと、大学でやってみたいことを考えること、今日からやってみようと思いました。／ノートテイキングができてよかった。やらなければいけないことが聞けてよかった。／高校の基礎を学び直そうと思った。／新聞、ニュースに触れる習慣をつける。大学生活で取り組みたいことのイメージをする／大学で学ぶこと、学習課題などを聞いて、改めて、春から大学生になるのだなぁと自覚しました。それと同時に今のままでは意識が低いと分かりました。

第 2 回スクーリング

参加者が大学の学修と生活について見通しを持つことを目的に、AO 選抜、併設校推薦、公募推薦、一般入試 A の合格者 83 名を対象に第 2 回スクーリングは行われた。内容は①大学で学ぶ意義②大学 4 年間の学修を計画する③先輩から大学での過ごし方のアドバイスを行った。スクーリングの最後にアンケートを実施・回収した（有効回答数 83 名）。参加者のうち、本スクーリングが 1 回目の参加者は 21 人、2 回目の参加者は 62 人であった。

スクーリングの時期および内容の適切さ

スクーリングの時期については、全回答者が「適切」と回答、回数については「適切」という回答が大半を占めたが、2 名が「適切でない」とし、その理由としては「1 回でもいいのではないか」との理由であった。今回のスクーリングの内容については「適切」という回答が大半を占めたが、1 名が「適切でない」とし、その理由としては「一般入試 B も加えた方がよい」との理由をあげた。

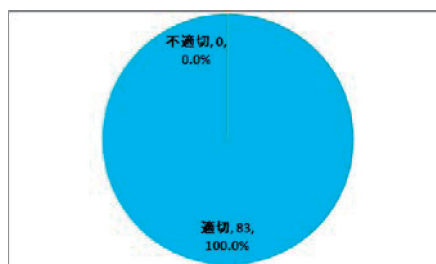


図 2-1 時期は適切か (N=83)

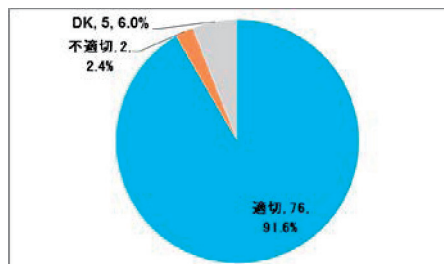


図 2-2 回数は適切か (N=83)

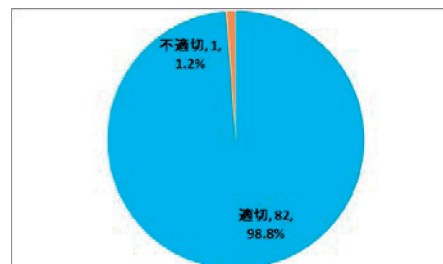


図 2-3 内容は適切か (N=83)

入学前スクーリングを通して、わからなかったこと、知りたかったこと

参加者が入学前に知りたかったことを以下に示す。これらの結果から、参加者ニーズとしては、新入生ガイダンスで扱う項目や、初年次教育で扱う内容、入学前後の過ごし方についてあげられており、入学前スクーリングで扱う内容としては、入学前の過ごし方について学習課題も含めて検討する余地があると言える。

(回答から抜粋) [大学や授業に関すること] どんな授業があるのか／どれくらいの授業があるのか／単位はどのくらいとればよいのか／大学で忙しいこと／授業の取り方／授業がどんなかんじではじまるのか／毎日英語／大学の雰囲気／学校生活が始まってからの 1 日の流れ、1 週間の流れ学校の紹介とこれからのスケジュール／研修合宿では何をやるのか／高校と違う授業体制をもう少し詳しく [入学前後の過ごし方について] 3 月中に何をすればいいか／入学してどうすればいいのか [入学後の生活について] どんな部活やサークルがあるのか／バイトと資格と授業の両立の仕方／パソコンを買うか買わないか／どの種類のパソコンが必要なのか／

まとめ

12 月の時点では、参加者の学習時間において課題があり、また特に英語について苦手意識を持つ参加者が多いことがわかった、その一方で学科の学びの説明や大学の授業を体験することは、学習のモチベーションにつながることも示唆された。また 3 月のアンケートからは、カリキュラムの詳細や受講の方法、大学の授業の受け方などを詳細に知りたいというニーズが示された。

これらの結果を参考にしながら、入学前教育と初年次教育を連携させると同時に、入学前後での学習習慣の改善や、苦手科目の強化を図るリメディアル教育についても、あわせて FD 活動として検討する必要がある。

平成 26 年度 現代マネジメント学部 F D 活動報告

石井圭介

現代マネジメント学部での F D 活動は、主に次の 4 つからなる。①学生生活評価アンケートの実施、②現代マネジメント研究会（講演会）、③教育研究報告の作成・発行、④授業改善のための授業参観（教員）である。本報告ではこれらの概要を「平成 26 年度 教育研究報告」に記載された内容を中心に紹介することとする。

1. 教育・研究活動について

本学では、平成 22 年度文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」に採択されて以降、「トータルライフデザイン教育の構築と推進」をテーマに、学生たちの社会的・職業的自立のための教育実践に取り組み、現在の社会経済状況を踏まえた就業力育成の支援体制を整備・強化し、「幅広い職業人養成」を目指してきた。本学部がめざす企業、地域・公共、国際社会で職業的能力を発揮できる人材の育成は、まさにこの目標と合致したものであることから、その実践的な教育への期待がさらに高まっている。

1) 教育活動

本学部の特徴を一層明確にすべくカリキュラム改正を行い、今年度は 2 年目であった。新カリキュラムにおいては、従前の経営、経済、法律、政治の各分野に現代マネジメント分野が加わって 5 分野となり、経営分野に多くの科目が配置されるようになった。経営関連科目の充実、本学部の特徴をより明確にし、学生たちのニーズに合致したカリキュラムとなった。また、旧カリキュラムに比べ、一年次の科目選択の幅が広がったことも、学生たちの興味関心に応じた学修を可能にした。さらに、新カリキュラムへの移行と併せて、学生たちに実践的な知識やスキルを育むアクティブラーニングにも力が注がれるようになった。

また、ゼミ活動を中心に、企業や各種機関の訪問をはじめ、学生たちによる商品開発やアプリの制作、若手社会人とのグループワークの実施など、マネジメント力を高める実践的で興味深い数々の活動が展開された。

2) 研究活動

本学部の教育活動が充実していくなかで、学部教員による研究活動については、年度初めに 2 名の新しい教員を迎え、教授 10 名、准教授 8 名、講師 4 名の合計 22 名が、それぞれの専門分野を中心に、広く現代マネジメントに関する研究活動に取り組んだ。今年度の学部教員の研究活動（過去 3 年間を基本とする実績）について、教員一人あたりの業績数を整理すると、下表のとおりである。ここでは、第 1 回教育研究報告ならびに昨年度の報告にみられる実績も併記した。

今年度の教育研究報告にみられる（過去 3 年分）本学部の教員による研究業績数の平均は、著書・訳書・学術論文が 4.5 編、特許・その他が 7.9 編で合計 12.4 編であった。この数値を昨

年度の実績と比べると平均一人当たり 0.7 編の減少となっている。今年度は、新たに大学院が設置されるなど、新しい取組もあり各教員においては多忙な 1 年であったと思われるが、研究活動はすぐれた教育活動を支えるものでもある。大学院教育をより充実したものにするためにも、各教員の研究の一層の深化と成果の公表が求められる。

また、研究活動を支える助成金の獲得数についてみると、学内 0.5 件、学外 1.8 件、合計 2.2 件で、昨年度に比べ、学内助成金の獲得数が平均一人当たり 0.5 件減少した。なお、助成金の獲得数については教員間の違いが大きいことから、各教員が積極的に学内外の助成金を獲得し、研究業績の充実をはかることが期待される。そのほか、所属学会数は昨年度より若干増加し、学外委員数は微減した。

「教育研究報告」にみる学部教員の研究活動の推移（過去 3 年分を基本とする実績）

項 目	第1回教育研究報告 (平成14年度)	第12回教育研究報告 (平成25年度)	第13回教育研究報告 (平成26年度)
著書・学術論文	7.6編	5.4編	4.5編
特許・その他	4.1編	7.7編	7.9編
著書等 小計	11.7編	13.1編	12.4編
研究助成金（学内）	1.6件	1.4件	0.5件
研究助成金（学外）	0.4件	1.3件	1.8件
研究助成金 小計	2.0件	2.7件	2.2件
所属学会	4.4件	4.7件	5.1件
学外委員	0.5件	1.2件	1.1件

<注> 1. 表中の数字は教員 1 人当たりの数字である。

2. 「第 1 回教育研究報告（平成 14 年度）」は本学部の前身である生活社会学科の最終年度のものである。

2. 学生生活評価アンケート（第 13 回）：概 要

調査期間は、平成26年11月27日から12月12日まで、調査対象は、現代マネジメント学部 在学生710名（1年生：153名、2年生176名、3年生178名、4年生203名）で、回答数：483名、回答率68.0%であった。調査の目的は、全学FD活動の一環として、現代マネジメント学部の学生が本学での生活をどのように受け止めているかを調査した。今回も過去の12回とほぼ同じ調査項目をもって実施した。その成果を現代マネジメント学部のFD活動の基礎的資料とし、教育研究と学生生活の質的向上の一助とすることを主目的としている。

1)カリキュラム

各分野別の満足度についての問では、『満足&ほぼ満足』と回答した学生は「語学科目」では58.6%（54.9%）（カッコ内の数字は昨年度の結果、以下同様）、「情報科目」では66.9%（70.8%）、「その他教養科目」では77.6%（76.7%）、「専門科目」は80.9%（79.3%）で

あった。昨年および一昨年とほぼ同様の値ではあった。

「情報科目」の達成度別クラス編成について、『満足&ほぼ満足』と回答した学生は71.9%（70.4%）であり、新年度初めの「オリエンテーション」については88.9%（86.2%）の学生が参加したと回答している。「単位制度」については77.7%（72.3%）の学生が『理解&ほぼ理解』していると答えたのに対して、「履修と成績評価に関する説明や手続き」については、61.6%（60.6%）の学生しか『判る&ほぼ判る』と回答していなかった。自由記述回答では、外国語教育の充実を要望する声が多く、また、カリキュラムの改善を訴える声も上がっていたが今年度から適用された新カリキュラムへの評価についても、今後注視すべきであろう。

2)大学の環境

環境面では、ハラスメント相談室、図書館、チケットサービスコーナー、トイレについて、66~77%程度の学生が『満足&ほぼ満足』と回答していた。特に大学の中核施設のひとつである図書館は平成26年3月に改装を終え、87.7%（77.6%）の学生の学生が満足しており、前年比10ポイント上昇している。また、昨年度まで学生に不評であったトイレについては改修を終え、ワーストから一転している。一方、学生控室、売店、書店などについては、昨年と同様に評価は低い。自由記述回答では、コンビニやA T Mの設置を求める声が多く、近年建設された他学部の建物と比較して見劣りするのか、学部棟の建物や設備などの改善を求める声も多い。

3)事務職員の窓口対応

アンケート結果からは、学内の各窓口での対応に『満足&ほぼ満足』と回答した学生が、昨年と同様に各部署71.4~75.6%となっており、好印象を抱いている学生が多い。自由記述回答では『親身に相談に乗ってくれる』『お世話になっている』といった評価する声がある反面、業務の不手際を指摘する声もあった。文言通りに各々の学生の言い分を鵜呑みにする必要はないと思われるが、学生に対する対応には留意する必要がある。

4)他学部開放科目について

他学部の開放科目については前向きに捉えている学生が7割を超えており、他学部の講義に関心を持っている学生の割合は高い。特に支障のない限り開放可能な科目数を増やし、多様な学生を受け入れることが望まれる。

5)学部間・他大学間との単位互換、所定の資格等の単位認定

例年同様83.7%（82.8%）もの学生が単位互換や資格等の単位認定を希望している。他大学の動向にも配慮しつつ、可能であるなら学生の希望に沿った早期の単位認定の制度の実現を望みたい。

6) 就職指導

本学のキャリアサポート課による就職指導を受けた経験のある学生に限った回答であるが、その就職指導に関して『満足&ほぼ満足』と回答した学生は71.3% (73.8%)、同課が主催する各種講座についても75.2% (72.2%) となっている。今後共、迅速かつ的確な就職情報の提供および指導が望まれる。

7) インターンシップ インターンシップについて『有効である』と回答した学生は81.7% (84.0%) であり、実際に参加した学生の満足度も75.9% (72.8%) と高い率を示し、今後も同制度の重要性、ニーズは高まっていくことだろう。自由記述回答にもあるように、例年卒業要件単位としての認定を求める声は多く、難しい課題ではあるが、引き続き検討しなければならない。

8) 奨学金制度

奨学金制度に対する学生の認知度は例年低く40.7% (41.6%)、しかも毎年下がっている。他方、奨学金受給者の満足度は73.2% (71.7%) が『満足&ほぼ満足』と回答しており、一定の成果をあげていると判断できよう。しかしながら、現在も奨学金制度の拡充を期待する声も多く、拡充だけでなく現況に対応する新たな奨学金制度の導入も早期の検討課題であろう。

9) 学生生活等

学生でありながら、予習・復習を合わせて週にわずか2時間 (2時間20分) 程度しか勉強をしていない！ 留年してしまう学生は毎年少ないことから、試験前に少しの対策やレポート提出の提出で単位を取得しているのであろう。大学卒業生として認められる実力を身に付けて巣立って欲しいものである。シラバスも“事前・事後学習”について記載するように改善されているが、抜本的な対策を講ずる必要があるだろう。一方、アルバイトは週に3.2日 (3.0日)、17.5時間 (15.8時間) も行っている。もちろん、これは学部の平均値であり、個人差はあるにしても勉学に励むという学生の本分からは程遠い現状である。また、授業についていけると回答している学生が71.1% (72.9%) 存在し、前述のとおり、早急に何らかの検討をする必要に迫られている。

10) 学生生活全般

学生生活全般に対する学生の満足度については、78.4% (79.2%) が『満足&ほぼ満足』と回答しており、自由記述の回答からも概ね好意的に捉えても良いであろう。一方、大学や学部の設備、諸制度についての不満は存在し、今後、改善もしくは検討すべきである。より一層、学生生活の満足度を高めていくことが求められよう。

以上

平成 26 年度 教育学部 FD 活動報告

教育学部 山田真紀・磯部錦司

1. 平成 26 年度の計画 (PLAN)

本年度の教育学部の FD 活動は、学部教育の質の向上を目指すため、「教員が教育学部のカリキュラムの全体像を把握し、相互に授業内容を理解することにより、各授業間において有機的連携を図り、学生の学びを構造化することで、学生の学びの質を向上させる」という方法論を用いることとし、以下の計画を立てた。

- ① 教育学部のカリキュラムの構造について全教員で議論するラウンドテーブルの実施。
- ② 教員がお互いの授業を参観し、授業内容と方法の把握に努めるとともに、「研究授業」を指定し、教員全員で参観した後、さらなる授業改善のための討論を行う。
- ③ 専任教員による講演会。優れた専任教員が在籍することのメリットを生かし、専任教員による講演会および討論会を行うことでお互いの専門性や学問領域について共通理解する。

2. 計画の実行 (DO)

- ①ラウンドテーブルの実施：将来計画委員会主催で 2 月より行っていたフリーディスカッションを学部 FD の一環として位置づけたものであり、将来計画委員会と学部 FD 委員会共催で、4 月から 6 月にかけて専修会終了後の 60 分～90 分を用いて実施した。現在の学部教育の問題を洗い出し、持てる資源のなかでいかに改善するかについて議論を重ねた。特に議論となったのは「教科」と「指導法」の授業の関係性をどう構築するかである。現状では、指導法は必修であるものの教科が選択であり、教科が先に履修されるという制度的制約から、教科を学んだ学生と学んでいない学生が混在したなかで指導法の授業を行わざるを得ないという状況である。そこで発想の転換を行い、指導法を先に履修させて、その後、教科のより深い学びにつなげていくという方法が提案された。来年度よりいくつかの教科で新しい方法を試みることとなった。
- ②授業公開と研究授業：「授業公開週間」は、前期は 7 月 1 日から 7 月 22 日にかけて行われ、公開された授業は 46 (教員 20 名)、参観者の延べ数は 50 人 (13 科目) となった。後期は 12 月 1 日から 12 月 22 日にかけて行われ、公開された授業は 47 (教員 19 名)、参観者の延べ数は 7 人 (7 科目) であった。教育学部では公開授業リストに掲載されていない授業でも、事前に授業者に申し出があれば自由に参観できるというルールで行っている。「研究授業」は、「授業公開週間」の取り組みをさらに発展させ、指定された授業を全教員で参観し、授業後に改善のための討論会をもつという取り組みである。前期に、7 月 10 日「模擬授業演習」(酒井照彦教授)、7 月 22 日「保育実習指導Ⅱ」(朴信永講師)を研究授業指定科目とし、研究参観とともに討論会を持った。後期も実施する予定であったが、諸般の事情により実施できなかった。
- ③「FD 講習会」は平成 27 年 1 月 24 日 (土) 15 時 30 分から 17 時に行った。今回の講師は甲斐進一教授で「プラグマティズム教育思想」という演題で講演いただき、内容について討論

を行った。本講習会は甲斐進一教授の最終講義を FD 講習会として実施したものである。

上記 3 点のほか、全学 FD 委員会と連携し、以下の活動も行った。

- *「参考となる授業レポートの作成」：全学 FD 委員会主導で、教員の参考になりうる優れた授業を紹介するレポートの作成を行った。教育学部からは酒井照彦先生の「模擬授業演習」と高橋聡先生「数理の世界 B」を紹介した。
- *「今年度の振り返りと来年度の抱負についてのアンケート」：全学 FD 委員会主導で、教員が教育・研究・組織運営・地域貢献の 4 つの観点から自らの活動を振り返り、今後の抱負を立てるというものであり、27 名中 12 名の教員が提出した。これにより教員相互の強みや地域貢献の実態を知ることができた。
- *愛知教育大学の教員養成系学部の FD についての調査研究に協力した。
- *教育學術新聞主催の「教授法が大学を変える」という企画に参加した。これはアクティブ・ラーニングを用いて学生の学修を促進した事例を集め、相互に参照しあえるライブラリーを構築するというものであり、椙山女学園大学の代表事例として、教育学部の「ふれあい実習 I（観察）」を紹介した。

3. 評価 (CHECK)

①「ラウンドテーブル」は非常に有意義な取り組みとなった。普段、教員が抱えている問題を解決し、学部によりよいカリキュラム作成のために建設的なアイデアがたくさん出された。何よりもこのラウンドテーブルの実施により、学部の教員に一体感が生まれたこと、教員集団が「学びあう共同体」になりつつあることを実感できたことが収穫である。非常に有意義な時間であるが、教員は多忙であり、定期的に時間を確保することが難しいという問題がある。今回も、新カリキュラムの骨子案ができた段階で区切りをつけることになった。今後も継続したいがその方法について思案中である。

②「授業公開週間」については、公開される授業は多いものの、参観する教員の偏りが大きいことが問題である。つまり、複数回参観し、授業者にフィードバックを与えてくれる熱心な教員がいる一方で、「ひとり 1 回以上の参観」が義務付けられているのにも関わらず、1 度も参加しない教員がいることが問題である。今年度は特に後期の参加者が激減した。教育学部としては、いつでも時間のあるときにお互いの授業を参観し、意見交換するような風土を作っていきたい。「研究授業」は、授業改善のためにも、教員間の相互理解のためにも非常に効果的な活動であるものの、研究授業対象科目を設定するのに毎回苦労すること、また全教員参加が原則であるものの、参観者が「いつもの熱心なメンバー」に固定化されつつあるのが問題である。後期は学内行事の準備で専任教員が忙殺されていたため実施することができなかった。

4. 来年度に向けて (ACT)

FD 活動が教員の「学びあう共同体」作りに貢献できるよう、継続すべきものは継続し、低調なものは活性化できるように工夫して、FD 活動を行っていききたい。

(参考資料)

平成 26 年度 9 月教授会 (報告資料)

教育学部 FD 委員会 (文責：山田真紀)

平成 26 年度前期「研究授業」および「討論会」報告

【1】研究授業 1 酒井照彦先生「模擬授業演習」(討論会：7 月 10 日)

授業参観者：竹内聖彦、坂本徳弥、竹内聖彦、浪川幸彦、野崎健太郎、宮川充司、室雅子、渡邊康、
山田真紀 (9 名)

討論会参加者：酒井照彦、宮川充司、浪川幸彦、竹内聖彦、渡邊康、室雅子、山田真紀 (7 名)

討論会の内容

- ・この授業では「模擬授業 45 分+講評 10 分」×2=110 分で、通常の授業 (90 分) を変更して授業運営をしている。受講生数に応じて、2 名または 3 名にて 45 分間の授業を行う (学生は TT ではなく交代制で授業を行う)。児童役の学生には役割が割り振られており (「奇想天外な質問や意見をいう係」「逸脱行動をする係」など)、授業者は授業を行うだけでなく、授業で起こりうる「想定外」な状況にも対応していくことが求められている。模擬授業はビデオ撮影され、授業者は授業後にビデオで自分の授業を視聴し、反省する機会をもつ。
- ・酒井先生による 10 分間の講評の内容が非常に具体的で、学生にプラスになっている。授業の展開の仕方、想定外の子どもの発言に対する対応、板書の構成、チョークの持ち方、教師としての適切な服装、漢字の書き順に至るまで、適切で細やかな指導が施され、授業者の学生も、児童役の学生も納得した表情で、よい学びの場となっているようだ。
- ・椋山の教育学部には必要な科目である。「場数を踏めばよい授業者になる」とは一概に言えないが、酒井先生の指導は、次のグループに「これまでの改善点を踏まえて、よりよい授業を展開しよう」というモチベーションを上げるものとなっている。これは質の高い授業運営に欠かせない。(あまり質のよくない授業に対し、指導者が曖昧な評価をすると、学生のモチベーションは上がらない)。
- ・児童役は特別な役割を果たしながら、ノートテイクもして忙しいが、授業の「よい点」「改善点」についてもメモを取らせながら参加させると、「授業を見る目」も養われるのではないかと。酒井先生の講評において同じ指摘があれば嬉しいし、自分の気づかなかった指摘があるとより納得が得られる。

【2】研究授業 2 朴信永先生「保育実習指導Ⅱ」(討論会：7 月 22 日)

授業参観者：宇土泰寛、磯部錦司、竹内聖彦、深谷和義、室雅子、清葉子、山田真紀 (7 名)

討論会参加者：磯部錦司、宇土泰寛、室雅子、清葉子、小杉裕子、大森隆子、朴信永、深谷義和、
白井朗、竹内聖彦、宮田俊雄、山田真紀 (12 名)

討論会の内容

- ・この授業は3年生が受講する必修の授業であり、9月に実施される（学生にとっては2回目の）保育所実習の事前指導を行う。本時は「実習の事前指導として実習時に必ず守るべきこと」「乳児の緊急時の対応について」を中心に据えた内容であり、パワーポイントと空欄のついた書き込み式のプリントを用いている。指導要領は重要な事項の羅列で、網羅的に学生に理解させるのは難しさが伴うものであるが、具体例を添え、また絵本の読み聞かせなどの変化を加えることで、学生を飽きさせず、理解を深める授業方法の工夫が見られた。
- ・朴先生によると、実習ごとに事前指導があり、保初の学生は実習回数が多いことから、事前指導の回数も多くなり、3年生ともなると「もう知っている」「また同じ」と緊張感のない態度を取る学生もいるとのことである。はじめて保育所実習に参加する2年生が受講する「保育実習指導Ⅰ」と、この「保育所実習Ⅱ」の受講生を交流させる会を昼休みに設けているが、学生は昼休みも多忙であり、十分な効果をあげていない。時間割の設定を工夫することで、ピア同士の学び合い、理解の深まりが期待できるような授業方法を模索していきたいとの希望が出された。
- ・討論会参加者からは、それぞれの実習の事前指導でどのような指導が行われているか、相互理解をしながら学生指導することの重要性、さらに、実習の巡回指導には教育学部の教員すべてが関わることから、全員の教員が「学生がどのような指導を受けて実習に出ているか」を共有することの重要性が指摘された。（特に、近年、問題になっているソーシャルネットワークと実習との関係については、非常に明確な指導がなされており、学部全体で共有すべきである。）
- ・学習指導要領や保育所保育指針などの重要な文書資料をいかに学生に理解させ、定着させるか。どの教員も頭を悩ませているところである。安易な「アクティブ・ラーニング」でお茶を濁すのではなく、真摯にひとつひとつを取り上げ、学生を飽きさせず、十分に理解できる工夫を取り入れながら授業していくことが大切である。

以上

平成 26 年度 看護学部 FD 活動報告

服部 律子

前年度に引き続き、「相山女学園大学における学士課程教育の質的転換のための改革アクションプラン」を受け、看護学教育における教育内容や教育方法の向上を中心に、FD 活動に取り組んだ。

1. 教育内容の向上に関する取り組み

1) カリキュラムの検討

前年度から取り組んできた新カリキュラムを、カリキュラム検討ワーキンググループを中心に完成させ、文部科学省に申請し、認可を受けた。

新カリキュラムの作成にあたっては、平成 24 年度に行われた現行カリキュラムの見直しの結果を受け、看護学の基本的枠組みを踏まえ、段階的な看護学の学習の積み上げや実践力を修得するのに必要な各看護学領域の時間の確保等に留意した。また、1 年次に教養教育を詰め込むのではなく、専門科目を履修した後の 4 年次にも教養教育科目を履修できるようにするなど、看護学部が掲げる「豊かな人間性と確かな実践力を兼ね備えた看護職者の育成」という理念のさらなる実現に向けた改善を行った。

2) メディア・リテラシー教育の充実に向けた研修会の開催

平成 26 年度初頭に発生した、学生の SNS による情報拡散に関する問題を受け、医療者としての情報の取扱いの倫理を含めたメディア・リテラシー教育の充実に向け、教員自身が SNS 等ネットワークにおける情報拡散の仕組み等の理解を深めるため、大学活性化経費を受けて研修会を開催した。

テーマ：ネットワークにおける情報拡散

日 程：平成 26 年 12 月 25 日（木）9：00～11：00

講 師：伊藤嘉浩氏（名古屋工業大学）

参加者：看護学部教員 40 人

ネットワークの基礎的な内容から学生が利用しているスマートフォンの“掲示板アプリ”、ネットワーク上での情報拡散のしくみ、情報の集合による“集合知”の危険性、個人情報流出のしくみなど、学生が使用している様々な「しくみ」について学ぶ機会となった。また、講師の医療系学生へのメディア・リテラシー教育のご経験から、近年看護学生によるネットワーク上への書き込みによって生じた問題など身近な事例を用いてネットワークにおける情報拡散について理解を深めることで、我々が直面しているリスクや学生へのアプローチの方向性などを考える機会となった。

2. 教育方法の向上に関する取り組み

1) クリッカーの導入と研修会の開催

アクティブラーニングのツールとして広く利用されているクリッカー1セット(100人クラス用)を導入した。それに合わせ、できるだけ多くの教員がクリッカーを使用できるようにするため、2回の研修会を開催した。合計21人の教職員が研修会に参加し、1年生から4年生までの授業や実習オリエンテーションでクリッカーが用いられた。

2) クリッカーを用いた教育効果の評価

クリッカーを用いた授業を行うことによる学生の反応を明らかにし、クリッカーの効果を評価することを目的に、大学活性化経費を受けて、グループフォーカスインタビューによる調査を実施した。対象は最も多くクリッカーを用いた授業を受けた2年生とし、調査への協力が得られた学生4名を1グループとしてグループフォーカスインタビューを実施した。

その結果、「楽しい」、「自分が参加するから眠くならない」、「授業内容が印象に残る」、「他の人の考えがわかり自分が考えるきっかけになる」、「知識の程度が他者と比較できることで学習へのスイッチが入る」、「投票結果への教員のフィードバックによりライブ感が出る」などの効果があることが明らかになった。また、「みんなの考えを知る」、「理解度の確認」の場面での使用や、「授業開始時の前回授業の復習」での使用を望んでいた。

さらに、クリッカーの使用により「自分が少数派に属した時の落ち込み」や「他の学生がその考えに至った理由がわからない」、「席が近いと周囲の学生の目が気になって本音で押せない」など、クリッカー使用に伴う課題も明らかとなった。「教員のフィードバック内容の重要性」を重視していることも明らかとなり、クリッカーを使用する教員の力量が問われていることは他の教育方法と同様であることも明らかとなった。

グループフォーカスインタビューは応募のあった学生が調査対象であったことから、前向きな反応が多く抽出されたとも考えられる。さらなる検討のために、1年から3年の学生を対象に質問紙調査を行い、現在分析中である。

3. 看護系教員としてのFDの検討

現在、大学教員としてのFDに加え、看護学教育の特性を踏まえたFDの導入が全国規模で検討されている。この動向に合わせ、看護学部においても次のような取り組みを行った。

1) ワークショップへの教員の派遣

千葉大学主催、文部科学省後援で開催された平成26年度看護学教育ワークショップ「看護系大学教員の職能開発とキャリア支援～FD マザーマップの活用を通して～」に教員を派遣した。

日 程：平成26年10月20日(月)～10月22日(水)

会 場：千葉大学けやき会館

派遣教員：箭野育子学科主任

2) 看護系大学における「看護系大学FD マザーマップ」活用に関する研修会

ワークショップに参加した箭野育子学科主任を講師とし、「看護系大学 FD マザーマップ」活用に関する研修会を開催した。

日 程：平成 27 年 1 月 13 日（火）12：20～13：20

参加者：看護学部教員 31 人

「看護系大学 FD マザーマップ」の概要やその使い方などを理解するとともに、教員自身の課題の振り返りと看護系大学の組織的課題の発見の必要性について考える機会となった。

4. その他の活動

- 1) 平成 26 年度 4 月就任の教員を対象に、「人間論」の第 1 講の聴講を含めたプログラムで新任教員の研修を実施した。
- 2) 新任教員研修セミナー（八王子セミナーハウス）に竹井留美講師が参加した。

5. 総 括

平成 26 年度の FD 活動では、新カリキュラムを構築し、文部科学省へ申請し認可を受けたことと、クリッカーの授業への導入開始という 2 つの成果があったと評価できる。

看護学部の場合、年間を通じて教員が臨地実習指導のために実習病院に出向いているという事情から、教員全員参加での FD 研修が難しい状況にある。また、教育の質的転換のための FD 研修会であるにも関わらず、伝達方式の“伝統的”研修方法に偏重しているという現状もある。また、平成 26 年度に緒についた看護系大学 FD マザーマップの活用などは今後の継続的取り組みが重要となる。

これらの現状や課題を踏まえ、次年度に向けては、看護学教育の特性を踏まえた参加型の FD 活動の実施や、実習時期を考慮し同テーマで複数開催するなど、FD 活動のあり方の見直しが必要であろう。また、看護系大学 FD マザーマップの活用等も含め、教員自身の課題の振り返りと組織的課題の発見に向けた取り組みも重要な課題であろう。

Ⅱ 全学 F D 小委員会の活動

- 1 授業アンケート小委員会の活動記録（平成26年度）
- 2 授業改善小委員会の活動記録（平成26年度）
- 3 教員研修小委員会の活動記録（平成26年度）

平成26年度
授業評価アンケートの分析

授業アンケート小委員会

1 授業評価アンケートの実施方法

平成26年度は、卒業研究や集中講義など受講者数が10名未満の科目を除く全ての前期開講科目を対象に授業評価アンケートを実施した。授業評価アンケートは、全学の教育の改善・充実を図るために実施され、全学FD委員会に設置された授業アンケート小委員会が授業評価アンケート結果の分析を担う。前期開講科目が対象となることから、表1に示すように7月16日（水）～22日（火）までの7日間を実施期間、7月2日（水）～15日（火）までを予備期間とした。

表1 実施期間と予備期間

実施期間	7月16日（水）～22日（火）
予備期間	7月2日（水）～15日（火）

アンケートの設問項目は表2に示す18項目で構成されている。受講者はこれらの設問に対し、「その通りである」、「どちらかといえばその通りである」、「どちらかといえばそうではない」、「そうではない」の4択で回答する。また、これら18項目に加え、「1. この授業で、よかったと思う点がありましたら、記入してください。」、「2. この授業で、改善すべき点がありましたら、記入してください。（授業内容、授業レベル、授業方法、授業形式、学生の姿勢、教員の言動など）」の2つの自由記述欄が設けられている。設問1～15は全科目共通の設問項目¹であり、設問16～18は教員が独自に設定する設問項目である。今回の分析では、自由記述欄の回答と設問16～18の教員独自の設問項目は分析対象から除く。

¹平成23年度までは科目区分に応じてアンケートの設問項目は異なった。

表2 アンケートの設問項目

設問項目
設問1. この科目を学修する上で、シラバスの内容は役立った。
設問2. この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。
設問3. この授業は理解しやすかった。
設問4. この授業の進度は適切であった。
設問5. 教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。
設問6. 板書や資料（配布資料・映像など）の提示方法は適切であった。
設問7. 教員の話し方（声の大きさ、話す速さ、マイクの使い方など）は適切であった。
設問8. 私語など、不真面目な学生に対する教員の対応は適切であった。
設問9. 授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。
設問10. 予習や復習など、自主的な学習を行なった。
設問11. あなたから見て受講者は真面目に参加していた。
設問12. この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。
設問13. シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。
設問14. この授業を受けてあなたが獲得あるいは向上したと思う項目を選択してください。 （複数選択可）【1】知識・理解【2】思考・判断【3】態度・志向性【4】技能・表現
設問15. 総合的にみて、この授業は充実していた。
設問16. （教員による独自の設問項目）
設問17. （教員による独自の設問項目）
設問18. （教員による独自の設問項目）

また、授業評価アンケートの対象は全学部で1224科目あり、その内、1173科目において授業評価アンケートは実施された²。各学部の実施率を表3にまとめる。対象科目数は学部毎で異なり、少人数で実施する科目が多く設置されている看護学部の対象科目数は57と他と比べ非常に少ない。また、実施率は全学部において90%を超えており、例年に比べても非常に高い値となった。このため、今回報告する分析結果は十分な標本数を備えていると考えることができる。

² 平成25年度は779科目を対象とし、711科目で実施された。実施率は91.3%。

表3 実施科目数及び実施率

学部	対象科目数	実施科目数	実施率	未実施科目数
生活科学部	209	205	98.1%	4
国際コミュニケーション学部	267	251	94.0%	16
人間関係学部	205	195	95.1%	10
文化情報学部	207	198	95.7%	9
現代マネジメント学部	138	131	94.9%	7
教育学部	141	136	96.5%	5
看護学部	57	57	100%	0
計	1,224	1,173	95.8%	51

授業評価アンケートの実施後は、アンケート結果を教員にフィードバックすると共に、教員の自己点検・授業評価を行うための「リフレクション・ペーパー」の提出を依頼した。リフレクション・ペーパーの記述形式は特に定めないが、「1. 結果としてよかった点」「2. 改善されるべき点」「3. 今後の改善点、その他」の3項目を中心に記述することとした。各学部のリフレクション・ペーパーの提出率を表4³⁾にまとめる。看護学部は対象科目数が他学部と比べ少ないものの、提出率は最も高く87.7%であった。全体でも提出率は75.4%と高く、本学の教員の授業改善に向けた積極的な姿勢が読み取れる（ウエストゲイト担当の英語科目を除くと提出率は77.2%）。しかし、昨年度の提出率83.3%と比較すると今年度は約8%減少している。来年度は、リフレクション・ペーパーをFD活動の一環に位置付け、教員間での認識を促すとともに、提出率の向上を目指す必要がある。

表4 リフレクション・ペーパーの提出率

学部	対象科目数	実施科目数	提出科目数	提出率
生活科学部	209	205	169	82.4%
国際コミュニケーション学部	267	251	182	72.5%
人間関係学部	205	195	136	69.7%
文化情報学部	207	198	148	74.7%
現代マネジメント学部	138	131	95	72.5%
教育学部	141	136	105	77.2%
看護学部	57	57	50	87.7%
計	1,224	1,173	885	75.4%

³⁾ ウエストゲイト講師が担当する英語の科目では、集計結果の配布前に契約終了となるため、リフレクション・ペーパーの提出は求めない（文化情報学部：20科目、教育学部：6科目）。

また、リフレクション・ペーパーの提出依頼と同時に、授業アンケート調査実施に関する意見書の提出も依頼した。意見書の提出状況を表5に示す。提出された意見書の総数は122であった。これは平成23年、平成25年とほぼ同じ提出数であり、授業評価アンケートの実施に対して、教員が強い関心を持っていることを示している。これらの意見書を参考に本学の今後のFD活動に活かしていくことが強く求められる。

表5 意見書の提出数

年度	提出数
平成26年度前期	122（専任:52、非常勤:70）
平成25年度前期	127
平成23年度前期	120
平成22年度前期	112
平成21年度後期	82
平成20年度前期	87

2 授業評価アンケートの分析

授業評価アンケートの結果を分析するに当たり、株式会社クイックスに報告書用のグラフ作成を委託した。作成したグラフは表6に示す6種類が分析対象である。いずれの分析対象においても、複数選択が可能な「設問14」と教員独自の設問項目である「設問16～18」は除いた。また、設問に無回答であった場合は「無回答」として集計に加えることとした。

表6 分析対象とグラフの種類

分析対象	グラフの種類
①設問項目の回答数の割合	100%積み上げ横棒
②設問項目の平均スコア	レーダーチャート
③設問12と他の設問との相関係数	横棒
④「平均スコア」と「設問12の相関係数」を軸とした散布図	散布図
⑤設問15と他の設問との相関係数	横棒
⑥「平均スコア」と「設問15の相関係数」を軸とした散布図	散布図

2.1 設問項目の回答数の割合

設問1～15における回答数の割合を100%積み上げ横棒グラフで表す。各グラフは科目区分（講義、演習、語学、実験実習）に分けて集計されている。図1～14に示すグラフが全科目を母集団としたときの回答数の割合である。

図1、2はシラバスに関する設問1、2の結果である。設問1では、いずれの科目区分においても、「その通りである」「どちらかといえばその通りである」という肯定的な回答が約9割を占めており、シラバスに記載されている情報が有用であることを示している。また、設問2においても肯定的な回答が大部分を占めているが、「演習」「語学」はシラバスに記載された計画に沿って授業が進められる傾向が強いことが読み取れる。一方で、「講義」「実験実習」はシラバスに記載された計画から外れることも多いようである。特に実験実習においては、授業の性質上、受講者の学修状況に合わせ、教員が柔軟に計画を変更していることが推測される。今後も全学FD委員会を中心にシラバスの記載事項の充実を継続することが重要だと思われる。

図3、4は授業の難易度や進行速度に関する設問3、4の結果である。設問3では、「演習」「語学」において、「その通りである」と回答した割合が約5割と非常に高い値を示した。同様に、設問4においても、「演習」「語学」の肯定的な回答の割合が他と比べ高い結果を示した。設問2で示されたように、「講義」「実験実習」と比べ、「演習」

「語学」はシラバスの計画通りに授業が進行されることも、この結果に関係していると考えられる。全体としては、肯定的な回答が大部分を占めており、本学の教員が学生の目線に合わせた授業を心掛けていることが分かる。

図5～9は授業における教員の振る舞いに関する設問5～9の結果である。設問5～9のいずれにおいても、他の科目区分に比べ、「語学」において「その通りである」と回答した割合が最も多かった。語学は古くから教授法が研究されており、多種多様な教育テクニックが確立されている。この結果から、本学の語学担当教員は、語学の教授法に熟達し、様々な教育テクニックを授業に取り入れ、効果的な授業を実現していることが想像できる。一方で、一般の「講義」においては、テーマが様々に異なることから、教育テクニックの確立は難しく、教員独自の教授法に依存する傾向が強い。公開授業などを活用し、積極的に他の教員の教授法を学び取り入れることが重要と考える。また、設問8においては、「講義」のみが「その通りである」と回答した割合が非常に少なく44.5%しかない。演習や語学など少人数の講義では問題ないが、100人以上の受講者を対象とする大規模講義では、教員の監視が行き届かず、不真面目な学生への対応も難しいことが原因と考えられる。

図10、11は授業における学生の振る舞いに関する設問10、11の結果である。設問10の結果から、予習・復習などの自主的な学習が不十分な学生が約2～3割存在することが分かる。特に「講義」においてその割合は顕著であり、「どちらかといえばそうではない」が28.0%、「そうではない」が12.2%と高い値を示した。反転授業などの新しい授業スタイルを導入するなど、受講者に積極的な学習を促すための仕掛けが必要であると感じる。また、設問11においては、全体的に肯定的な回答が多いが、やはり「講義」のみが他と比べ肯定的な回答が少ない。設問8で述べたように、大規模講義の弊害がここにも現れていると思われる。

図12は授業を受けたことによって生じた学生の意識の変化に関する設問12の結果である。「演習」「実験実習」において「その通りである」と回答した学生が5割を超えるのに対し、「講義」「語学」は4割程度に留まった。少人数で実施することが多い「演習」「実験実習」では、発表や討論など受講者の積極的な参加を要するため、受講者自らでモノを考え、新たなことに気付く機会が多いことが理由と考えられる。一方で、「講義」は教員主導で受講者は受身の形態になりやすい。アクティブ・ラーニングなどの試みを教員も積極的に導入すべきと考えられる。また、「語学」においては、「講義」とは異

なり、学生主導の形態ではあるものの、新たな気づきに至ることは比較的少ないようである。

図13は学生の達成率に関する設問13の結果である。全体的には肯定的な回答が9割以上を占めており、シラバスに記載された目標への達成を受講者は感じていることが分かる。一方で、「講義」は他の科目区分と比べ、「その通りである」と回答した割合が少なく37.9%に留まった。大規模授業などでは、学生の習得度に差が生まれるのは、致し方ないと思われる。

図14は授業に対する学生の総合評価に関する設問15の結果である。全体的には肯定的な回答が約8割を占めた。設問8、13と同様に、「講義」は他の科目区分と比べ肯定的な回答が少ない。大規模授業を中心とする「講義」科目の改善が全学FD委員会の今後の焦点となる。一方、この設問において、無回答の受講者が約1割～2割存在した。この割合は他の設問に比べ非常に高い値である（他のいずれの設問においても1%未満）。この原因は、「授業アンケート調査」用紙の設問のレイアウトに原因があったと考えられている。設問15の直前に配置されている設問14は、他の設問とは趣が異なる“複数選択可”の設問であり、設問14と設問15の間の空白は広く設けられている。このことから、設問14がアンケートの区切りだとみなし、そこで回答を終えた受講生が多く存在したと考えられる。来年度の「授業アンケート調査」用紙では、設問のレイアウトの改善が必須である。

図1 設問1の回答数の割合（全科目）

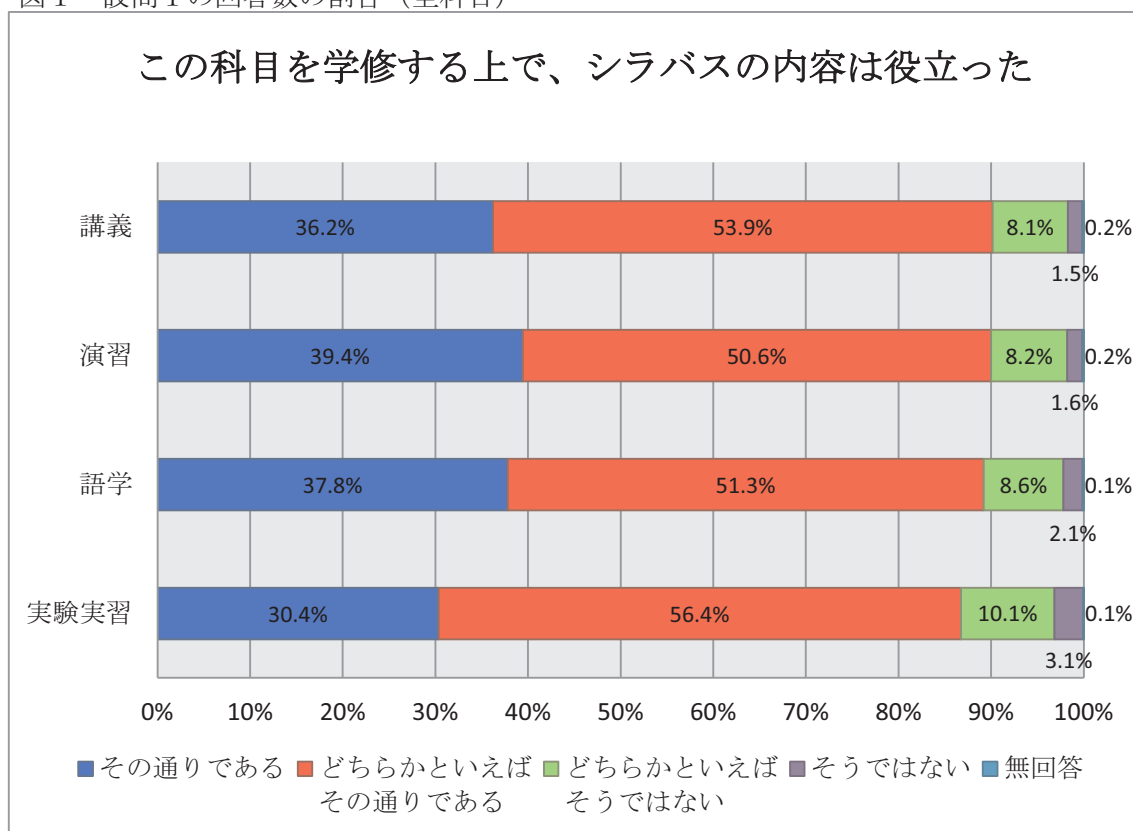


図2 設問2の回答数の割合（全科目）

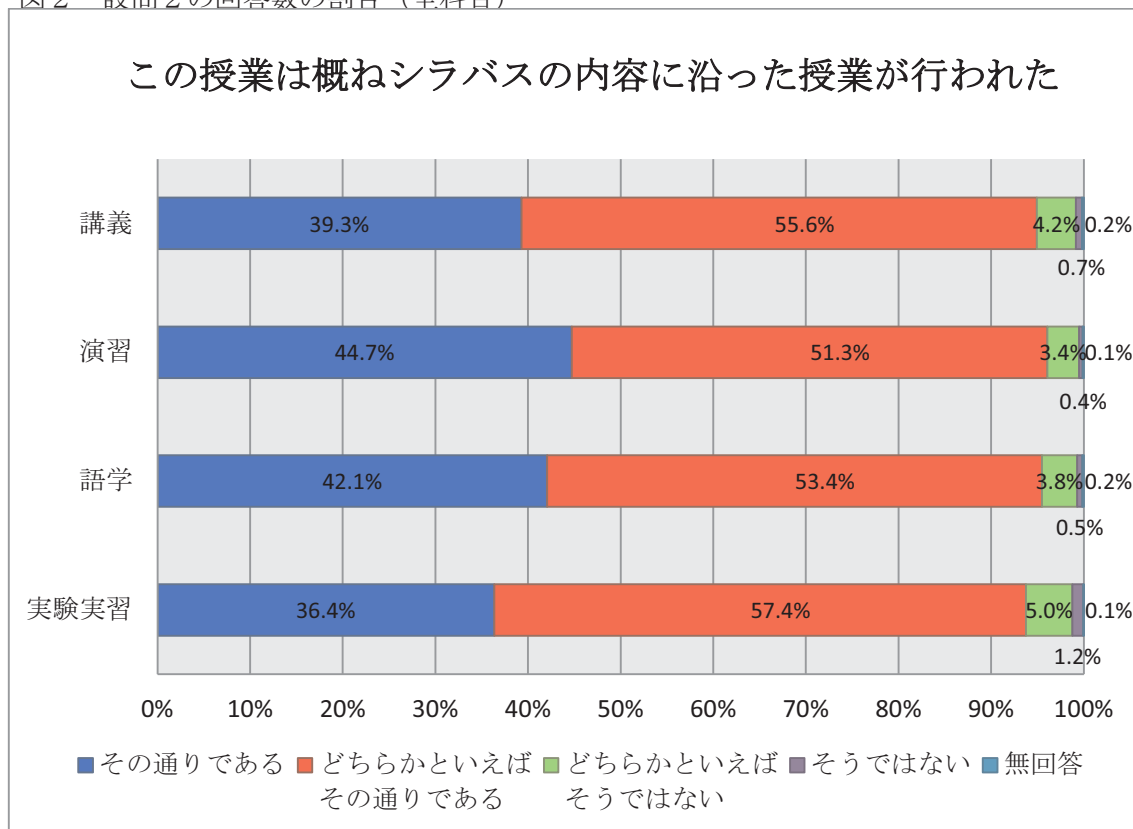


図3 設問3の回答数の割合（全科目）

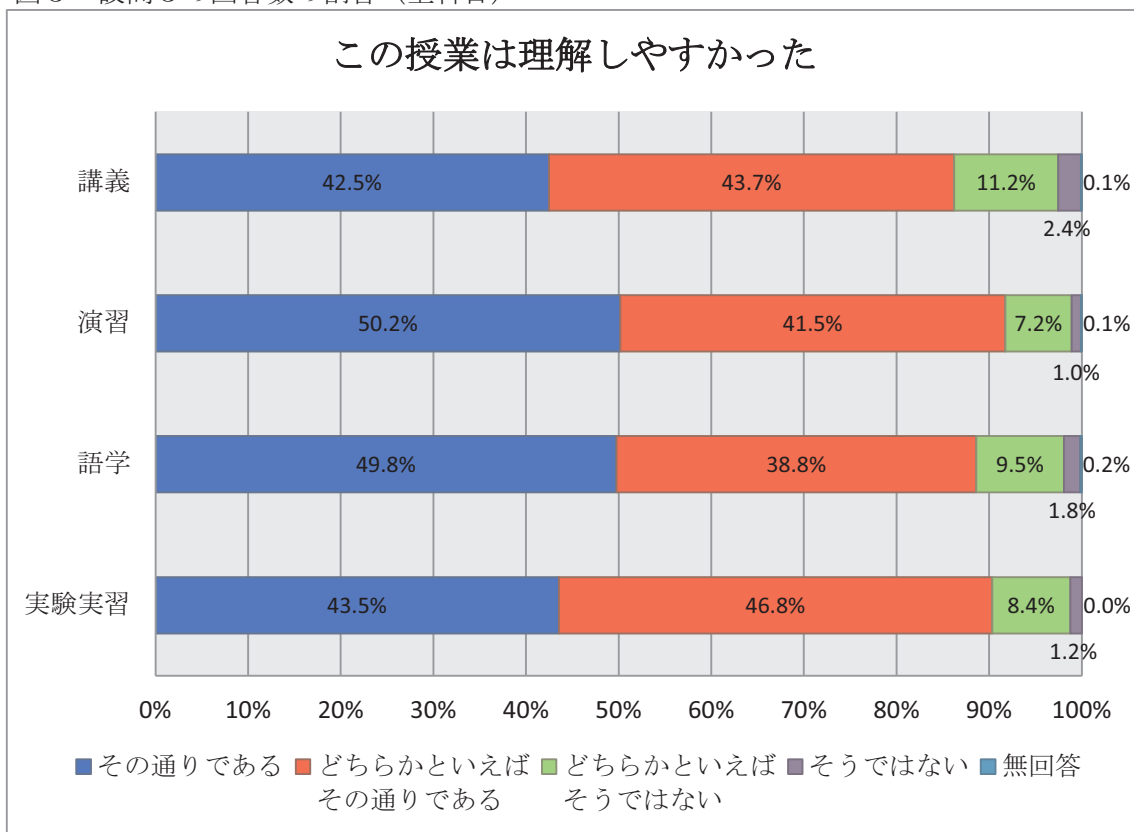


図4 設問4の回答数の割合（全科目）

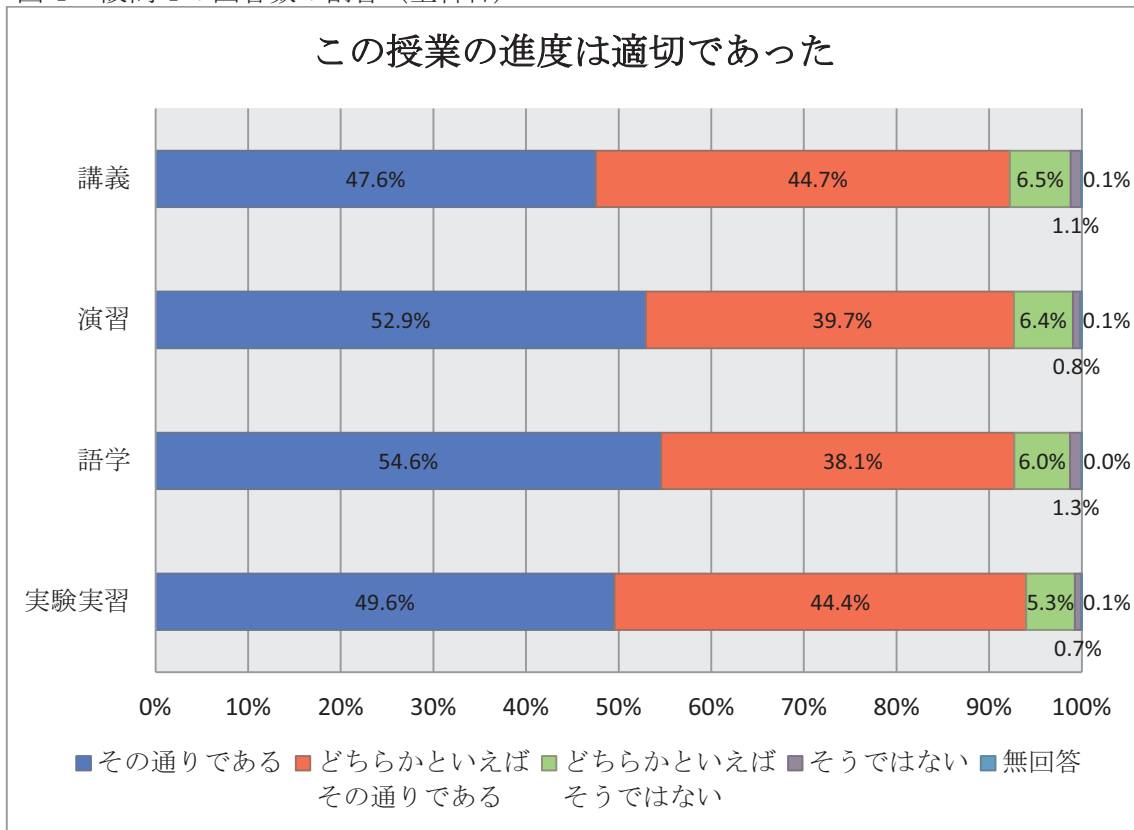


図5 設問5の回答数の割合（全科目）

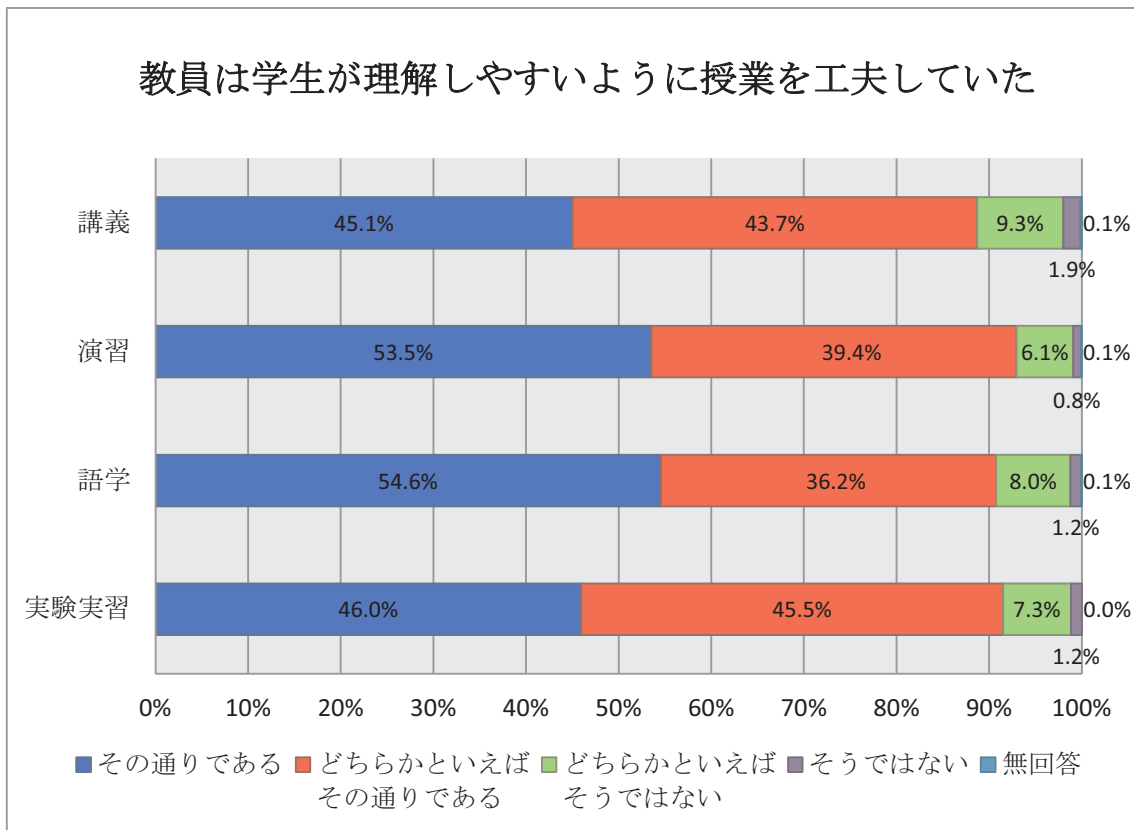


図6 設問6の回答数の割合（全科目）

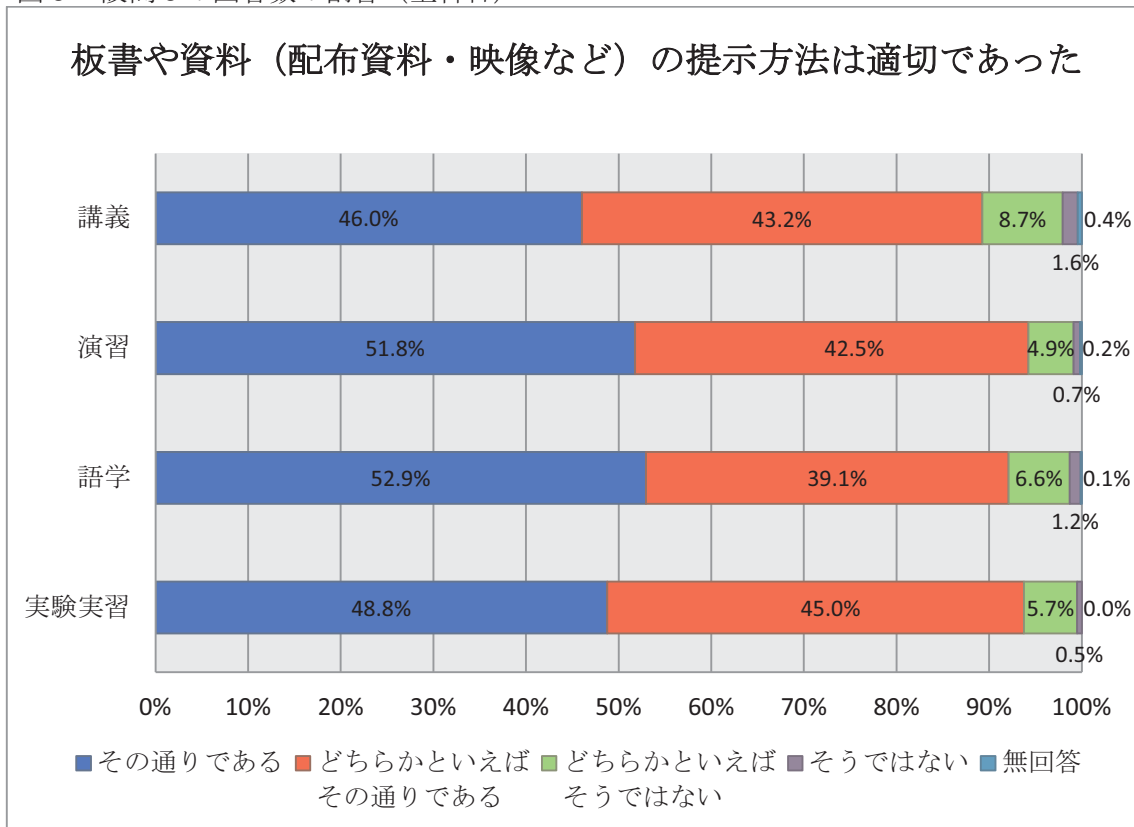


図7 設問7の回答数の割合（全科目）

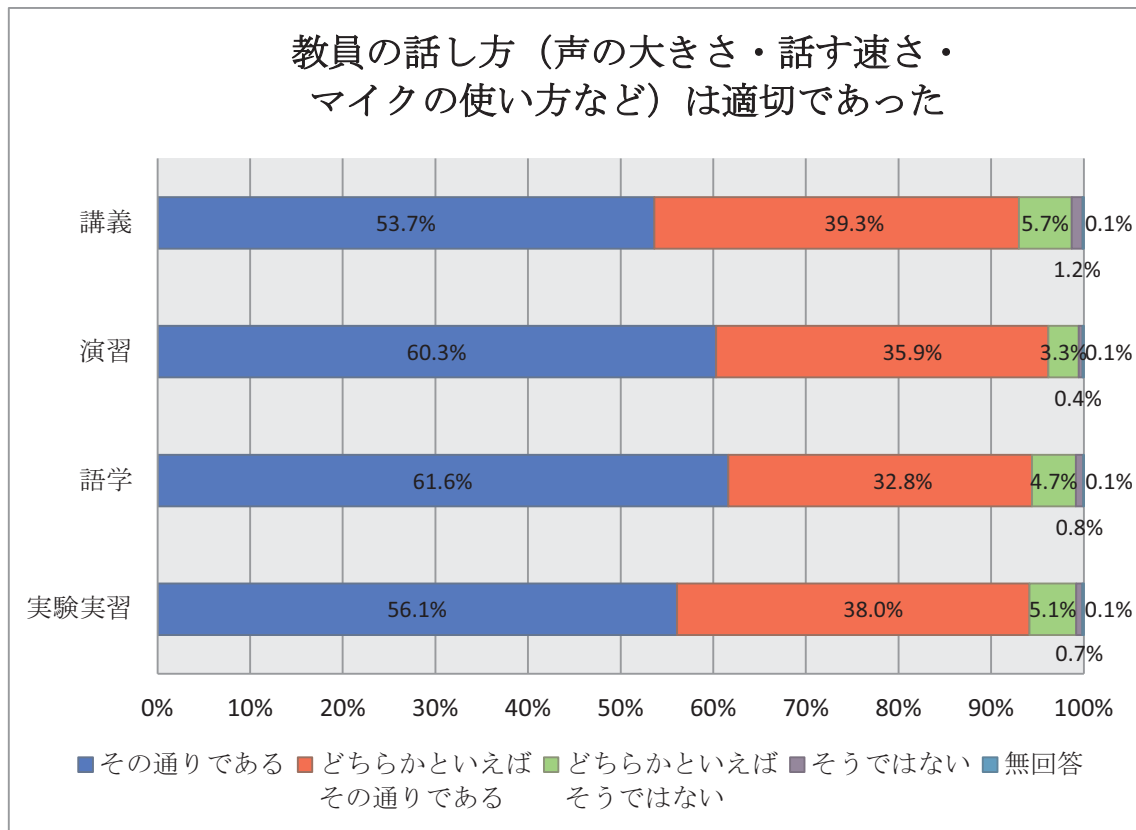


図8 設問8の回答数の割合（全科目）

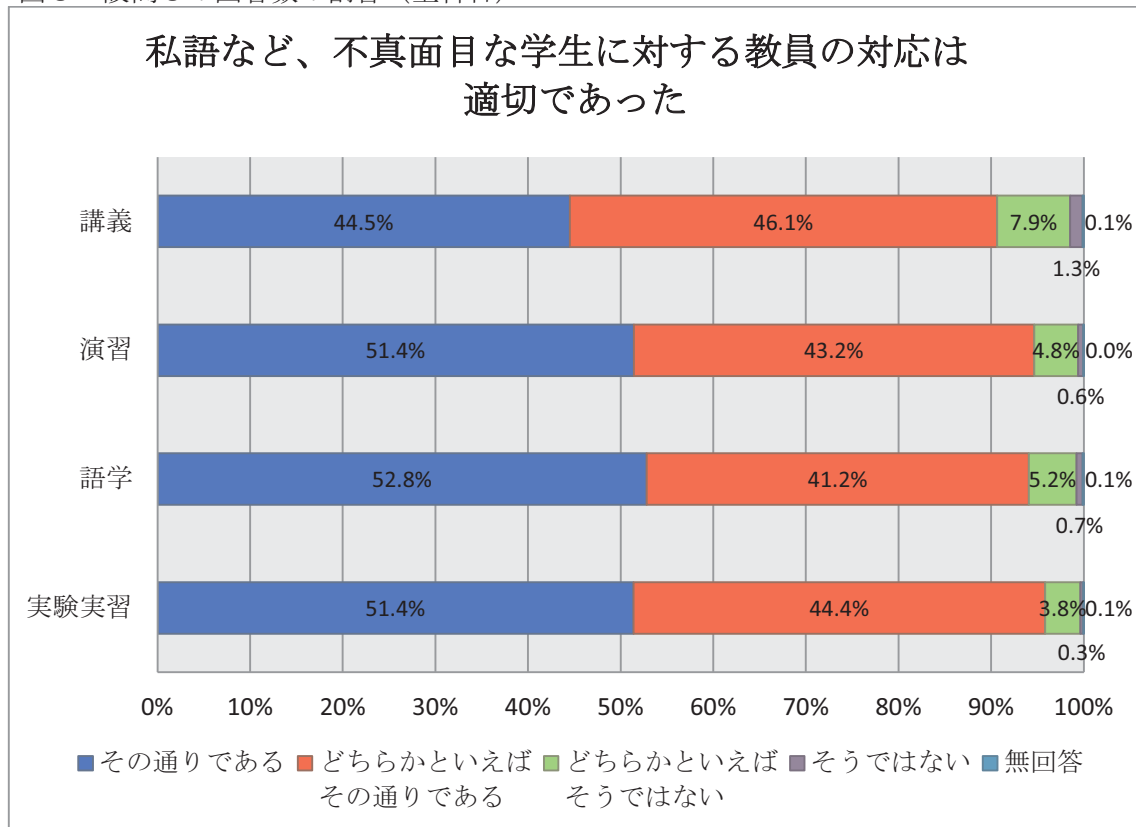


図9 設問9の回答数の割合（全科目）

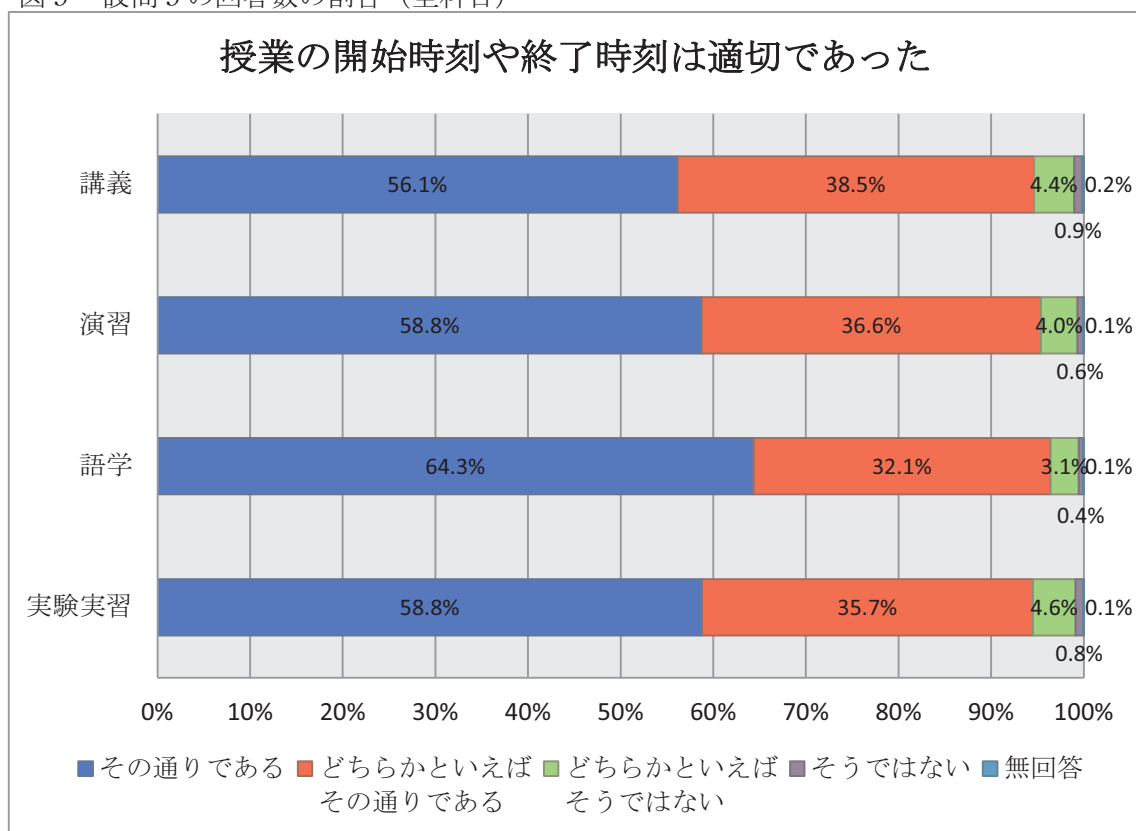


図10 設問10の回答数の割合（全科目）

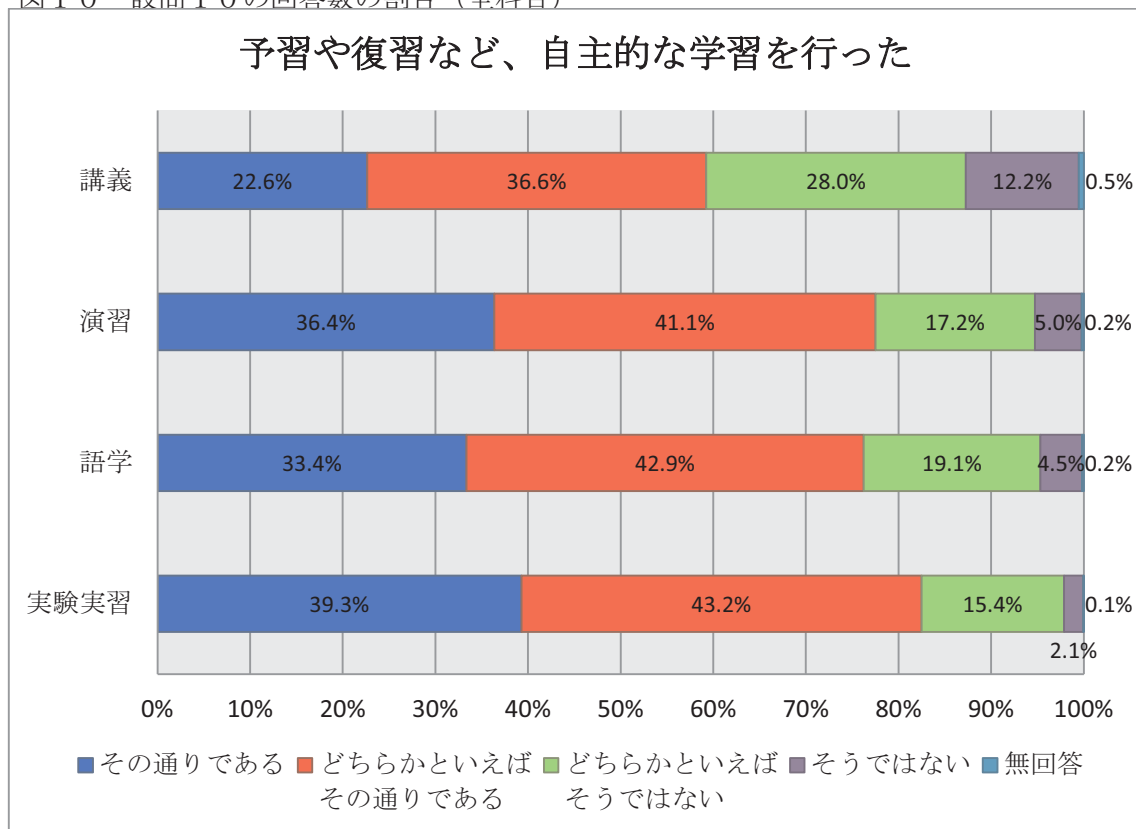


図 1 1 設問 1 1 の回答数の割合（全科目）

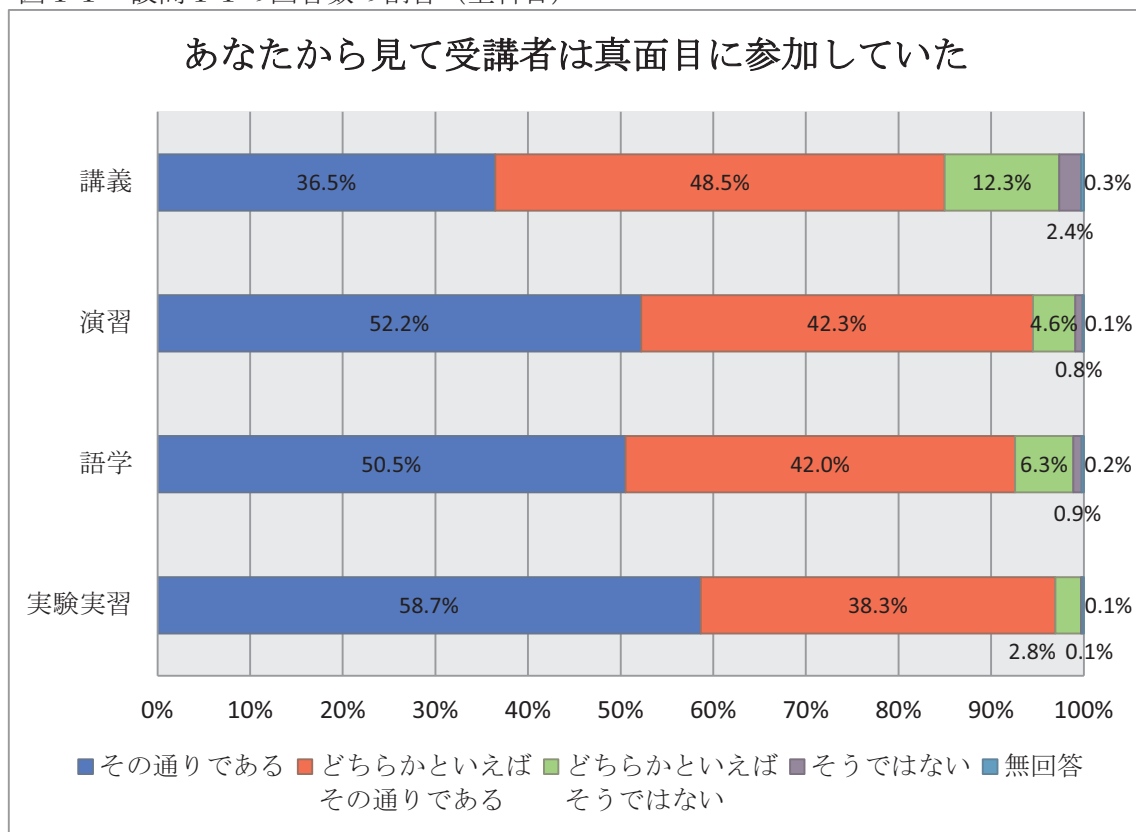


図 1 2 設問 1 2 の回答数の割合（全科目）

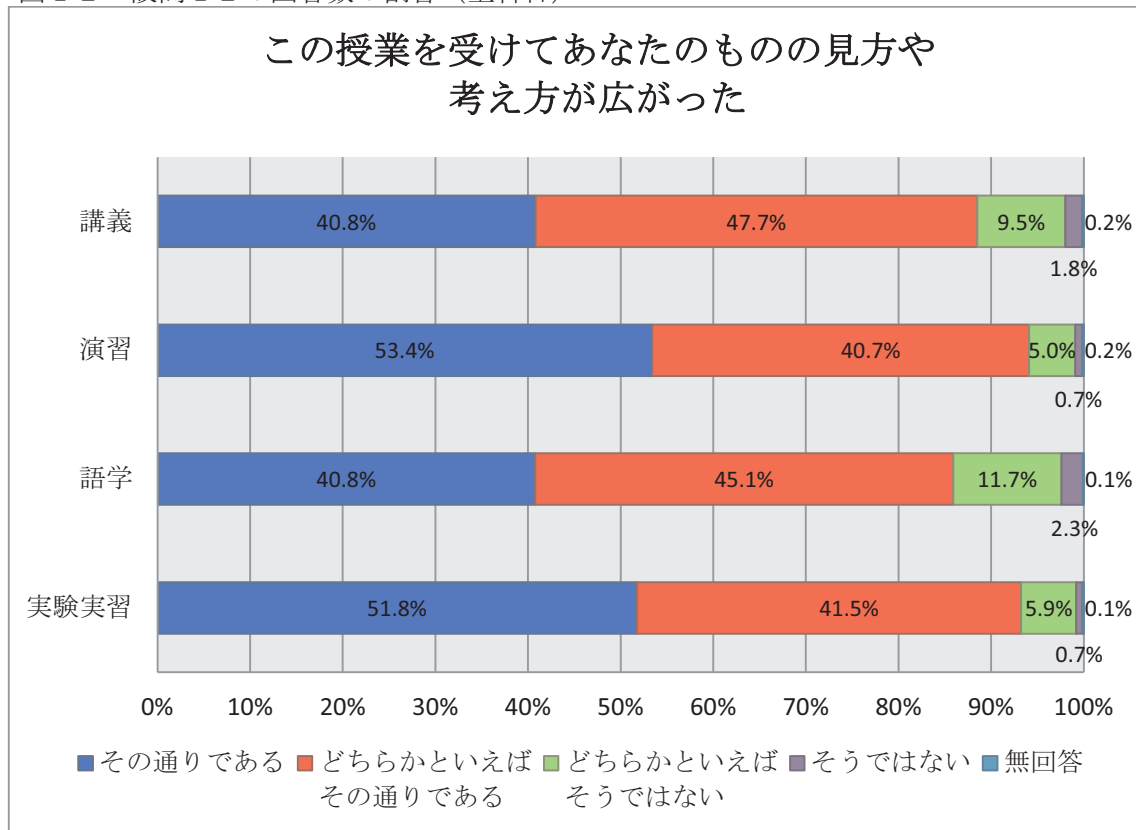


図 1 3 設問 1 3 の回答数の割合（全科目）

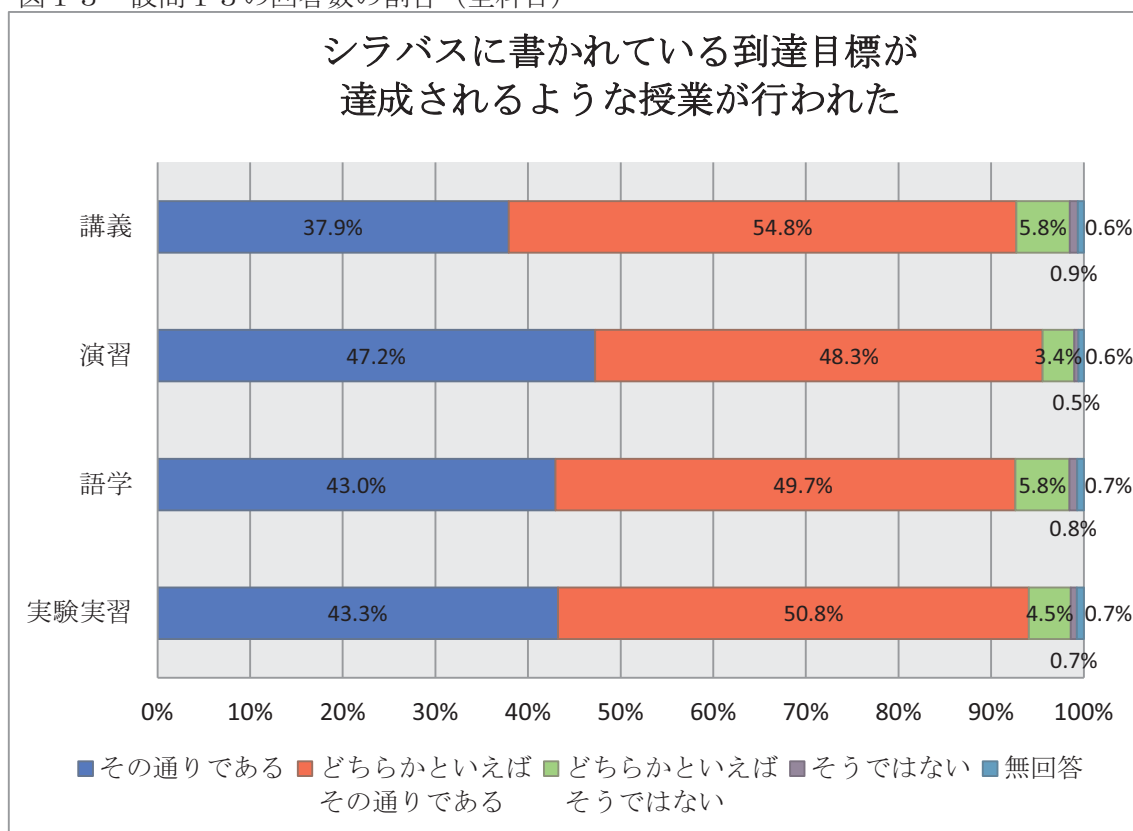
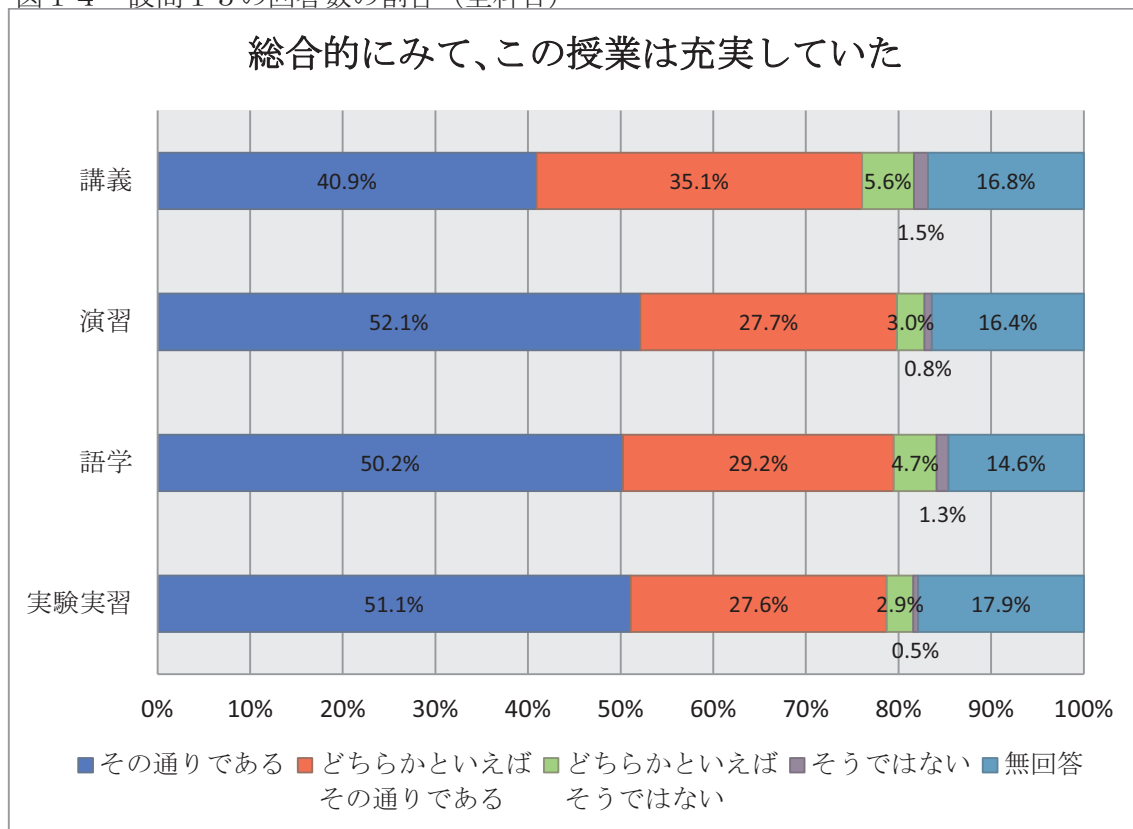


図 1 4 設問 1 5 の回答数の割合（全科目）



2.2 設問項目の平均スコア

設問1～15における各学部平均スコアと全学部平均スコアとの比較をレーダーチャートで表す。ここでは、ある設問において、「その通りである」を4点、「どちらかといえばその通りである」を3点、「どちらかといえばそうではない」を2点、「そうではない」を1点として、全回答の平均値を求め“平均スコア”と定義する。このため平均スコアは1～4の範囲に収まる値となる。図15～21に示すグラフが各学部の平均スコアである。

図15が生活科学部の結果である。いずれの平均スコアも全体に比べ劣っていることが分かる。生活科学部は、国家資格である「管理栄養士」取得を目指す管理栄養学科を含むため、試験対策などが中心となる授業が多く設置されている。このことから、他学部と比べ、望まれる授業のレベルは高く、受講者の評価も厳しくなる傾向が読み取れる。受講者の積極的な姿勢に応えられるよう、教員も真摯に学生と向き合うことが重要と考える。

図16は国際コミュニケーション学部の結果である。いずれの平均スコアも全体に比べ優れていることが分かる。他学部と比べても、この傾向は顕著であり、国際コミュニケーション学部の授業満足度は非常に高いと言える。公開授業などの仕組みを利用して、他学部の教員が国際コミュニケーション学部の授業を体験する機会を増やすことも検討すべきである。一方で、国際コミュニケーション学部は、英語の徹底取得を謳った国際言語コミュニケーション学科を含み、語学教育が充実している。前節の回答者数の割合で示したように、「語学」は他の科目区分に比べ、評価が高い傾向にある。このことが、国際コミュニケーション学部の結果を後押ししたことも考慮する必要がある。

図17、18は人間関係学部と文化情報学部の結果である。両学部の平均スコアは類似しており、設問10の値が低いことを除き、その他の設問項目は全体の平均スコアとほぼ一致している。これらの学部は、人間や文化をテーマとした文系色の強い科目が多く設置されており、受講者の習得度の差異が小さいことが理由と考えられる。しかし、予習・復習など自主的な学習に取り組む受講者が少ないことは問題である。アクティブ・ラーニングなどの授業スタイルを積極的に導入することが両学部には求められる。

図19は現代マネジメント学部の結果である。いずれの平均スコアも全体の平均スコアとほぼ一致している。この傾向は、人間関係学部・文化情報学部と似ているが、設問10が両学部と比べ高いことは特筆すべきである。現代マネジメント学部は、社会に直結した

「経営」を学問の中心に据え、少人数制の教育を積極的に導入している。これらの教育努力が学生の自主性に繋がったと思われる。

図20は教育学部の結果である。国際コミュニケーション学部には及ばないものの、いずれの平均スコアも全学部の平均スコアと同等以上の値を示している。教育学部は、学部の性質上、教員同士の相互依存も強く、授業改善に向けて熱心に取り組んでいる。この教員の姿勢が、受講者の授業評価にも好影響を与えていると考えられる。

図21は看護学部の結果である。いずれの平均スコアも全学部の平均スコアとほぼ一致するが、設問10のみが高い値を示している。看護学部は生活科学部と同様に国家資格である「看護師・保健師」取得を目標に掲げていることから、試験対策を中心とした科目が設置されている。一方で、平成27年度の教員数は49人、学生1人当たりの学生数も8.43人⁴と、他学部に比べ、教員による学生のケアが手厚い。また、病院施設での実習も多く設置されており、“頭”ではなく“体”で学ぶ経験も充実している。このことから、学生の自主性が必然的に高まり、今回の結果に繋がったと考えられる。

⁴ 参考：椋山女学園大学ホームページ <http://www.sugiyama-u.ac.jp/univ/about/info/number/>

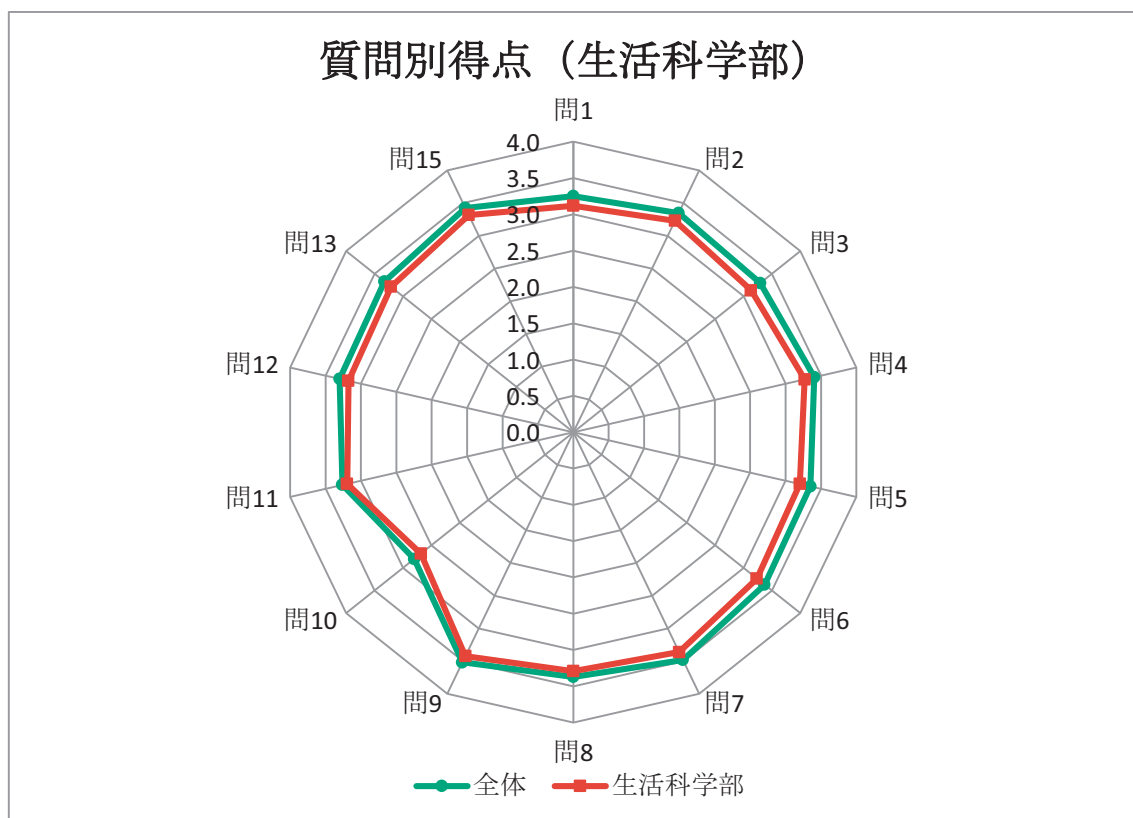


図 1 5 平均スコアとの比較（生活科学部）

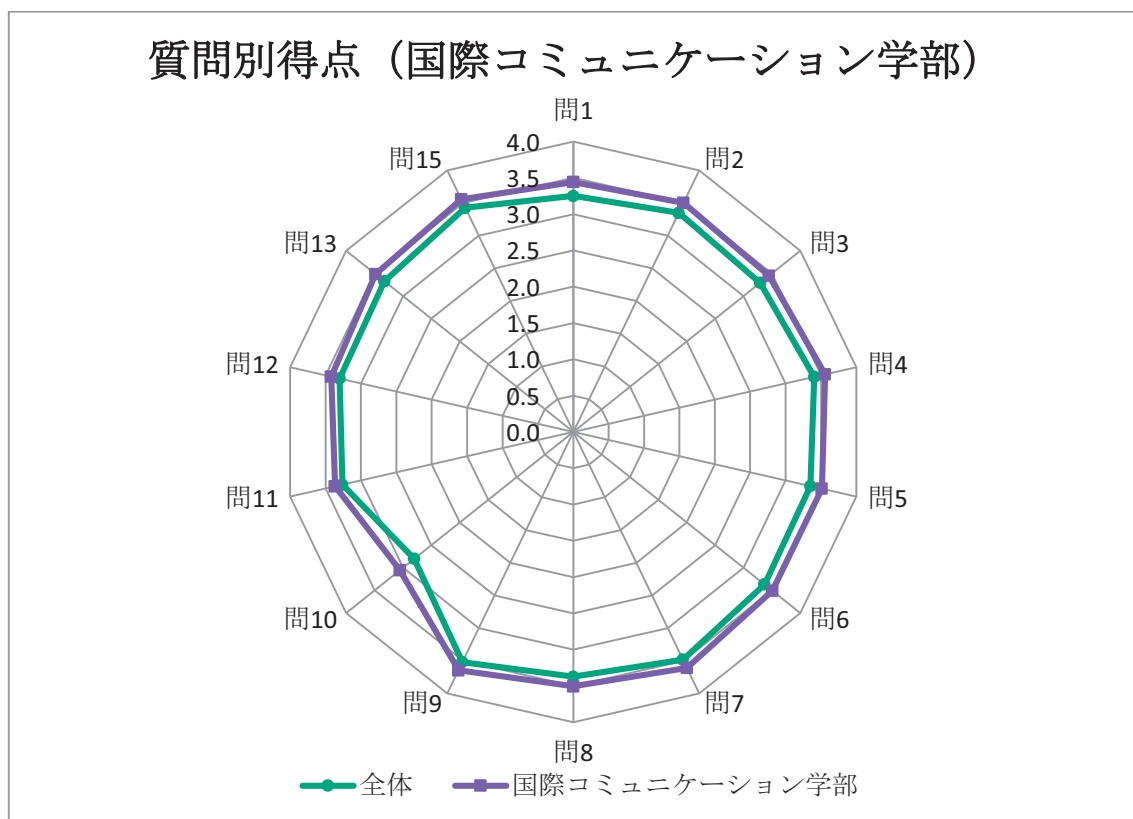


図 1 6 平均スコアとの比較（国際コミュニケーション学部）

質問別得点（人間関係学部）

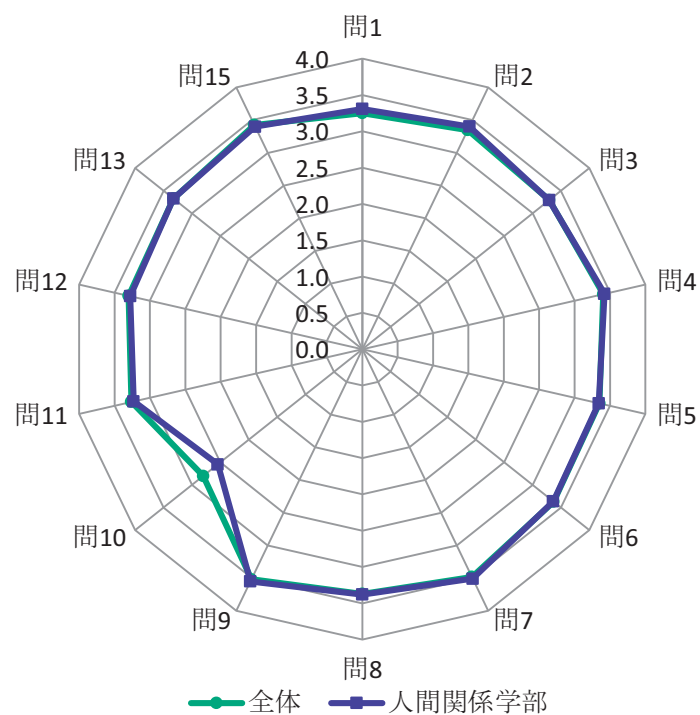


図 1 7 平均スコアとの比較（人間関係学部）

質問別得点（文化情報学部）

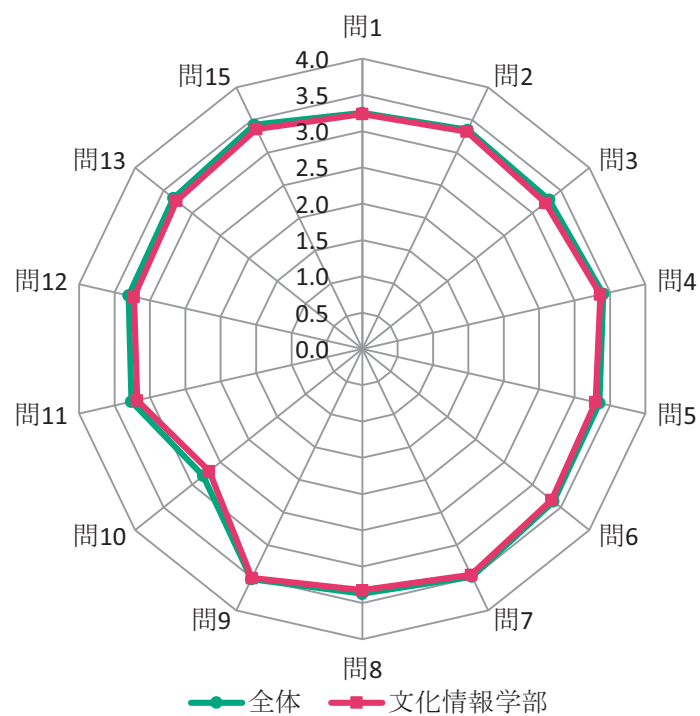


図 1 8 平均スコアとの比較（文化情報学部）

質問別得点（現代マネジメント学部）

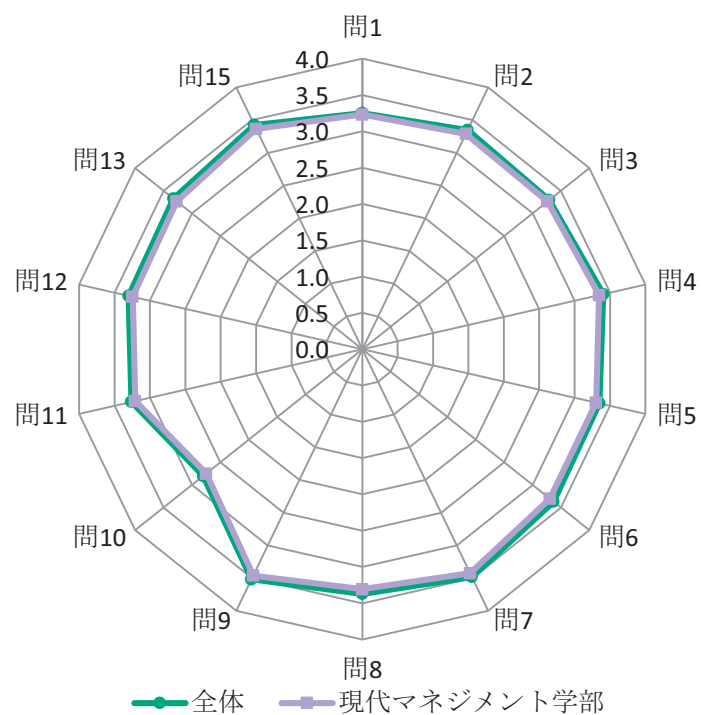


図 1 9 平均スコアとの比較（現代マネジメント学部）

質問別得点（教育学部）

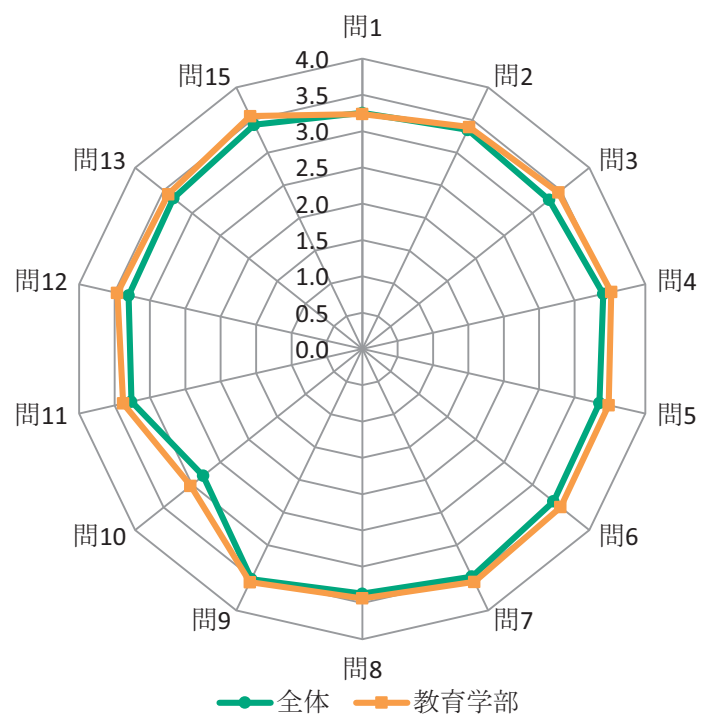


図 2 0 平均スコアとの比較（教育学部）

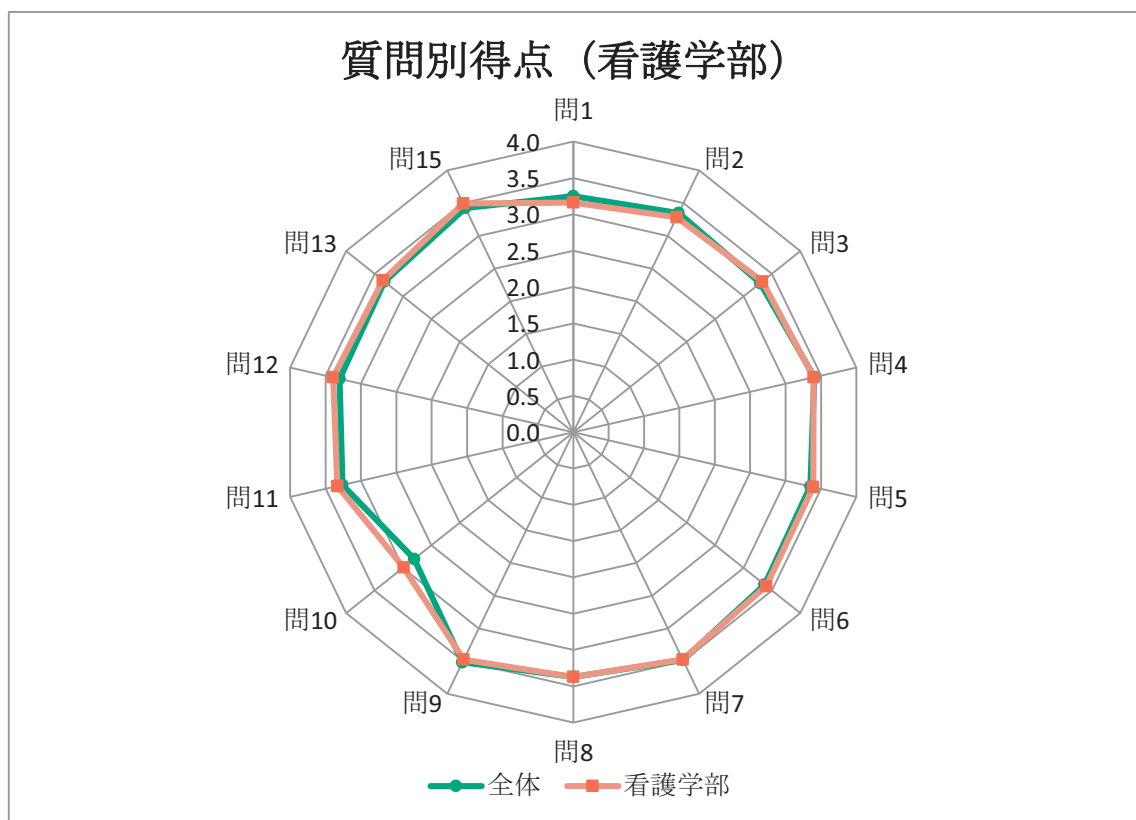


図 2 1 平均スコアとの比較（看護学部）

2.3 設問 1 2 と他の設問との相関係数

設問 1 2 「この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。」と他の設問の平均スコアの相関係数を図 2 2 に示す。相関係数には「ピアソンの積率相関係数」を用いた。ピアソンの積率相関係数を適用するには、データが正規分布に従うことが条件となるが、平均スコアは 1 ～ 4 の範囲で分布し、考慮すべき異常値は含まないため、この条件を満たすと考える。また、相関係数は 2 つの設問間の類似性の度合いを表し、1 に近いときは正の相関が強く、- 1 に近いときは負の相関が強いことを意味する。

いずれの設問も設問 1 2 とは正の相関を示すことが読み取れる。その中でも、設問 1 3 「シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。」が 0. 6 8 1、設問 1 5 「総合的にみて、この授業は充実していた。」が 0. 6 4 4 と相関が高く、授業での到達感、充実感が学生の意識の変化を促す要因と考えられる。また、設問 3 「この授業は理解しやすかった。」が 0. 6 2 3、設問 5 「教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。」が 0. 6 1 7 と、設問 1 3、1 5 に次いで高く、受講者の理解度も重要な要因と読み取れる。

一方で、設問 2 「この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。」や設問 9 「授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。」は設問 1 2 との相関は低く重要ではない。事前に定めたシラバスに従って厳密に授業を進めるよりも、受講者の学習状況に配慮しながら、柔軟に授業内容を修正する方が効果的であるように思える。

詰まるところ、教員が担当科目に高い興味と情熱を持ち、受講者目線で展開する授業が学生の意識改革に繋がると考えられる。



図 2 2 設問 1 2 との相関係数 (全科目)

2.4 平均スコアと設問 1 2 の相関係数の関係

設問 1 ～ 1 5 の平均スコアと前節で述べた設問 1 2 の相関係数を軸とした散布図を示す。相関係数が高く、平均スコアが低い設問項目は改善事項を表す。ここでは、全学部と各学部の散布図を比較しながら、各学部の特徴を明らかにすると共に、学部毎の改善点を探る。図 2 3 が全学部、図 2 4 ～ 3 0 が各学部の散布図を表している。横軸は設問 1 2 との相関係数、縦軸は各設問の平均スコアである。また、参考として設問 1 2 の平均スコアを赤色の水平線⁵で示す。

図 2 3 は全学部の結果である。相関の高い設問 1 3、設問 1 5 の平均スコアは、他と比較しても高い値を示しており、改善の余地はあまりない。一方で、設問 3 のスコアはそれほど高くないことから、授業の理解度を高めるための工夫をすることで、学生の意識改革に繋がる可能性がある。

図 2 4、2 5、2 7、2 8 はそれぞれ生活科学部、国際コミュニケーション学部、文化情報学部、現代マネジメント学部の結果である。これらの学部は、平均スコアに差はあるものの、相関の高い設問 3、5、1 3、1 5 の位置関係は全学部とほぼ一致している。いずれも、設問 3 のスコアが低く、授業の理解度が改善の糸口となり得る。

図 2 6 は人間関係学部の結果である。他学部と比べ設問 1 5 の相関が高い値を示している。また、平均スコアも高いことから、人間関係学部は充実感を感じる授業が多く設置され、学生の意識改革にも大きな影響を与えていることが分かる。

図 2 9 は教育学部の結果である。人間関係学部と同様、設問 1 5 の相関は高く平均スコアも高い。一方で、相関の高い設問 1 3 の平均スコアが設問 3、5 に比べ低い傾向がある。授業の理解を高める工夫は積極的に導入されているものの、シラバスに記載された目標への到達が不十分であり、今後の課題となる。学部の性質上、学生の習得状況に合わせて、柔軟な授業設計が求められることも要因の 1 つと考えられる。

図 3 0 は看護学部の結果である。設問 1 3 の相関が、他と比べて頭一つ抜けているが、平均スコアは高くない。教育学部と同様、目標達成に至るまでの過程をサポートするような工夫が重要だと考える。

⁵設問 1 2 自身との相関係数は常に 1

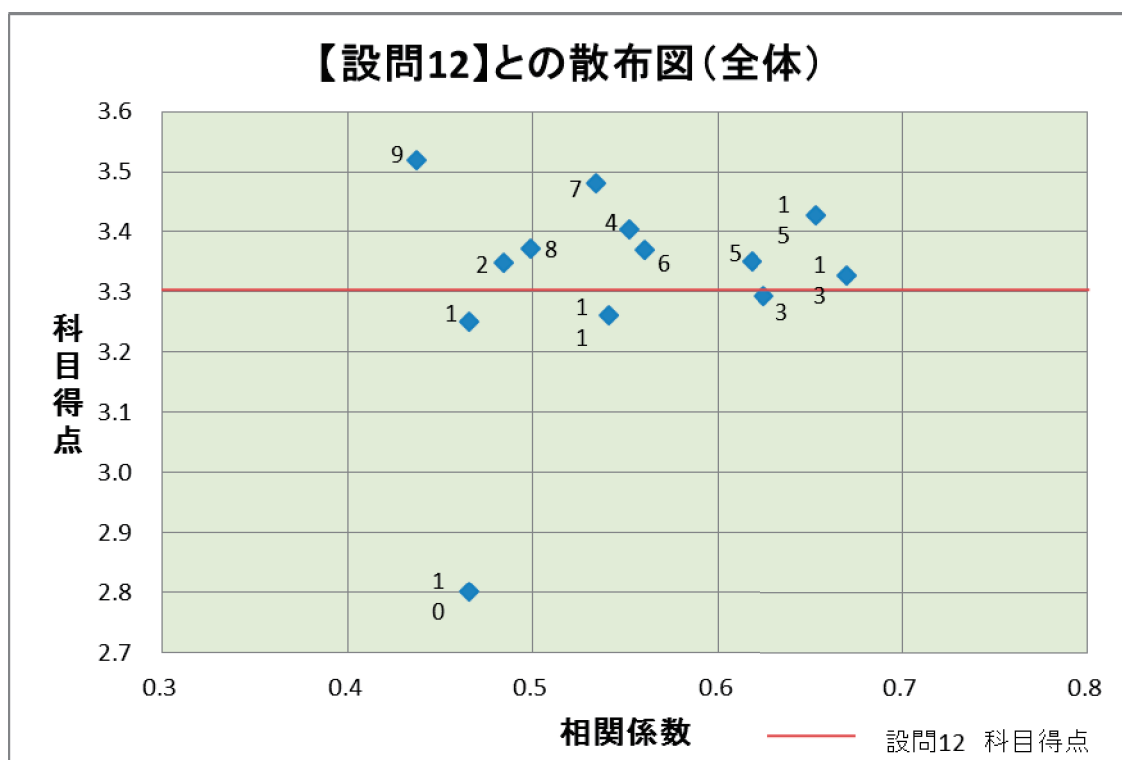


図 2 3 平均スコアと設問 1 2 の相関係数 (全学部)

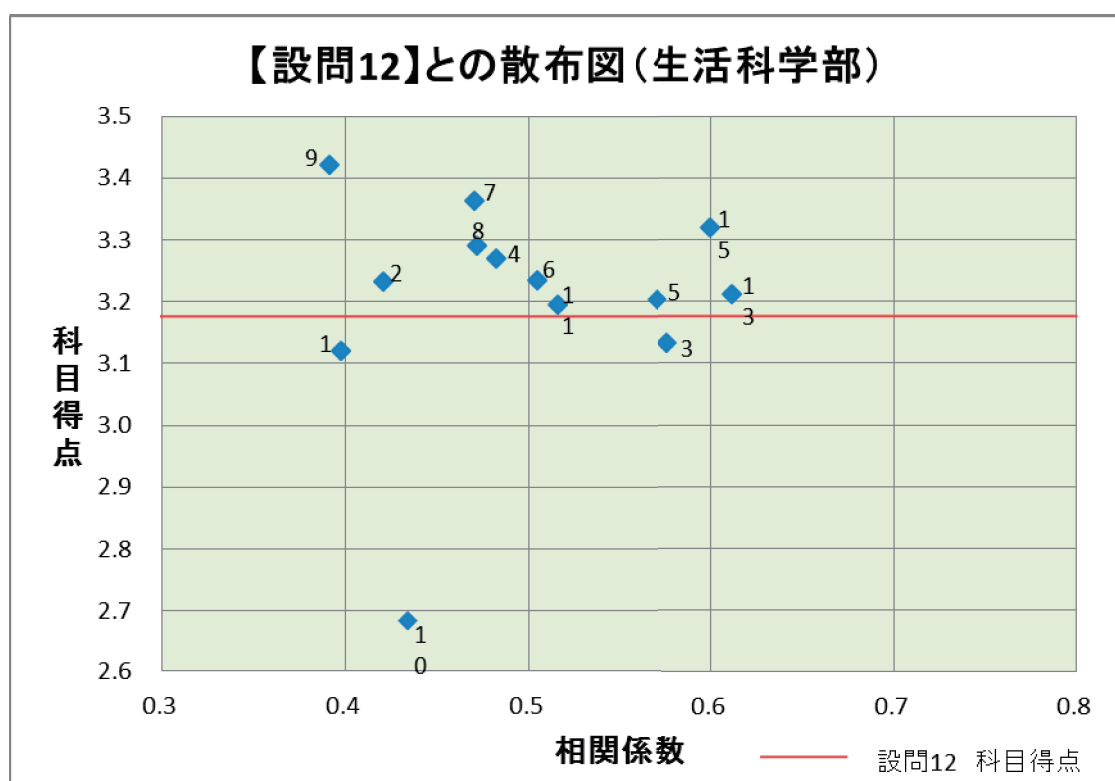


図 2 4 平均スコアと設問 1 2 の相関係数 (生活科学部)

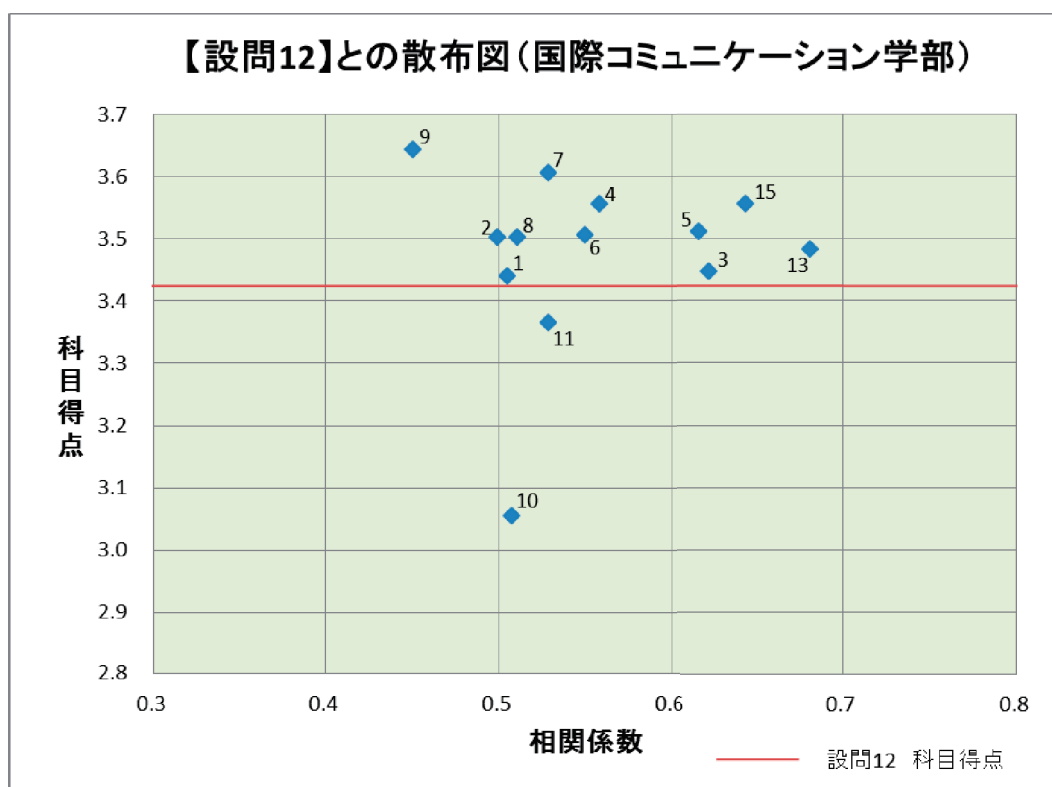


図 2 5 平均スコアと設問 1 2 の相関係数 (国際コミュニケーション学部)

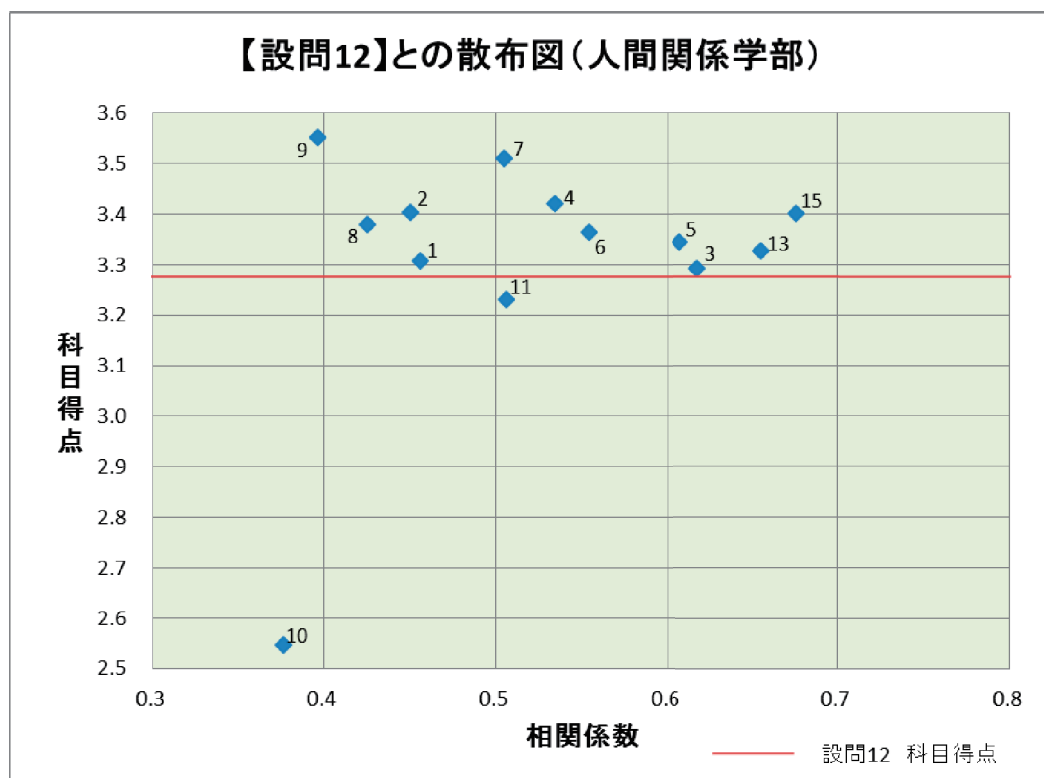


図 2 6 平均スコアと設問 1 2 の相関係数 (人間関係学部)

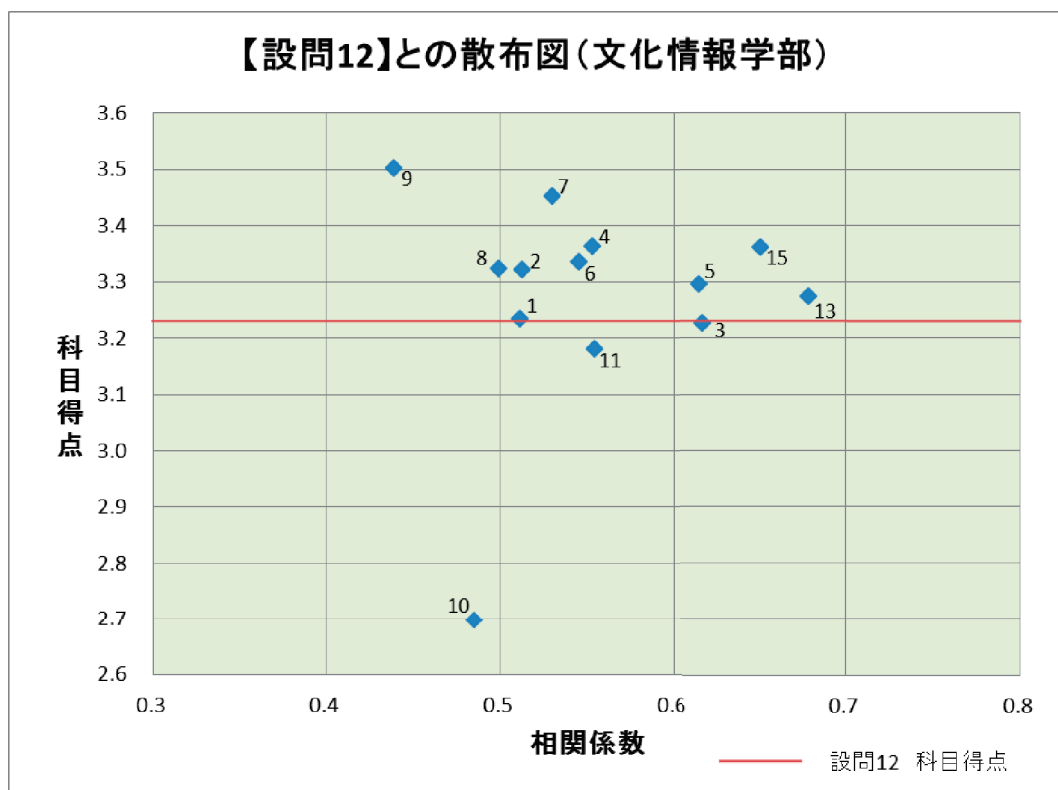


図 2 7 平均スコアと設問 1 2 の相関係数（文化情報部）

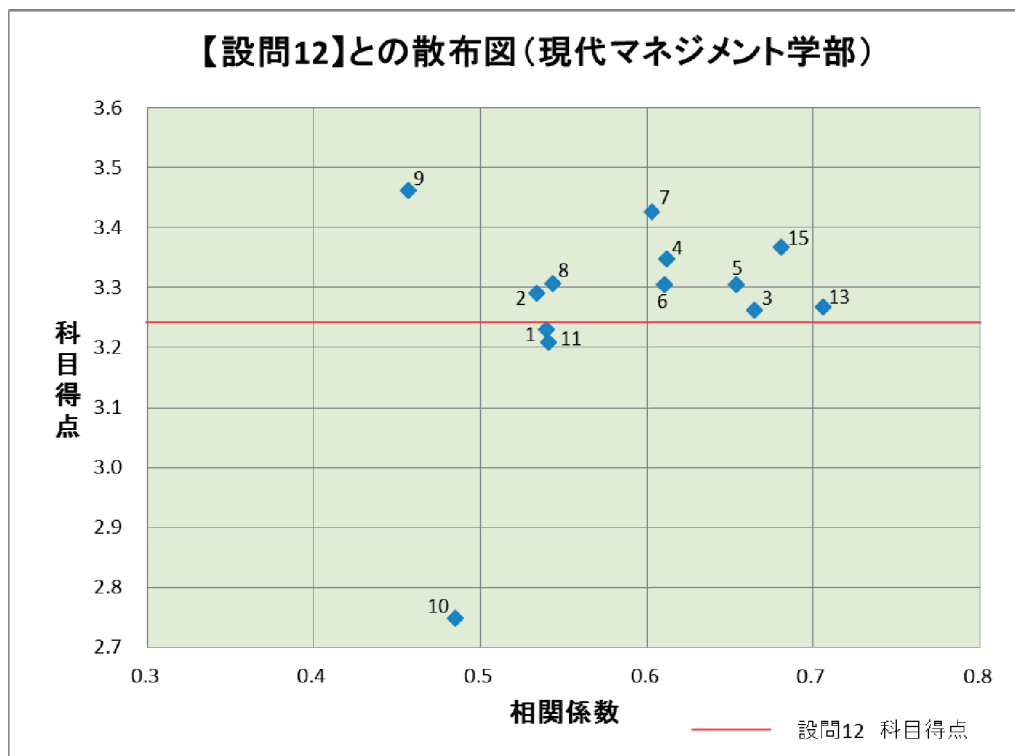


図 2 8 平均スコアと設問 1 2 の相関係数（現代マネジメント学部）

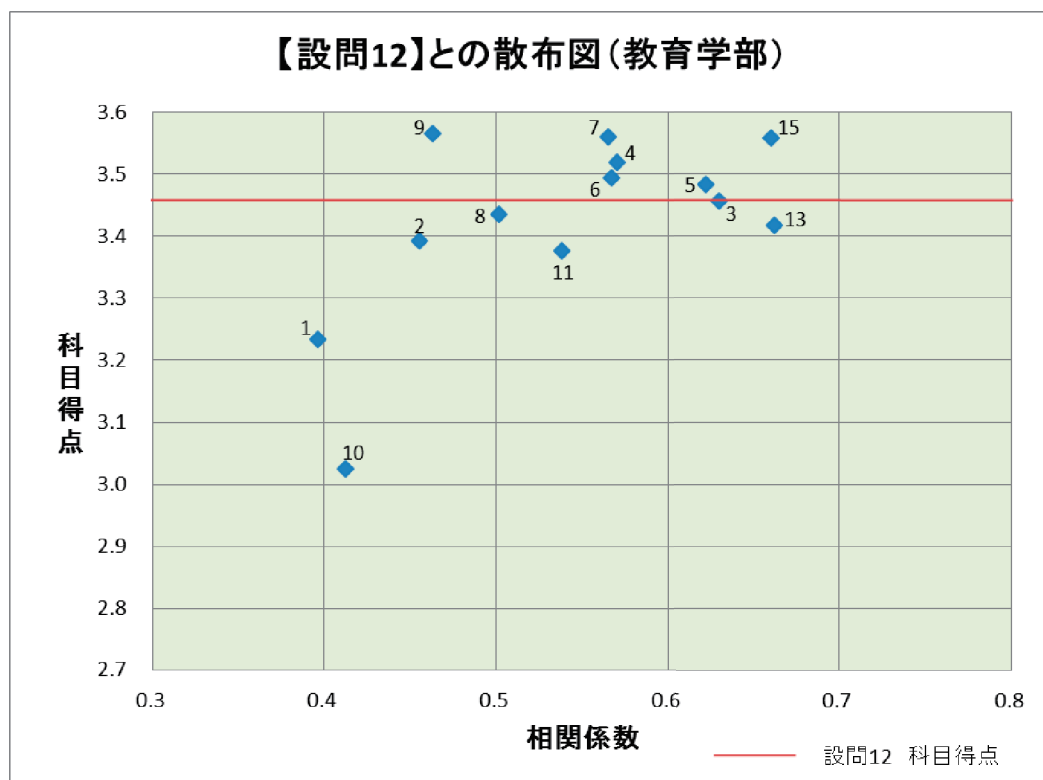


図 2 9 平均スコアと設問 1 2 の相関係数（教育学部）

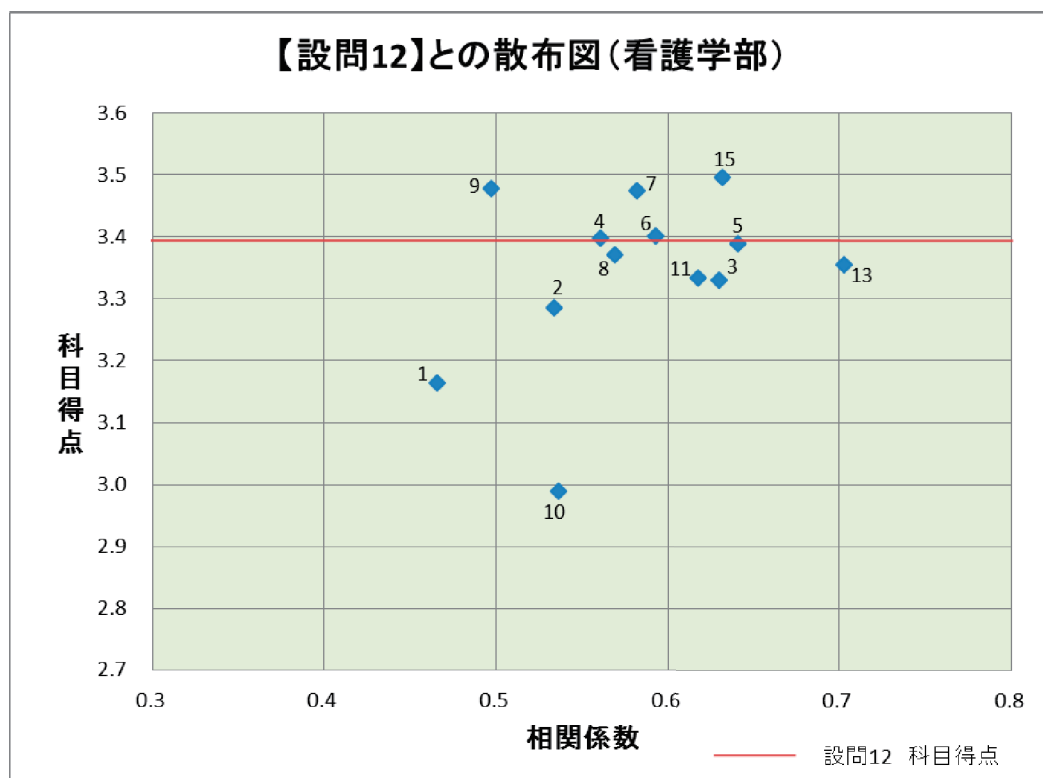


図 3 0 平均スコアと設問 1 2 の相関係数（看護学部）

2.5 設問 1 5 と他の設問との相関係数

設問 1 5 「総合的にみて、この授業は充実していた。」と他の設問の平均スコアの相関係数を図 3 1 に示す。相関係数には前節と同じ「ピアソンの積率相関係数」を用いた。

いずれの設問も設問 1 5 とは正の相関を示すことが読み取れる。その中でも、設問 3 「この授業は理解しやすかった。」が 0. 6 9 5、設問 5 「教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。」が 0. 6 8 6 と高い相関を示した。前節の設問 1 2 とは異なり、授業の理解度が“総合的な充実度”に直接影響するようである。また、設問 1 2 「この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。」が 0. 6 5 3、設問 1 3 「シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。」が 0. 6 3 7 で、設問 3、設問 5 に次ぐ高い相関を示した。このことから、受講者の充実度を高めるためには、授業の内容や到達度もさることながら、理解度を高めるような工夫が最も重要と考えられる。

一方で、設問 1 0 「予習や復習など、自主的な学習を行なった。」は最も低い相関となった。このことから、受講者は自主学習を“負担”もしくは“やらされている”と感じている可能性が高く、充実感には繋がらないことが分かる。充実感を高めるためには、授業中に無駄な時間を受講者に与えず、常に集中して取り組むことができるような課題を与えることが効果的かもしれない。

受講者の理解を促すための教員の努力は確実に学生の充実感に繋がるようである。一方で、授業時間中の受講者の集中力を高めることに専念し、授業時間外は受講者の自主性にまかせるなど、オン・オフの切り替えも重要である。



図 3 1 設問 1 5 との相関係数 (全科目)

2.6 平均スコアと設問 1 5 の相関係数の関係

設問 1 ～ 1 5 の平均スコアと前節で述べた設問 1 5 の相関係数を軸とした散布図を示す。図 3 2 が全学部、図 3 3 ～ 3 9 が各学部の散布図を表している。横軸は設問 1 5 との相関係数、縦軸は各設問の平均スコアである。また、参考として設問 1 5 の平均スコアを赤色の水平線⁶で示す。

図 3 2 は全学部の結果である。相関の高い設問 3、5、1 2、1 3 の平均スコアは、他と比較すると中位に位置しており、改善の余地は十分にあると考えられる。特に設問 3 は前節の設問 1 2 との相関関係も高いことから重要な設問項目の一つだと言える。理解度を高めることは全教員共通の課題であり、FD 相談窓口など全学で支援するような体制が必要である。

図 3 3、3 4、3 5、3 6 はそれぞれ生活科学部、国際コミュニケーション学部、人間関係学部、文化情報学部の結果である。これらの学部は、平均スコアに差はあるものの、相関の高い設問 3、5、1 2、1 3 の位置関係は全学部とほぼ一致している。設問 3、1 2 が他と比べ平均スコアが低く改善点となり得る。

図 3 7、3 8 は現代マネジメント学部、教育学部の結果である。全学部と比べ、設問 4 の相関が高いことが分かる。設問 4 「この授業の進度は適切であった。」は、設問 3 と同傾向の設問であり、学生の理解度に影響している。特に、現代マネジメント学部は学生数が多く、大規模授業が多く開講されていることから、この設問の相関が高くなったと考えられる。大規模授業における学生の進捗の把握も重要な課題である。

図 3 9 は看護学部の結果である。全学部と比べ、設問 6 の相関が高いことが分かる。設問 6 「板書や資料（配布資料・映像など）の提示方法は適切であった。」は、上記と同じく設問 3 と同傾向の設問である。看護学部は、少人数でのゼミ科目に加え、現地での実習が多く設置されている。このため、教員の情報提供手段が受講者の充実度を高めるための重要な要因となることが分かる。口頭での説明だけでなく、様々な教材を活用することで、体験に近い情報を提供することが鍵だと考えられる。

⁶ 設問 1 5 自身との相関係数は常に 1

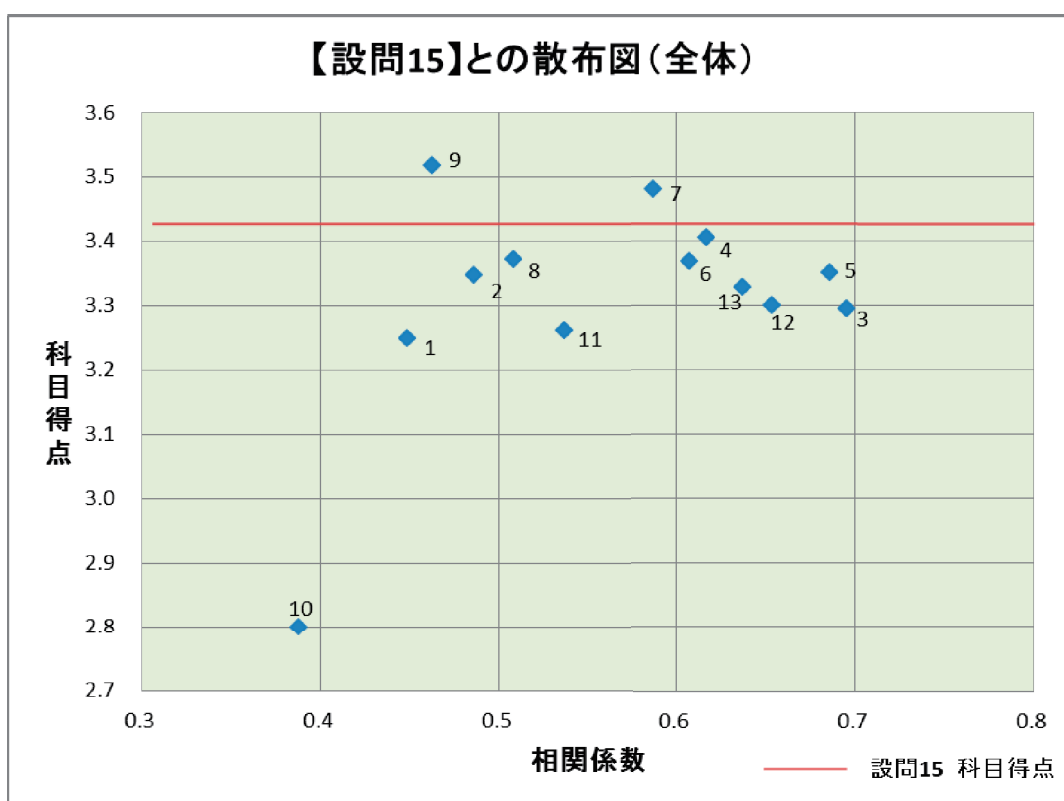


図 3 2 平均スコアと設問 1 5 の相関係数 (全学部)

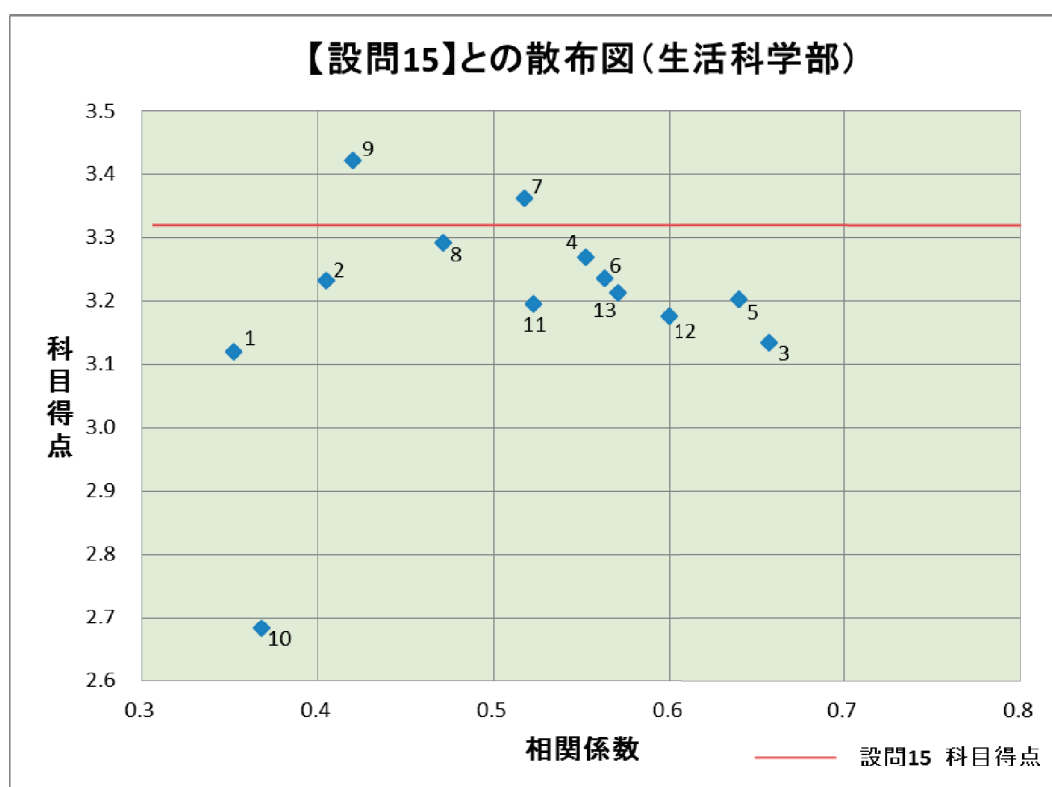


図 3 3 平均スコアと設問 1 5 の相関係数 (生活科学部)

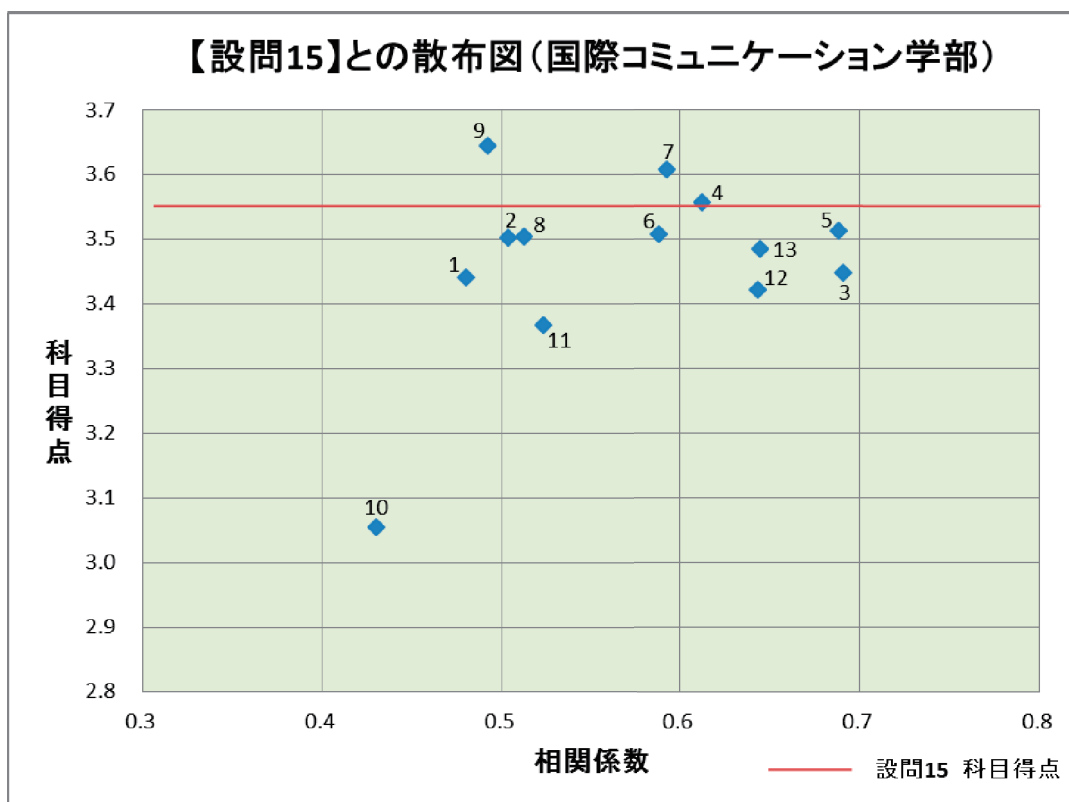


図 3 4 平均スコアと設問 1 5 の相関係数（国際コミュニケーション学部）

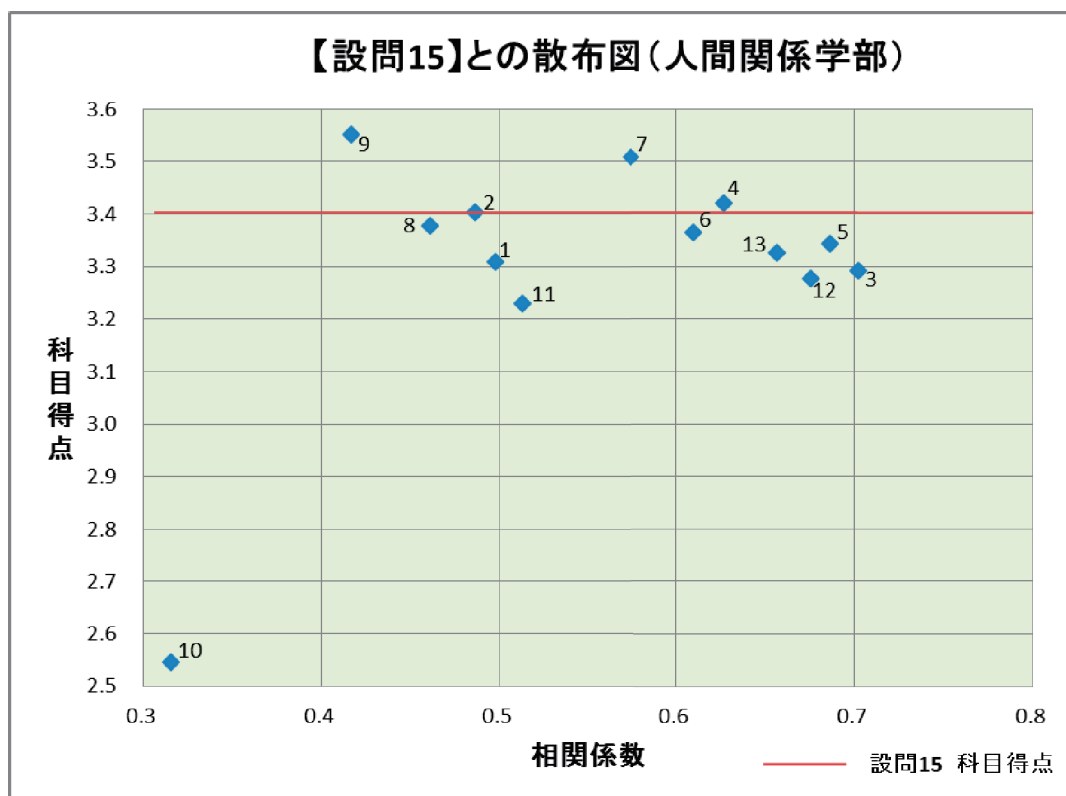


図 3 5 平均スコアと設問 1 5 の相関係数（人間関係学部）

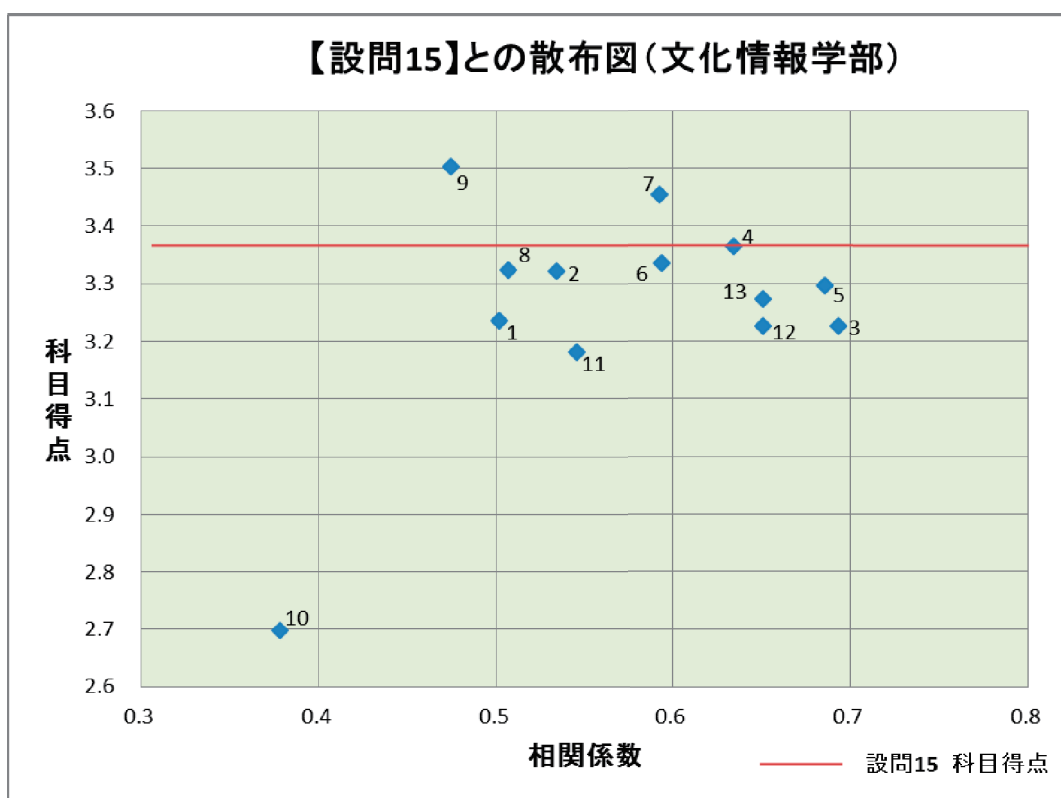


図 3 6 平均スコアと設問 1 5 の相関係数 (文化情報部)

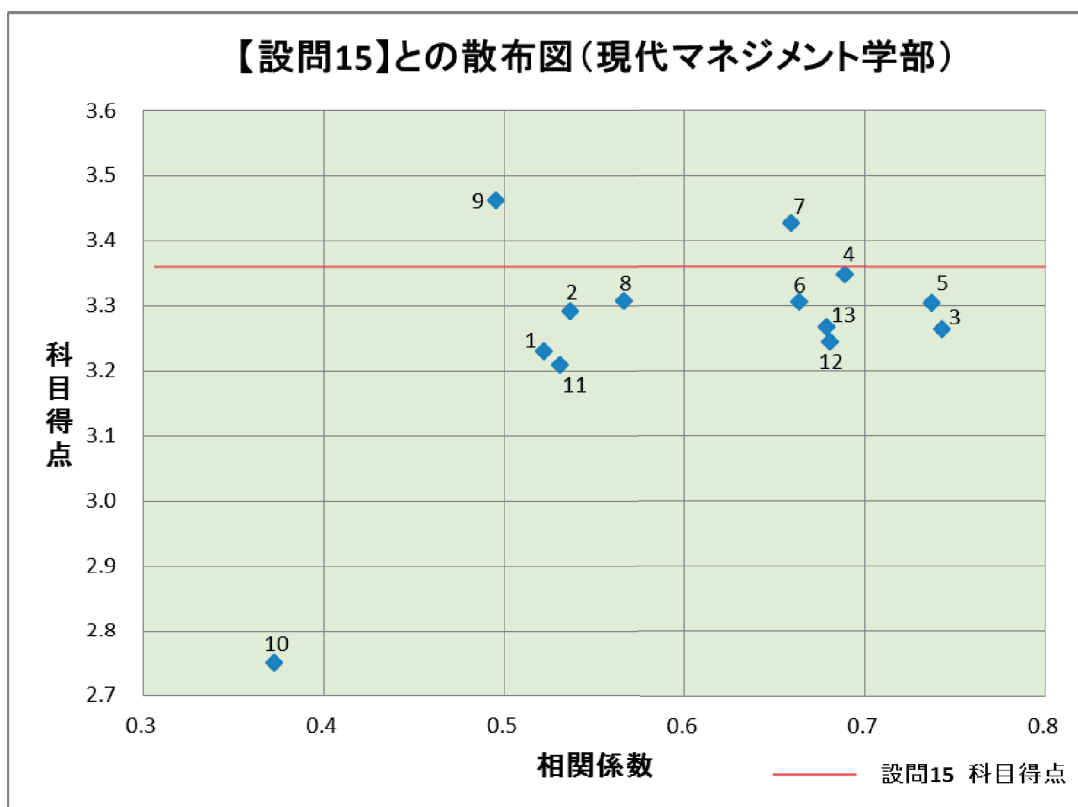


図 3 7 平均スコアと設問 1 5 の相関係数 (現代マネジメント学部)

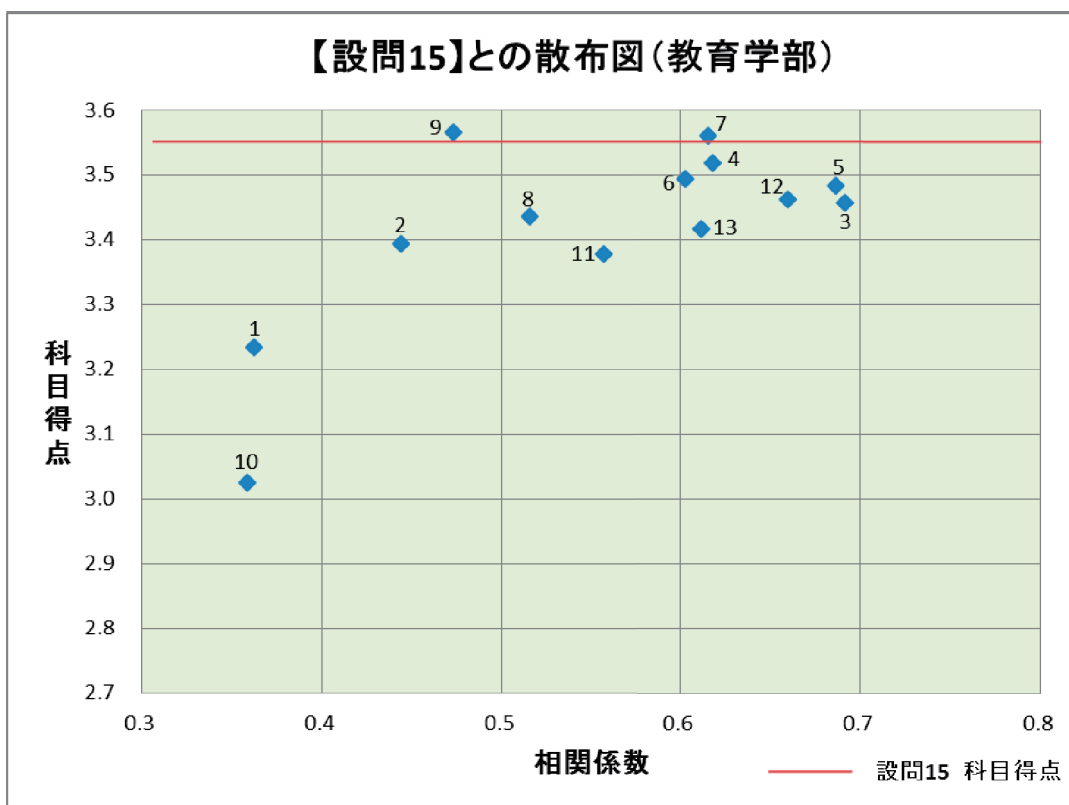


図 3 8 平均スコアと設問 1 5 の相関係数 (教育学部)

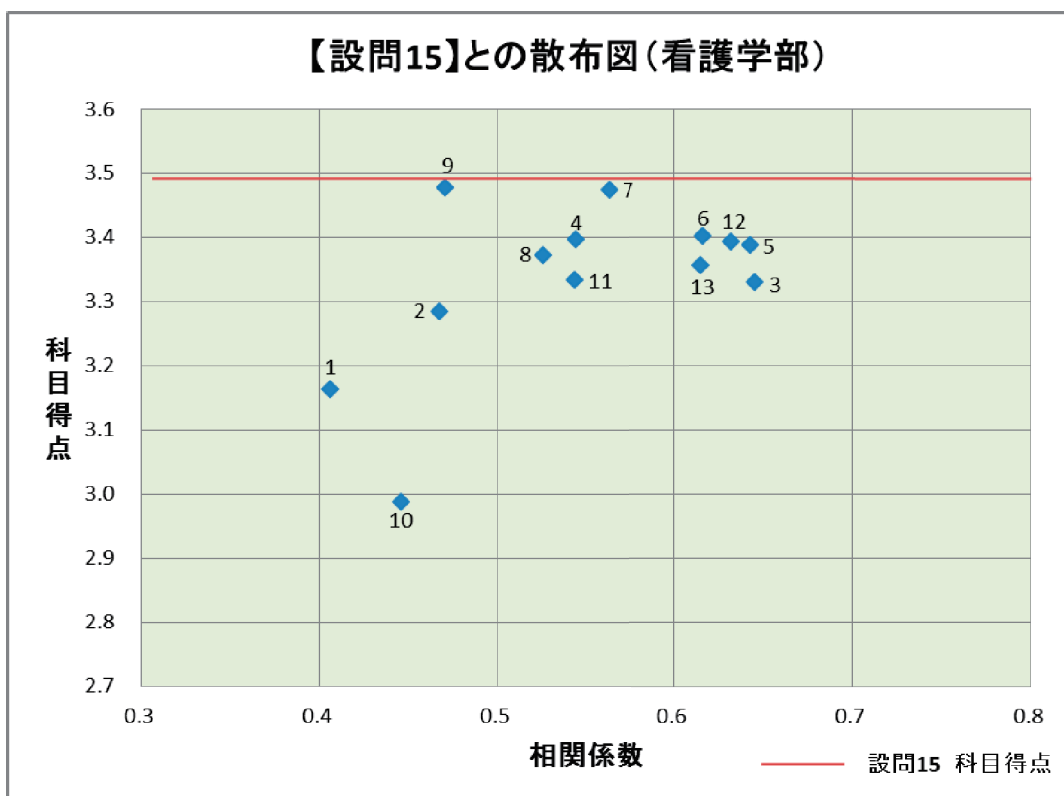


図 3 9 平均スコアと設問 1 5 の相関係数 (看護学部)

3.授業評価アンケート調査に係る資料

1. 平成26年度前期 授業アンケートの実施について
2. 平成26年度前期 授業アンケートの実施について（学生への案内）
3. 教員用 授業アンケート調査
4. 学生用 授業アンケート調査
5. 「授業アンケート調査」結果に関して（依頼）
6. 平成26年度前期「授業アンケート調査」結果を踏まえた授業評価
7. 「授業アンケート調査」実施に関する意見書

平成26年度 前期 授業アンケートの実施について

全学FD委員会

1. 実施の目的

学生による授業アンケートは、授業が学生にどのように受け止められているのかの全体的傾向を理解し、教員に対して授業の質的向上のヒントを提供することを目的とします。また、学部・学科及び大学全体としてのカリキュラムレベルでのFDを推進するための資料として活用します。

2. 実施時期

実施期間	平成26年7月16日（水）～7月22日（火）
実施予備期間	平成26年7月2日（水）～7月15日（火）

3. 対象科目

平成26年度前期開講の授業科目のうち、**卒業研究、集中講義及び受講者数が10名未満の科目を除くすべての授業科目が対象となります。**

※マークシートによる授業アンケートとは別に自由記述用紙のみで実施することも可能です。この場合は、担当教員の必要に応じて随時実施することができます。（自由記述用紙の必要枚数を教務課FD担当までお知らせください。）

4. 実施方法

<作業の流れ>

- (1) 全学FD委員会から学生へ授業アンケート実施のお知らせをS*mapのジャーナルにて送信します。
- (2) 授業アンケート用紙等の各教員への配布：対象科目ごとに封入された調査用袋を、各学部事務室のメールボックスに配付します。＜7月1日(火)から配布＞
- (3) 対象科目ごとの調査用袋に同封されているのは、
 - ① 学生用アンケート用紙（受講登録者数プラス予備の枚数、A4用紙に調査項目とマークシートが印刷されています）
 - ② 教員用アンケート用紙（A4用紙に調査項目とマークシートが印刷されています）
- (4) 教室での実施手順：2ページに記載
- (5) 実施済みのアンケート用紙等は、学部事務室・日進キャンパス事務課までご提出ください。

7月25日(金) 15:00：アンケート回収最終日となります

5. 集計結果

集計結果は、8月上旬に先生方にお届けする予定です。（非常勤の先生方へは郵送します。）

6. 「リフレクション」（授業アンケート結果を踏まえた自己点検・授業評価）については改めてご依頼いたします。

「リフレクション」は9月5日（金）までにご提出いただく予定です。

（S*mapのアンケート機能を活用してご記入いただく予定です。）

7. 授業アンケート集計結果の学内開示

質問項目ごとの全体の傾向、学部ごとの傾向及び科目ごとの結果をリフレクションとともに学内に開示いたします。

＜教室での実施手順＞

1. 受講生には、アンケート実施について以下のようにご説明ください。

「これから、授業アンケートを実施します。この調査は個々の授業及び学部学科・大学全体のカリキュラムの質的向上のために行うもので、その他の目的には使用されませんので、協力してください。なお、誰がどのような回答をしたかは特定できないように十分な配慮をして実施しますので、思うところを率直に記入してください。マークシートはコンピュータで統計的に処理されます。自由記述は、私（授業担当者）が直接読んで、今後の授業の質的向上のための参考にしますので、率直な意見をできるだけ書いてください。回答時間は約15分です。」

2. アンケート用紙を配布してください。

3. 配布したアンケート用紙の回答方法について、お伝えください。

- (1) シートを折ったり丸めたりしない
- (2) 鉛筆かシャープペンシルを用いる、
- (3) 自由記述欄があることに触れ、そちらにも回答するように伝えてください

4. 教員による独自の設問項目欄を設けてあります。必要に応じて、ご自身で作成した項目を追加してください。

5. 学生がアンケートに回答している間は、回答者の匿名性が保たれるよう、十分に御配慮ください。教室内の巡回なども御遠慮ください。また、この間に、教員用アンケート用紙にご記入ください。

6. 学生の記入が終了したところで、アンケート用紙を**原則**学生に回収させてください。回収を学生に依頼した場合は、回答済み学生用アンケート用紙、及び教員用アンケート用紙を配布された時と同じ封筒に封入し、確実に封をして糊付けしたうえで、未使用のアンケート用紙とともに、各学部事務室まで提出するよう指示してください。

実施科目や実施方法などについてのご質問は、教務課または日進キャンパス事務課教務係までお尋ねください。

＜連絡先＞ 教務課 電 話：052-781-6466(直通)
質問用メールアドレス：kyoumu@ml.sugiyama-u.ac.jp

学生の皆さんへ

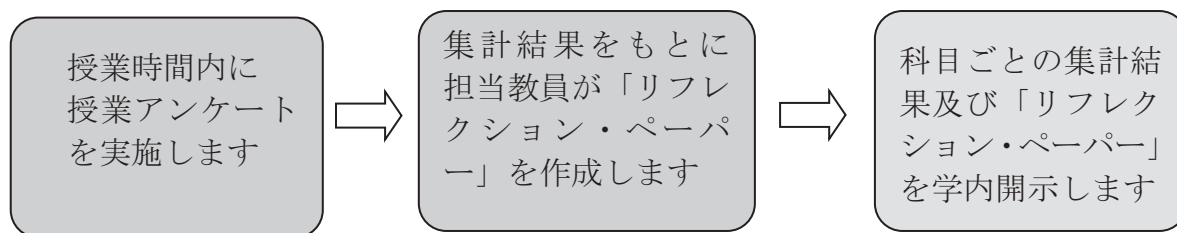
平成26年度前期 授業アンケートの実施について

全学FD委員会

●授業アンケートについて

平成26年度前期の授業についてアンケートを実施します。授業アンケートは、平成26年7月16日（水）～7月22日（火）の週に授業時間内に行います。（授業の都合等により、実施期間前1週間の7月9日（水）～7月15日（火）にて実施の場合があります。）この授業アンケートは個々の教員の授業の質的向上や大学の組織的教育改善のために行うもので、その他の目的には使用しませんのでご協力ください。なお、アンケートは無記名で個人が特定されないように十分な配慮をいたします。

●授業アンケート調査実施の流れ



●授業アンケート実施について

1. 授業アンケートは個々の教員の授業の質的向上や大学の組織的教育改善のために行うもので、その他の目的には使用されませんので、協力してください。なお、誰がどのような回答をしたかは特定できないように十分な配慮をして実施しますので、思うところを率直に記入してください。
2. 回答時間は15分から20分です。（授業時間内に行います。）
3. 記入は鉛筆かシャープペンシルを使用してください。
4. 項目ごとに必ず回答欄をひとつ塗りつぶしてください。
5. マークシートはコンピュータで統計的に処理されます。自由記述は、授業担当者が直接読んで、授業の質的向上のための参考にしますので、率直な意見をできるだけ書いてください。
6. 担当教員の指示により回答する項目や、担当教員による独自の設問項目がある場合は、板書または口頭で提示があります。
7. マークシートは折ったり丸めたりしないように注意してください。

教員用 授業アンケート調査

このアンケート調査は、全学の教育の改善・充実を図るために、調査結果を統計的に分析するものです。

自由記述欄の記載事項は先生方にご覧いただき、先生方ご自身が学生の意見を把握し、今後授業の充実・改善の参考にしていただくものです。

個別的授業や個別的教員の評価・査定をするものではありません。

以下の項目にご回答をよろしくお願いいたします。

■記入上の注意

①HB程度のエンピツを使用してください。

②マークしなおす場合は、誤った方をきれいに消してください。

③このアンケート用紙はコンピュータで処理します。折り曲げたり、汚したりしないでください。

正しい例



悪い例



設 問 項 目

1. この授業の科目について、該当する番号にマークしてください。

① 講義科目(教養科目、専門科目すべてを含む)

② 外国語科目(専門科目の外国語は、演習科目等を含む)

[1]

[2]

[3]

[4]

③ 演習科目等(教養科目、専門科目すべてを含む)

④ 実験・実習科目(体育関係科目(実技)を含む)

2. 本学専任か非常勤か、該当する番号にマークしてください。

① 本学専任

② 非常勤

[1]

[2]

この科目の授業に関して、以下のような項目について、もっともあてはまると思われる番号にマークしてください。

3. 受講者は熱心に授業に取り組んでいた。

その通りである

[1]

どちらかといえば
その通りである

[2]

どちらかといえば
そうではない

[3]

そうではない

[4]

4. 学生による積極的な発言があった。

[1]

[2]

[3]

[4]

5. このクラスでは、私語はほとんどなかった。

[1]

[2]

[3]

[4]

6. このクラスの教室サイズは適切だった。

[1]

[2]

[3]

[4]

7. 授業はシラバスにそって計画通りにできた。

[1]

[2]

[3]

[4]

8. 受講者は授業の内容を理解できたと思う。

[1]

[2]

[3]

[4]

9. 受講者の理解度に配慮した工夫をした。

[1]

[2]

[3]

[4]

10. 総合的にみて、この授業をうまく進めることができた。

[1]

[2]

[3]

[4]

授業アンケート調査

このアンケート調査は、全学の教育の改善・充実を図るために、調査結果を統計的に分析するものです。

自由記述欄の記載事項は先生方にご覧いただき、先生方ご自身が学生の意見を把握し、今後授業の充実・改善の参考にさせていただくものです。

以下の項目にご回答をよろしくお願いいたします。

記入上の注意

①HB程度のエンピツを使用してください。

②マークしなおす場合は、誤った方をきれいに消してください。

③このアンケート用紙はコンピュータで処理します。折り曲げたり、汚したりしないでください。

正しい例



悪い例



設問項目

設問1. この科目を学修する上で、シラバスの内容は役立った。

その通りである
[1]

どちらかといえば
その通りである
[2]

どちらかといえば
そうではない
[3]

そうではない
[4]

設問2. この授業は概ねシラバスの内容に沿った授業が行われた。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問3. この授業は理解しやすかった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問4. この授業の進度は適切であった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問5. 教員は学生が理解しやすいように授業を工夫していた。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問6. 板書や資料(配布資料・映像など)の提示方法は適切であった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問7. 教員の話し方(声の大きさ・話す速さ・マイクの使い方など)は適切であった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問8. 私語など、不真面目な学生に対する教員の対応は適切であった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問9. 授業の開始時刻や終了時刻は適切であった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問10. 予習や復習など、自主的な学習を行った。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問11. あなたから見て受講者は真面目に参加していた。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問12. この授業を受けてあなたのものの見方や考え方が広がった。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問13. シラバスに書かれている到達目標が達成されるような授業が行われた。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問14. この授業を受けてあなたが獲得あるいは向上したと思う項目を選択してください。

[1]

[2]

[3]

[4]

(複数選択可) [1] 知識・理解 [2] 思考・判断 [3] 態度・志向性 [4] 技能・表現

設問15. 総合的にみて、この授業は充実していた。

[1]

[2]

[3]

[4]

設問16. (教員による独自の設問項目)

[1]

[2]

[3]

[4]

設問17. (教員による独自の設問項目)

[1]

[2]

[3]

[4]

設問18. (教員による独自の設問項目)

[1]

[2]

[3]

[4]

自由記述欄

この授業について、より良い授業としていくために、次の点について意見や考えがあったら記入してください。

※外国人教員が授業担当者の場合、できるだけ担当者がわかる言語で書いてください。

1. この授業で、よかったと思う点がありましたら、記入してください。

2. この授業で、改善すべき点がありましたら、記入してください。(授業内容、授業レベル、授業方法、授業形式、学生の姿勢、教員の言動など)

平成26年8月

各位

梶山女学園大学
全学FD委員会

「授業アンケート調査」結果に関して（依頼）

平成26年度前期分の「授業アンケート調査」にご協力いただきまして、ありがとうございました。授業に対する学生の意見が、今後の授業の質的向上に役立つことを期待すると同時に、意見を寄せた学生に対する教員側のフィードバックもまた重要なコミュニケーション手段になると期待されます。

平成15年度後期調査分より、教員によるリフレクション・ペーパーの学生への公開を、授業の質的向上を目指す方策のひとつとして取り入れました。今回もまた授業アンケート結果を踏まえての、先生方の授業に対する自己点検・授業評価を、リフレクションという形式でお書きいただき、集計結果とともに学生にフィードバックしたいと考えております。

つきましては、同封の「授業アンケート調査」結果及びアンケート用紙の自由記述欄をご覧ください、以下の項目に言及して、ご担当授業についての自己点検・授業評価を、授業科目ごとに「様式1」（S*mapのジャーナルにて様式を添付）にまとめ、平成26年9月5日（金）までに下記アドレスにデータにて提出いただきますようお願い申し上げます。

1. 結果としてよかった点
2. 改善されるべき点
3. 今後の改善点、その他

記述の形式は自由としますが、以下の点にご注意いただきご記入をお願いします。

1. 数値による結果や、学生の自由記述内容などを引用して、できるだけ具体的にお書き下さい。
2. お書きいただいた「リフレクション」は、集計結果とともにそのままPDF化されますので、データでのご提出をお願いします。
3. 「リフレクション」はアンケートを実施されたすべての科目について授業科目ごとにお書き下さい。

「様式1」により提出された自己点検・授業評価は、集計結果とともに完成原稿としてPDF化され、「平成26年度前期授業アンケート調査」として冊子の形式で、また学生に対するフィードバックとして、S*mapのライブラリを利用した学生への閲覧を行う予定ですので、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

なお、全学的FD活動の一環として実施された「授業アンケート調査」はその意義や方法などについて継続的に検討し総括していく必要がありますので、毎度のお願いとなってまことに恐縮ですが、(1) 調査実施の是非について、(2) アンケート調査項目について、(3) 実施時期や方法についてなど、ご意見のある方は、「授業アンケート調査」実施に関する意見書「様式2」に、具体的にお書きいただき、リフレクションとあわせてデータ提出用メールアドレスまで提出いただきますようお願いいたします。

※「リフレクション(様式1)」及び「意見書(様式2)」は、S*mapのジャーナルに添付しておりますので、ご確認ください。

<連絡先>

学務部教務課 電 話：052-781-6466(直通)
質 問 用 メ ー ル ア ド レ ス：kyoumu@ml.sugiyama-u.ac.jp
データ提出用メールアドレス：rp@sugiyama-u.ac.jp

平成26年度前期「授業アンケート調査」結果を踏まえた授業評価

学部名	教員名	担当科目名

学部名	教員名	担当科目名

「授業アンケート調査」実施に関する意見書

1) 「調査」実施の是非について

2) アンケート調査項目について

3) 調査時期について

4) その他

科目名：プロダクト制作実習Ⅲ（生活用品）

学部：生活科学部

科目担当者：雨宮勇

授業概要

生活用品の各種機能を確認し、そこに必要な材料や使い勝手などの条件を考慮しつつ各自のテーマに沿ってそのデザインを企画し、プロダクトデザインの手法を学びます。前半は全員で星が丘テラスのクリスマスの照明デコレーションの制作、後半は「いれもの」というテーマで、携帯電話ケース・小バッグ等各自自由に企画・制作を行います。

授業の中で心掛けていること

「どうしたら人の役に立つか」を楽しみながら考えさせるようにしています。少しも思い浮かばない、という学生には、例をたくさん提示して、自らの気づきのためのヒントを与えています。楽しんで取り組んで入れば、よりよい成果が出てくるので、楽しんでがんばれる環境づくりを心掛けています。

授業内外で学生が主体的に学修する工夫

毎週制作物についての議論・アドバイスをしますが、その時次週までに解決すべき課題を明確に指示しています。また、学生の技能にレベル差に対応するために、履修者を5名程度の小グループに分けきめ細かく指導します。

特徴的な授業方法と効果

制作物を一般公開するため、社会的な貢献や商品価値の創造を体感できます。自分達のデザインに一般の方々が感動してくれる体験は学生にとって新鮮なようです。つくりたいものがあり、デザインする能力はあるのに技術が不足しているという課題がありましたが、新型のレーザー加工機導入によって技術不足がカバーでき、より精度の高い加工が可能になりました。

FD委員：阿部順子

参考となる授業として採り上げた事由

生活科学部の2学科は専門性を大きく異にしますが、「社会で通用する専門性を獲得する実学」という点は共通しています。そこで、社会との接点・社会での活躍という点から考えると、本授業は「星が丘テラスの照明デコレーション」という、その制作物が実社会で非常にわかりやすく役立っていること、また昨年の成果に感動して履修者数が倍増したという実績から、今回採り上げてみました。

授業を参観しての感想

星が丘テラスのクリスマス照明の点灯式では、たくさんの来場者の感嘆の声を嬉しそうに、誇らしげに、満足そうに受け止めている学生達の姿がありました。このような「幸福感」「達成感」を学生に与えられる授業というのはすばらしいと思います。

参考にできる授業方法

学びの成果（この場合は制作物）の発表の場を学外に用意することを、どの授業も一度は検討してみてもよいかもしれません。学外の発表の場や部外者からの評価を得ることで、社会性が養われ、学びの意義を自覚しやすくなると思われるからです。授業内容によっては公開や部外者による評価がふさわしくないものもあるかもしれませんが、発表のみ、評価のみ、と限定的でも、外に開いていくことで学生のモチベーションは高まる可能性があるように思います。

科目担当者へのインタビュー

インタビューを通じて、学外との連携は科目担当者にとっては何かと負荷の大きいものであることがわかりました。にもかかわらず、このような実り多い授業を実現されていることに感服しました。

科目名：日本文学史（現代）	学部：国際コミュニケーション学部
---------------	------------------

科目担当者：広瀬正浩
この授業は、学部内でのカリキュラム変更により、平成26年度より開講された授業である。前身となるのは「日本文学史（近代・現代）B」（担当：広瀬正浩）である。日本の文学の歴史を扱うということもあり、中学校・高等学校の国語科の教員免許の取得に必要な授業として位置づけられており、教職志望の学生はもちろん履修しているのだが、実際は教職と関係ない受講生のほうが多い（平成26年度の履修登録者数は160を超えており、他学部の学生も多く出席している）。 そういう意味もあり、日本文学に関する歴史的事項をただ説明したり覚えさせたりするだけでなく、「私たちが常識的だと思っている考え方や価値観がどのような経緯で生まれたのか、あるいは過去の人々の考え方や価値観とどのように連続／断絶しているか」という点を考えさせる授業内容を構成している。そのため、単に通史的に日本文学をたどるだけでなく、「コミュニケーションを重んじる社会」「増殖するラブコメ」「デジタルメディアの政治性」「『心の闇』をめぐる物語」「ループと世界認識」などといったテーマを設定し、学生が身近なテーマから自分の属する現代社会の価値観について考察しやすくさせている。そして、その考察を実際に行ってもらうために、毎回授業の後半に、授業内容に関連したテーマの「ミニレポート」を課している（全員必須）。そして学生からの回答の一部を、次の授業プリントに掲載して、前回までの復習をすると同時に、他の学生の思考と自分の思考との比較を行わせ、各学生の理解の幅を広げる工夫をしている。 大人数教室での授業のため、学生の私語もなくはないのだが、授業内で扱う教材（小説）の選定において深く入り込みやすいものを意識的に選んでいるため、学生の集中度も授業の進行にともない高まっているように感じられる。

FD委員：堀田あけみ
（参考となる授業として採り上げた事由） 表現文化学科を選択した理由として、国語の教員になりたい、が多く挙げられています。この授業は国語の教職を目指す学生にとって必須となっており、それ以外の学生も多く受講する人気講義の一つです。また、広瀬先生の授業は受講生によってインターネットでシラバスが拡散され、「こんな授業、受けてみたい」といった反応を引き出しています。 （授業を参観しての感想） この授業の大きなポイントは、どの作品を取り上げるかです。中高生に国語を教えるのであれば、文学に関する広汎な知識が必須であるにも関わらず、積極的に本を読む学生は昔程多くはなくなっています。ここで、文学作品を取り上げるということは、知識としてそれらを身につけるにとどまらず、そこから、より多くの文学作品を読もうと言うモチベーションになる必要があります。この授業では、学生に人気のあるライトノベルと、いわゆる名作文学を並べて語ることによって、敷居が高いと思われがちな「文学」を身近なものとして、何より面白いものとして、学生に伝えることに成功していると思われます。 （科目担当者及び受講生へのインタビュー） 受講生にこの授業の感想を訊くと、以下のような回答が得られました。 「いろいろな作品を今までとは違う形で知ることができた」 「本当に楽しくて、毎週楽しみな授業でした」 「広瀬先生の文学に対する熱い想いが伝わって来ました」 「本が読みたくなる授業でした」 教員を目指す学生達に、国語を教えるとはどういうことかを伝えることも、できていたのではと思います。

科目名：演習Ⅰ、Ⅱ	学部：人間関係学部
-----------	-----------

科目担当者：藤原直子	
------------	--

（授業の概要）
 人的交流活動を目的とした活動をグループワークによって企画・実施し、その活動の意義や集団における人間関係づくりを学ぶ。活動の企画についてゼミ全体で検討することを重視し、実施可能なものは実施する。諸活動後に振り返りレポートを作成し、今後の課題と対応策について検討する。

（カリキュラムでの位置づけ）
 専門教育科目の演習

（授業の中で心掛けていること）
 1、授業のねらい、活動の意味を受講生自身に十分に理解させる。
 2、受講生の個性をみて主体性を引き出す。
 3、授業のなかでの集団活動において受講生同士でお互いの存在を承認するような雰囲気作り。

（授業内外で学生が主体的に学修する工夫）
 1、学生をエンパワーするような声かけ、普段からのコミュニケーション
 2、諸活動における各受講生の貢献を授業内できちんと評価する

（特徴的な授業方法と効果）
 教員が不在でも、自分たちで授業を進め、各種活動を企画・運営を行える自主的態度が身につくように授業を設計している。それは、経年的な授業運営により可能になっていると思われる。2年連続で受講する学生たちが、各種活動の流れを把握し、その年度による受講生のアイデアを取り入れつつ活動をリニューアルしていることの成果であると思う。

F D 委員：吉田あけみ	
--------------	--

（参考となる授業として採り上げた事由）
 昨今アクティブ・ラーニングが推奨されているが、その先駆けとして、長らく人間関係学部において、実施され続けている授業である。毎年、受講希望者が多く学生に人気の授業である。

（授業を参観しての感想）
 学生たちが主体的に動くことができている、学生を信じて任せることが学生に力をつけさせていくことになると感じた。学生たちが楽しそうに自分たちの企画を実施しているところが印象に残った。

（参考にできる授業方法）
 完全な持ち上がり形式と言うわけではないが、前期後期の継続、3年から4年の継続受講が可能となっている点が参考になると思われる。前期や3年次の体験を次にいかすことができ、またそれらの文化の継承が、上級生から下級生にうまく伝達できている。

（科目担当者及び受講生へのインタビュー）
 科目担当者へのインタビューでは、授業時間外の指導など大変さを知るところとなったが、その負担に余りある成果があるということも知ることができた。
 受講生へのインタビューでは、上記の裏返しになることが語られた。授業時間外の作業など大変さがあったが、それもまた楽しかったとのことであった。また、グループ作業ゆえに人間関係の煩わしさや難しさを実感することもあったが、それらの苦労の末のイベントの成功などは、大学時代のいい思い出であり、体験であると感じているとのことであった。
 学生にとっては、大変でもありまた楽しくもある授業として印象に残っているようであった。

科目名：展開演習 2

学部：文化情報学部

科目担当者：阿部純一郎

（授業の概要・カリキュラムでの位置付け（簡潔に））

特定の地域の観光振興・まちづくりをテーマに、フィールド調査の一連のプロセス（事前準備・実査・分析・結果報告）を体験的に習得する授業です。2014年度は、愛知県の田原市伊良湖と犬山市城下町地区で現地調査を実施しました。担当者のゼミは、卒業論文執筆にあたり現地調査を不可欠の条件としています。そのため、本授業は卒業論文執筆前の「基礎固め」として位置づけています。

（授業の中で心掛けていること）

学生の主体性を引き出すために、以下の工夫をして、「やらざるをえない」状況を作り出しています。

- ① 明確な到達目標と全体のスケジュールを最初に伝え、そこから逆算して各段階の締切日を設定します。スケジュールは、学外報告（発表会・コンテスト）や学外関係者（行政・企業・地域住民）との連携を積極的に取り入れ、学生が緊張感をもって臨める授業環境をセッティングします。
- ② ゼミ全員で1つの目標に向かうため、各自の役割分担（責任）を明確にし、こまめに情報連絡を取り合っています（初回にグループメールを作成）。また現地調査や発表直前は、ほぼ毎回の授業が締切日になるため、学生はおのずと授業外に集まって課題に取り組むことになります。
- ③ 全員がチームとなって作業するため、コミュニケーションを円滑にとれるよう授業外に親睦会を開催したり、欠席者には別の宿題を課すことで他のメンバーから不満が出ないようにしています。

（効果）

本授業で実施した犬山でのヒアリング調査をもとに、日本観光振興協会主催「産学連携ツーリズム・セミナー」（於：東京ビックサイト）の観光振興プランコンテストに応募し、優秀賞を受賞しました。

FD委員：向直人

（参考となる授業として採り上げた事由）

阿部先生のご専門の「観光学」は文化情報学科の目玉であり、日本の重要な経済政策の柱としても注目されています。「参考となる授業」に推薦する「展開演習 2」は、阿部先生がご担当される科目の中でも“体験することを”を重視しており、学生の主体的な学びを促進するための様々な工夫が散りばめられています。また、学内での活動に留まらず、学外の発表への参加、学外の専門家との連携など、実社会への貢献も非常に高いと感じます。さらに、本学ホームページの新着記事として、阿部先生の活動が取り上げられることも多く、その実績は「参考となる授業」として相応しいと言えます。

（参考にできる授業方法）

- ① スケジュールを明確にし、段階的な目標を定めることで、学生の緊張感を高めること。
- ② 学生の役割分担を明確にし、互いの情報交換を重視することで、協調性を育成すること。
- ③ 欠席者への対応を厳格化し、学生を公平に扱うこと。

（受講生が参加したコンテストの感想） 等

授業が始まってからすぐに「産学連携ツーリズム・セミナー」の存在を知り、阿部先生の協力のもと、応募を決めました。先輩の調査していた資料を読み事前に勉強して、足りない分をヒアリング調査で補いました。提出期限に追われ、授業以外でも集まり、資料作りを行わなければいけなかったのもとても大変でしたが、40校の応募の中から4校に選ばれ、東京ビックサイトで発表することができました。コンテスト当日は、300人以上の学生や社会人の前で発表するということでも緊張しましたが、今まで準備、練習してきたことをすべて出し切り、優秀賞という形に残すことができました。自分達が努力してきたことを評価されることで自信にも繋がり、とても良い機会になりました。

科目名：生活経営論

学部：現代マネジメント学部

科目担当者：東珠実

【授業の概要・カリキュラムでの位置づけ】

1 年前期開講の専門教育科目（経営分野）：マネジメント学修の基礎として、セルフ・マネジメントやホーム・マネジメントについて学ぶ科目

（授業の中で心掛けていること）

学生一人一人が、授業での学習内容を直接自分自身に関係のある生活課題として興味をもって受け止めることができるように、具体的な事例に基づいて説明するように心がけています。

（授業内外で学生が主体的に学修する工夫）

授業内容に関連するワークシート（経験や考えを問うもの）を作成し、授業中、学生たちがワークシートを埋めながら主体的に学習を進めるようにしたり、授業に関連するテーマについて授業終了時に小レポートを書かせるなどしています。

（特徴的な授業方法と効果） 等

授業方法は、テーマに関する最新の情報やデータ（図表）などを提示し、その読み取りを通して現状を分析・理解させ、それに対する自分自身の考えをまとめさせるという流れです。分析・理解にあたっては、単に社会的な現状を知らせるということにとどまらず、学生一人一人の興味関心や経験と照合させることにより、学習内容の「“自分ごと”化」の促進を目指します。

授業の準備にあたり、少子高齢化、高度情報化、環境問題、消費者問題などの当面する諸問題に関する社会的・経済的な状況をわかりやすく伝えるインパクトのある資料の収集に努めています。また、大人数の授業ではありますが、出来る限り学生たちに発問するように心がけています。発問にあたっては、学生たちが回答しやすい発問（正解がない（多様である）もの、意見や経験を尋ねるものなど）を用意し、机間巡視を行いながら回答を求めたり、指名して回答を求めるようにしています。また、個人情報保護の観点から、回答を求める際、重要と思う個人情報には触れないように注意しています。

FD委員：石井圭介

（授業を参観しての感想）

- ・ 昨今の消費者問題について改めて考えさせられる内容で、最新の動向を踏まえ、単に生産者（販売側）消費者の問題ではないことが、様々な視点、論点から明らかにされ、学生も興味を抱き、よく理解できると思われました。
- ・ 1 限目の講義でありながら、遅刻する学生も少なく静粛に講義が進められ、学生は意欲をもって講義に臨んでいました。これは、東先生の講義に対しての周到的準備、講義内容、進行など総合的なものと考えられます。

（参考にできる授業方法）

- ・ 教員からの一方的な講義だけではなく、学生に問いかけながら、一人一人の学生とあたかも対話をしているかのような“双方向的”な講義でした。学生に対して常に思考することを求めておられ、学習効果もとても高まるであろうと思われました。

科目名：模擬授業演習

学部：教育学部

科目担当者：酒井照彦

(山田がインタビューの結果を文章化しました。)

① 授業の概要・カリキュラムでの位置付け

- ・3年次前期の必修科目。全学生を8クラスに分け、1クラス20～25名の受講生で運営されています。
- ・この授業で授業力を高め、3年次後期、4年次前期に控えている教育実習の準備を行います。

② 授業の中で心掛けていること

- ・授業というのは自分の計画通りに淡々と進めればよいというものではありません。意欲的な子もいれば関心の低い子もいる。できるだけリアルな教室環境を作り出し、想定外の子どもの発言やアイデアについてもキャッチして、授業に生かせるような授業力をつけてもらいたいと思っています。
- ・授業者が「分かる人」と問うて、数人の児童が挙手し、そのうちのひとりを指名して正しい答えが出たら、そのまま授業を進めていくというのはよくありません。手を挙げていない大多数の児童が分からないまま進んでいる可能性が高いからです。いくつかの意見が出たら、「この意見に賛成な人」と挙手をさせ、「分からない」というカテゴリーも含めて全員が自分の立場を表明するようにさせることが重要と考えています。

③ 授業内外で学生が主体的に学修する工夫

- ・事前準備をしっかりさせます。その際にさまざまな展開（児童からの奇想天外な発言やアイデア）をも想定して、いろいろなパターンで授業の進行を考えていくことが大切です。

④ 特徴的な授業方法と効果

- ・児童役の学生には役割が割り振られており（「奇想天外な質問や意見をいう係」「逸脱行動をする係」など）、模擬授業がなるべくリアルな環境で進められるように配慮しています。
- ・模擬授業をビデオ撮影し、授業者は授業後に自分の授業を視聴し、反省する機会を持ちます。

FD委員：山田真紀

① 参考となる授業として採り上げた事由

- ・教職課程の授業では、各教科・領域の「指導法」において、模擬授業が行われることが少なくありません。模擬授業を通して、教材研究や授業方法に対する理解を深め、授業力の向上がはかれるためにはどのような要素が必要でしょうか。教育学部だけでなく、全学部の教職課程の授業にも参考となる、汎用性の高い工夫がみられるため、この授業を紹介します。

② 授業を参観しての感想

- ・講評の内容が、「何がよくて何がよくないのか」「どう改善すればよいのか」と具体的です。そして次のグループが、先生の指摘を反映させ、さらにより授業を展開していこう、とモチベーションをあげている様子が印象的です。（あまり質のよくない授業に対し、指導者が「まあいいんじゃないですか」など曖昧な評価をすると、学生のモチベーションは上がりません。）
- ・児童役の学生は、児童として授業に参加するだけでなく、授業の「よい点」「改善点」を見出し、メモを取りながら授業に参加しています。ここで「授業を見る目」が養われています。

③ 参考にできる授業方法

- ・先生役と生徒役の配置の工夫。受講生数により2～3名で45分間の授業を行わせています（ITではなく15分～20分間で交代）。生徒役は「積極的に意見をいう児童」「逸脱行動をする児童」などの役割分担があります。

④ 科目担当者及び受講生へのインタビュー

- ・受講生によると「授業の展開の仕方、想定外の子どもの発言に対する対応、板書の構成、チョークの持ち方、教師としての適切な服装、漢字の書き順に至るまで、指導が具体的で、とても勉強になる」とのことです。

科目名：「数理の世界 B」

学部：教育学部

科目担当者：高橋聡

（授業の概要・カリキュラムでの位置付け・授業の中で心掛けていること）

主に高等学校までに学んだ数学概念を、一般教養という視点から再検討し、将来のキャリアに資するために教育学部生として身に付けるべき数学的素養を培うことを目的とする授業です。例えば、算数・数学を“受験の道具”やそれに近いものと思っている受講生が、数学本来の目的や方法が生きるために必要な汎用的能力育成に関わることに気づき、そのよさを感じ得できるよう心掛けています。

（特徴的な授業方法と効果）

すべての授業において、講義と演習を併用しています。特に演習では、毎回約 20 分間を費やして、解答記述が A4 用紙 1 頁～2 頁に渡る問題解決型の課題を用いています（毎時回収・次時返却）。この課題への取組状況を確認することで、各受講生の学修状況を可能な限り把握し、次時の講義内容や方向性を、シラバスの内容を逸脱しない範囲で軌道修正するようにしています。結果、講義テキストは毎年度毎時間、独自に作成したものとなりますが、このようなテキストを用いることで、学修の要点が受講生に的確に伝わることを期待されます。

（授業内外で学生が主体的に学修する工夫）

上記講義テキストの他に、パワーポイントを用いたプレゼンテーションを作成しています。プレゼンテーションによる講義では提示する情報量が膨大となりますが、受講者には、それら情報から理解可能で、しかも自らの興味や関心に関連づけることのできる情報を適宜取捨選択して受容するよう促しています。また、重要な情報についてはキーワードとして記録し、授業後に文献やインターネットを通じて調べるように促しています。受講生が講義内容をそのまま受容することなく、それを通じた思考・判断を主体的に行う姿勢を身に付けられるよう、情報提供の仕方を工夫しています。

FD 委員：磯部錦司

（参考となる授業として採り上げた事由）

優れているところは、自作テキストがつくられ、そのテキストが授業の中で学生の実態や状況、学修度などによって、日々、改善され変容していくところです。授業の「つながり」と「見届け」が意識され授業が構想されていることと、学生を主体にした授業が思考されていることに特徴が見られます。目先の技術でなく教育実践学を本質的に捉え、専門領域の内容を深める展開がなされています。

（授業を参観しての感想）

一見地味な授業ですが、前時の授業と本時がつながるように導入が構成され、学生に思考を促す展開が工夫されています。授業のプロセスにおいて、学生が新たな気づきや発見を自ら見つけていこうとする展開が見られます。

（参考にできる授業方法）

- ・ 学生を主体にしたテキスト作成と学生の実態に対応した毎時のテキストの改善
- ・ 前時と本時がつながる導入の展開
- ・ 主体的な思考を促す事例、工夫された課題の提示

（科目担当者及び受講生へのインタビュー）

数学が苦手な学生も受講しますが、学生へのインタビューでは、「新たな気づきや考え方が広がる」「小・中学生のころにこういう授業受けたかった」という意見が聞かれました。単なる専門知識の伝達でなく、考え方や数学的な世界の広がりや、この授業での学びをとおして学生たちは実感しているようです。

科目名：療養支援看護論Ⅱ（慢性期・老年）

学部：看護学部

科目担当者：宇佐美久枝

（授業の概要・カリキュラムでの位置付け）

この授業は成人慢性期の看護学を習得する授業です。授業の1、2回目は慢性期看護とは、慢性疾患を有する人とその家族の理解、援助支援方法を教授します。3回目以降はオムニバス形式で慢性期看護の中でも、実習で受持つことの多い疾患、国家試験に頻出する疾患の看護を教授します。たとえば、COPD、高血圧、慢性心不全、肝硬変、糖尿病、慢性腎不全を有する人の看護などです。学生になるべく多くの疾患看護を学んでほしいため、成人急性期看護とかぶらない内容にしています。

（授業の中で心掛けていること）

教科書を使って講義をします。授業資料は教科書にないことを話す時には配布します。教員が授業資料を使って講義をすると学生は教科書を開かず、読むこともしません。自分で学修する習慣がつかないように思うからです。

疾患と看護を結びつけて、考えることができるように疾患の病態生理を交えて講義をしています。また、その時の看護に関するエピソードを入れるようにしています。私自身の体験、あるいは先輩学生の実習での体験などです。

笑いを取ることも必要だと考え、ユーモアを入れるようにしていますが、時に滑ります。しかし明るく、後ろの席まで届くような大きな声を出しています。

私語をしている学生がいたら、講義するのをやめます。あるいは学生に何かわからないことがあるのかを尋ねるようにし、他の学生の迷惑にならないようにしています。

FD委員：服部律子

（参考となる授業として採り上げた事由）

宇佐美先生の授業は、学生たちから「解りやすい」という評価で、授業アンケートでも常に満足度が高く、その「解りやすさ」の要素を共有したいと考えこの授業を取り上げた。

（授業を参観しての感想）

PPを使いながらテンポ良く進んでいく。言葉も明瞭で、声も大きすぎず小さすぎず、「聞きやすい」授業で、スピードの緩急もあり、要点をつかみやすい授業だと思った。

（参考にできる授業方法）

- ・病態や症状の復習、患者の心理等へと進むことで、身体内の変化がどのような症状として出現し、それに対して患者はどのような気持ちになるのかを学生はイメージしやすく、その看護も理解しやすくなっている。また、先生の経験談や闘病記の紹介が交えられるなど、具体例が示されることで学生の理解を高めるような工夫がなされている。
- ・PPで要点が示されるが、その詳細はどこを見ればよいのか（テキストの頁や配布資料の頁）がPP中に示されており、学生は授業についていきやすい。
- ・ボリュームも多く、教える側からも時間的にタイトな科目であるように思えるが、骨子がテキストに沿っているため、授業にもついていきやすいし、復習もしやすくなっている。また、復習等でテキストを見る機会が作られ、授業で話したこと以外の内容にも触れる機会となっている。
- ・授業開始時のざわついた時間や集中力が低下してきた時間に、答えやすい質問で学生にマイクを向けて集中を促されている。また、この範囲が教室の後方にまで及ぶことで、後ろの学生も巻き込むことができている。
- ・授業後のリフレクションペーパーにその日の授業をレビューするような質問が設定されている。

教員研修小委員会報告 2014

2014 年度全学 FD 委員会は、委員会内に教員研修小委員会を設置した。構成員は北岡崇（国際コミュニケーション学部）、石井圭介（現代マネジメント学部）、阿部順子（生活科学部）の三名。

A. その役割は、「アクションプラン 2014」に記された次の三点であった。

1. 「アクティブラーニングの推進支援」アクティブラーニングや ICT を活用した授業を推進するため、学内外の研修会等への参加や支援体制の整備を行う。
2. 「FD 専門家の活用と教員の FD スキルの養成」
3. 「教員の自己点検アンケートの実施」

B. 小委員会委員三名は、9 月から 10 月にかけて何回か話し合いを行い、2014 年 10 月 28 日開催の全学 FD 委員会に次のような方針を報告、提案し、了承された。

【1】教員の自己点検【A3 に対応】

- ・リフレクションペーパーを自己点検のためのツールとする。
- ・現在のリフレクションペーパーの 3 項目「よかった点」「悪かった点」「改善方策」に、自己反省の共通化できる項目を足すことで、本学の自己点検としたい。

【2】教員の研修【A1 および A2 に対応】

- ・「授業支援相談窓口」が設置される場合は、たとえば名古屋大学高等教育センターより専門家 1 名に数か月に一回ほどの来学を依頼するなど、形式については本小委員会でも検討するものとする。

【3】アクティブラーニング【A1 に対応】

- ・各教員がシラバスに記載した様々なアクティブラーニングの項目のうち、特に「その他の項目」を総覧し、できれば眉山らしさを抽出する。
- ・科目種類別（語学、実験実習、講義、ゼミ）に特色をみていきたい。科目数が多い種別については、サンプル調査も検討する。
- ・上記より、本学固有のアクティブラーニングの定義を検討する。
- ・小委員会メンバーの学内外への研修会への派遣は、随時とする。

C. 報告提案した上記の各方針に沿った実践：

・【B 2】教員の研修：全学 FD 委員会主催で開催した FD 研修会（名古屋大学高等教育センター准教授中井俊樹氏「アクティブラーニングを促す教授法の基本」）は、【A 1】および【A 2】に該当する FD 活動として位置づけることができる。この研修会への参加者は 174 名であった。

・全学 FD 委員会主催で開催した GLEXA 講習会（「GLEXA 活用のための実技講習」）には 26 名の参加者があった。この講習会もまた、上記【A 1】および【A 2】に該当する FD 活動として位置づけることができる。

・【B 3】本学で開講されている全科目を小委員会メンバーが手分けして、本学教員がシラバスに記載したアクティブラーニングの各項目のうち、特に「その他の項目」を総覧・点検したが、その結果、対話、ロールプレーイング、ペアワーク（ペア学習）、相互評価、映画英語の書き取り、DVD 学習、等々、個々の教員によって多種多様な試みがなされているのを確認できた。各科目の効果的な教育を企てるそれら個々の教員の熱意を確認できた。

しかし、小委員会としては、「梶山らしさ」と言えるほどに強い特性を持ったアクティブラーニングの型を抽出することはできないと判断している。ほとんどのシラバスは、当初全学 FD 委員会で審議し各教授会で承認された標準的な 12 項目のいずれかをチェックするにとどまっており、このカテゴリーを突破する潜在力を予感させる「梶山らしさ」を、科目種類別のレベルにおいても、抽出できる段階にはまだ達していないと判断している。

したがって、小委員会は、本学固有のアクティブラーニングの定義は時期尚早であると考える。

小委員会メンバーの学内外への研修会への参加は、メンバー各自の自主性に任せた。上記の各項の試み・点検・現状把握は【A 1】に該当する FD 活動である。

・【B 1】「リフレクションペーパーを自己点検のためのツールとする」という原則のもと、現在のリフレクションペーパーの 3 項目「よかった点」「悪かった点」「改善方策」に、自己反省の共通化できる項目を足すことで、本学の自己点検とするという方針を打ち出したが、共通化できる項目を確定できないうちに年度が変わり委員も交代した。

【A 3】に該当するこの件については、次回の授業アンケートの項目を確定する際に併せて考えるのが適当と考える。

北岡 崇

Ⅲ 大学院教育の質の向上に向けて

- 1 大学院 FD 委員会の活動記録（平成26年度）
- 2 大学院 FD 活動報告（平成26年度）
- 3 研究科 FD 活動報告（平成26年度）

Ⅲ. 1 大学院FD委員会の活動記録（任期：平成26年5月1日～平成27年4月30日）

（第1回） 平成26年4月22日（火） 18：05～18：55	1. 平成25年度大学院FD委員会活動について（報告） ・各研究科におけるFD活動報告 2. 平成26年度大学院FD委員会活動に関する件（審議） ・小規模大学院におけるFD活動の課題について 3. その他
（第2回） 平成26年6月24日（火） 18：00～18：40	1. 平成26年度大学院FD委員会活動に関する件（審議） ・4研究科における授業参観の機会について ・指導計画やマッピングに関するディスカッションについて 2. その他
（第3回） 平成26年9月23日（火） 18：00～19：20	1. 人間関係学研究科の発表会についてについて（報告） 2. 平成26年度大学院FD委員会活動に関する件（審議） ・大学院の研究指導における課題について ・4研究科共通アカデミックライティング科目の可能性について ・4研究科院生によるチームでのディベートについて 3. その他
（第4回） 平成26年11月25日（火） 18：10～18：50	1. 平成26年度大学院FD委員会活動に関する件（審議） ・4研究科に共通する大学院FDの基本方針・目標について 2. FD委員会活動報告書に関する件（審議） 3. その他
（第5回） 平成27年1月27日（火） 18：00～19：00	1. 大学院FD憲章（仮称）の作成に関する件（審議） 2. その他
（第6回） 平成27年3月17日（火） 16：00～16：50	1. 各研究科で実施しているFD活動について（報告） 2. 相山女学園大学大学院FD実施計画に関する件（審議） 3. その他

Ⅲ. 2 平成26年度 大学院FD活動報告

○ 学生（大学院生）の学修時間アンケート

- a 実施内容：平成27年1月17日（土）～1月19日（月）における学修時間について3日間の、授業の時間以外の時間で「準備学修」、「課題、復習」、「授業に関するその他の学習」、「授業以外で関心がある勉強」について何時間学習するか質問した。
- 実施目的：学生・院生の学習のスタイルを把握し、より価値の高い授業を提供するために実施する。
- b 実施方法：学生支援システムのアンケート機能を利用し、全学生対象に実施した。
- c 開催状況：5,854名中444名が回答、大学院生は23名が回答
- d 実施結果を踏まえた授業改善への取組状況：結果を主計し、自由記述も含めて、各種委員会で報告した。

○ シラバスのチェック

- a 実施内容：各研究科ごとに、シラバス作成要領を作成し、教育目標、CP, DPを明示した上で、各教員にシラバス作成を依頼した。その後、大学運営会議からの求めにより、初校時に、全科目についての第三者チェックを各研究科のFD委員会で実施した。必要項目や内容について確認し、必要に応じて、授業担当者に加筆修正を依頼した。

○ 学生に対する授業評価アンケートの実施状況

- a 実施の有無及び実施時期
- 大学院生数が少なく、1クラス数名のため実施しなかった。

2014 年度生活科学研究科 FD 学専攻選出活動報告

生活科学研究科 FD 委員長 雨宮勇

生活科学研究科では、2012 年度に FD 委員会を立ち上げ、2014 年度は 3 年目にあたる。当初 2 年は同一メンバーで行ってきたが、2014 年度は以下のメンバーで活動を行ってきた。

上甲（研究科長）

内藤通孝（食品栄養学専攻世話人）

上甲恭平（生活環境学専攻世話人）

續順子（食品栄養学専攻選出委員）

雨宮勇（生活環境学専攻選出委員）

1. 生活科学研究科での取り組み

生活科学研究科での 3 年目の FD 活動は、いまだ具体的な活動は行われていない。これは、「大学院教育の考え方」が前年度に確認されている。「大学院教育を達成するために、教員側としては共通した基礎教育をベースに異なった分野の研究状況を共有し、社会の中における自分たちの研究の現状を把握することがひつようとなる。」と述べているが、これは理念に留まり、具体的な学生への指導の中で生かされてるところまでは至っていない。この背景には 2 つの専攻科が行う研究方法が研究内容に寄って大きく異なることがある。人を相手にした臨床実験とモノを対象にした化学及び物理学実験とがあること、実験時期、実験期間、実験機器、対象材料、対象人数、対象空間など様々な要素が混在し、その後これに設計・制作の分野が本研究科の研究対象として加わったことで、学生たちにどのような研究方法が本研究科の普遍的な作法であるかの指標を示すことができないでいる。

また、これは他学部の研究に対してはより遠く感ずるものであり、興味の持ちにくさにつながっている。研究の持つ普遍的な作法の存在は認めても、具体的な内容が得られない中では、この面での教員の指導も限界があるというのが現状である。

以上から、次年度は学部内での共通の研究作法を得るため、その実態と差異を明らかにすることを活動の目標としたい。

1) 大学院の専門領域における現状の把握

教員それぞれの専門領域における研究方法などの実態の把握を行う。

2) 研究テーマの設定と指導法

現在学生に指導している研究テーマを公開し、研究指導全般における指導上の問題点や、研究を進めていくときの指導方法についての意見交換の場を設ける。

2015 年度では、以上についての活動を実践するよう努める。

平成26年度人間関係学研究科FD活動概要

本人間関係学研究科では修士論文に係る学生指導に直接関わる組織として臨床心理学領域、社会学領域、教育学領域の3つの組織編成をおこなっている。そこで平成26年度の人間関係学研究科におけるFD活動を、研究科全般に渡る活動と各領域別活動に分けて以下に報告する。

人間関係学研究科全般

平成26年度は、人間関係学研究科に在籍する全院生を対象としたアンケート調査を実施した。調査内容は授業に関するものを中心として、授業に関連する以下のような事項である。①現在開設されている科目について、他に開設を希望する科目について ②履修の仕組みについて（単位数、開講時期、開講曜日、開講時間など） ③入学時ガイダンスについて ④授業について ⑤論文指導について。

調査実施後、結果を踏まえて各領域内で話し合いを持った。

研究科全体に関わる院生からの要望等で直ちに改善できるもの（「院生自習室のパソコンのバージョンアップ」など）は直ちに対応することとし、今後の検討を要するもの（「自習室利用時間の延長」など）については今後検討していくことにした。

授業の内容・方法に関しては、研究科全体の方針に関わるような改善の要望はなかった。ので、研究科全体としては、今後も従来の内容方法を継続させていくことにした。

人間関係学専攻臨床心理学領域

<研究教育活動>

・心理学実験のTA（前後期）：学部2年生を対象とした心理学実験のTAとして、大学院生14名(M1)が

1年間にわたり実験実習をサポートし、心理学研究法の実践的サポート、統計解析、レポート作成の相談にあたった。

・修士論文中間発表会（7月25日）：3グループに分かれ、1月に修士論文を提出する予定であった12名の大学院生(M2)が発表した。これは毎年実施し、原則として全教員、大学院生(M1, 2)が参加している。大学院生は指導教員による指導を超えて、他の教員や大学院生からさまざまな助言指導を得ることにより、より広い観点から研究にアプローチする力が涵養される。

・臨床心理相談室紀要『梶山臨床心理研究』の発行：教員2名が研究論文を執筆し、大学院生(M2)13名が事例研究を執筆した（3月7日発行）。大学院生の事例研究については、原則として外部の臨床心理士や精神科医からコメントをいただき、事例の理解や自身の臨床実践上の課題などを振り返ることにより、その後の臨床実践や研究に示唆を得る好機となっている。

- ・卒論発表会(1月31日)：学部4年生全員が卒業論文の成果を発表する卒論発表会において、大学院生(M1)5名が会場の司会(座長)として運営に携わった。
- ・SCAT講習会(2月21日、22日の2日間)：臨床心理相談室の実習員の支援の質を向上させるために、研修を目的とした質的分析SCAT講習会を開催し、実習員である院生9名と修了生1名、教員2名が参加した。
- ・東海アセスメント研究会(4/27;7/20;1/25の3回開催)：教員2名、他大学教員、臨床心理士、学校教諭、臨床発達心理士などが参加した。知能検査を中心としたアセスメントにより、児童生徒をどのように理解し支援するかについて検討を行った。大学院生の参加は、4/27に0名(修了生2名)、7/20に3名(修了生2名)、1/25(臨床心理相談室相談員を担当している大学院修了生が発表を担当)に2名(修了生3名)であった。

<臨床実践>

- ・椙山女学園中学校・高等学校におけるスクールボランティア(生徒に対する相談援助活動)：大学院生(M1,2)が自発的に参加し、スクールカウンセリングを体得する機会となっている。
- ・臨床心理相談室ケース報告会(3月7日)：臨床心理相談室では参加可能な全相談員・実習員(非常勤相談員・ケースを担当している大学院修了生・大学院生)が一同に会し、年1回スタッフ会議を行っている。大学院生・修了生には、組織における臨床相談上の実践的な課題などを検討する好機となり、非常勤相談員には相談室運営上の課題などの共有の場となっている。
- ・臨床心理士資格試験の面接への心構えについてのオリエンテーション(11月14日)：教員3名により、臨床心理士資格試験の一次試験に合格した大学院修了生7名に対して全体オリエンテーションを行った。また、一次試験に合格した全員に対して全教員が分担して、面接に対する個別指導を行った。
- ・日進市教育委員会との連携事業
発達障害保護者相談会：日進市内の小中学生の保護者を対象として子どもの発達障害に関する相談会を開催した(9月11日)。教員6名が保護者8名の相談を受けた。
小中学校への巡回指導：教員7名が市内の13小中学校に前後期の2回出向いて、巡回指導を行った(平成26年7月～平成27年2月)。

<アンケート調査の結果を受けての改善>

大学院生活全般にかかわる施設利用などに関する項目を除き、領域にかかわる項目ではほぼすべての項目で「満足している」という回答が多かった。以下に、改善への意見や要望のあった点について、領域で検討した結果を報告する。

1. 新たに開設を希望する科目について、学生から希望のあった「産業心理学」については、加藤容子准教授が担当可能であるため、平成28年度の開講に向けて進めていくこととした。また、「犯罪心理学」についても開講することとした。開講科目の領域を広げることについては臨床心理士資格認定協会からの視察でも指摘を受けたところであり、改善することが望ましいと判断した。他に要望のあった「心理面接のロールプレイ」「箱庭や描画の実施や解釈」「認知行動療法」などについては、現在も授

業の中で何回かを使って行っており、15 回をかけて科目として立てる必要性はないと判断されたため、すでに開講している科目の中で必要に応じて取り入れることとした。

2. 開講の時期について、後期はケース担当などがふえるため前期の開講科目をふやしてほしいという意見があったが、現状でも前期開講科目の方が多く、9 月入学生もいる Semester 制をとっていることから、前後期の開講数については現状のままとした。
3. 論文指導のあり方について、教員によって進め方が違うが教員を選ぶときにその情報がないという意見があった。実際に教員によって指導の方法が異なるため、指導教員を選ぶさいに、すべての教員について、特別研究 1－3 においてどのように指導を行うのか、また現在の指導生の名前と研究テーマを書いたものを配布することとした。それを見てゼミの先輩に聞くことも可能になり、指導教員を選ぶさいの判断材料になると考えられる。

人間関係学専攻社会学領域

<研究教育活動>

社会学領域においてはこれまで、大学院生の自主的研究活動および指導教員の集団的研究指導のための組織として、社会学研究会を設立し組織的活動を続けてきている。組織の運営は基本的に院生が担うものとし、領域代表や他の参加教員の助言等のサポートによって運営されている。メンバーシップについては領域所属の学生・教員のみならず他領域・研究科の学生・教員や研究科を終了した OG にも開いており、オープンな研究および指導活動の場として運営している。活動の意義としては、研究能力の向上を目指す院生たちの相互啓発と研鑽の場となること、院生が多様な視点から教員による指導を受けられること、さらに教員間で指導の方法等について学び合う場となることが挙げられる。活動実績としては、平成 26 年度は 4 回（5/17、7/26、10/04、12/13）の研究発表会が行われた。

また、これも毎年のフォーマルな活動として、領域全体で学生の修論作成の進捗状況を確認し集団的に修論指導するための場として領域教員全員が参加する修士論文中間発表会を行っている。平成 26 年度は 10 月 4 日に社会学研究会と同時に中間発表会を行った。

さらに社会学領域では、今年度の新たな FD 活動の試みとして、大学院の授業等についての学生への意見聴取および教員も含めての話し合いを修論中間発表会の後に 1 時間程度をとって行った。またその後、研究科全体の FD 活動として学生に対する授業等に関するアンケートがおこなわれ、社会学領域の学生も回答した。

本年度の社会学領域における FD 活動の総括としては、これまでも年に数回は学生の研究発表のための教員参加の研究会を実施しており、また親睦会も実施するなど、学生と教員の授業外での交流をおこなっていたが、今回の交流でさらに丁寧な説明が必要な点や課題も明らかになった。改めて授業改善のために教員および学生の間で話し合いを実施することは、教員学生の相互理解の促進や領域の活性化という意味でもさらなる効果が期待できるのではと考える。したがって、この活動は次年度以降も継続

していきたいと考えている。また、学生からの意見にもあった、学内交流については、研究科内の領域間交流の再活性化や他の研究科との交流の促進も、学生の研究および指導環境の改善という観点から、領域として今後積極的に取り組んでいくべき課題と考える。

人間関係学専攻教育学領域

<研究教育活動>

◎5月17日および11月22日に、修士論文構想中間発表会を開催した。領域に所属する全員が——三名の学生と七名の教員が——参加して、約二時間をかけて行なった。この発表会においては、各々の学生による修士論文への取り組み状況を発表し、それを承けて、参加した他の学生および教員から質問を出しそれに応答したり、論点に関する研究討議を深めたり、というかたちを以って相互の対話を行なうことを通して、それぞれの論文構想の深化を促すことをめざした。

◎人間関係学専攻教育学領域 faculty development のための授業検討会を開催した。

11月13日(木曜)第四時限 「教育社会学特講」を公開授業とし、領域担当教員が参観した。11月14日(金曜)12時40分～13時05分 公開・参観した授業についての検討会をもった。

この検討会では、公開授業について参観者が感想を述べた後、大学院における授業づくりをめぐる次の諸点に関して、忌憚のない意見を出し合い、継続的な検討の可能性を探ろうとした。

- ・大学院の授業づくりで苦勞するのは、どんなことか？

……教材の選び方や用い方に関する苦勞。

学び手(受講学生)の学びのありようが生き生きしたものにならないこと(沈滞した雰囲気になること)がよく起こる。そのような場合にどう対処すればよいのか、という点での苦勞。

(目標に応じた)授業過程を構想する上での苦勞。

上記のような点に関して、意見交換した。

- ・その苦勞することに、さしあたりどのように対処すればよいのか？

……この検討会に参加した各教員の経験を踏まえて、試行錯誤のいくつかを出し合い、課題意識を共有することになった。また、わずかではあれ、これからの授業づくりの参考にできるような着想も得られた。

- ・今回の試行に——授業の公開・参観・検討会という試行に——意味を見出すことができるだろうか？……今回限りで終わらせずに、学期に一度のペースで試行することに、意味を見出せないことはないようだ、というのが今回の検討会を経ての意向である。

◎「人間関係学研究科の授業等に関するアンケート」への回答をもとにした検討会を開催した。3月10日(火曜) 15時30分から約30分間、「人間関係学研究科の授業等に

関するアンケート」への回答をもとにして次のような方向性での検討を行なった。すなわち、学生の回答に従属させて今後の授業のあり方を考える、というのではなくて、学生の回答を参考資料のひとつとして、教員が自律的に今後の授業のあり方を考えていく、という方向性において、検討した。

「開設科目について」・「履修の仕組みについて」・「入学直後のガイダンスについて」・「授業の内容、進め方について」・「論文指導の在り方について」という項目のいずれについても、学生による回答は高い満足度を(満足感を)表わしているのだが、そうした満足感の生み出され方を、教員側としては掘り下げて問うようにするとよいのではないか、と思われた。

平成 26 年度 大学院現代マネジメント研究科 F D 活動報告

石井圭介

1. 大学院「現代マネジメント研究科」の設置認可

平成 26 年 4 月、大学院 現代マネジメント研究科（修士課程、定員 5 名）を開設し、学部新卒 4 名、社会人 2 名の計 6 名が進学した。本研究科では、今日の経済社会において、既存のモノや仕組みに“イノベーション能力”により高度な知識を統合した、これまでになかった新しい価値を生み出すことのできる人材を育成することを目的としている。

本研究科では、従来とは異なる視点で新たなビジネスモデルや新機軸を創造する「イノベーションマネジメント」に関する教育研究を行っている。特に経営、会計・税務、経済・公共の 3 領域におけるイノベーションマネジメント能力を育み、既存のモノや仕組みに対して高度な知識を統合し、まったく新しい価値を生み出すことのできる知的人材を養成しようとしている。

大学院の設置認可は、学部教員の研究業績の高度な水準が認められた結果でもあり、これにより、今後は学部においても、大学院進学を念頭においた、より専門性の高い教育を実施することが可能となる。

2. 講演会の開催

大学院現代マネジメント研究科開設記念講演会

日 時：平成 26 年 11 月 27 日（木）10:50～12:00

会 場：現代マネジメント学部 204 講義室

演 題：地方銀行の役割と求められる女性人材

講 師：株式会社 十六銀行 法人営業部地域開発グループ

調査役 伊藤 真弓 氏

司 会：星野優太（大学院現代マネジメント研究科長・教授）

内 容：本研究科では、近年、女性に対し社会的に大きな期待が寄せられるなか、イノベーションマネジメント能力を身につけ、社会で活躍する知的リーダー、スペシャリスト、研究者の養成を目指している。こうした取り組みの一環として、昨今の金融機関の動向や、求められる女性人材についてのテーマであった。

3. 今後の課題

- ・学内他 3 研究科との連携による教育研究の質的な向上
- ・院生指導における主研究指導教員・副研究指導教員を中心とした指導体制の強化と研究支援の仕組み作り

以 上

平成 26 年度教育学研究科活動報告

磯部 錦司

1. 今年度の活動

開設年度となる平成 26 年度は、設置時の計画に基づき下記の活動を行った。

(1) 教育実践学研究についてのセミナー

「質的研究の方法と展望—教育実践学研究の推進にあたって、その方法の在り方と今後の方向を探る—」（平成 26 年 3 月 4 日、講師：増井三夫先生、出席者：24 名）

「教科」と「指導法」を止揚する研究方法を身に付ける場として、自身の研究の方法論を探る場として、臨床的な教育実践学のあり方について討議をおこなった。

(2) 中間報告会と他研究科の中間報告会への参加

人間関係学部の研究会を参観した。他研究科の取り組みがどのようにおこなわれているかは新設の本科においては意味があった。しかし、領域や内容が異なる場合、参加を呼びかけることには難しさがあった。

(3) 「研究計画書」の作成と共有

計画書の作成をおこなったが形式的なものとなっている。共有することによって指導の共同性が図られるよう、今後、検討していきたい。

(4) 「個人別カリキュラム・マップ（『コンセプト・マップ』）」の作成と共有

院生の個別マップを指導教員が作成し、授業者と特別研究について実践を共有し、方途と見通しを具体的にしていっていった。本研究科の指導は個別である故、指導学生が何を学んでいるかを共有することが重要となるだろう。

(5) 地域の教育委員会、園・学校との連携と協力

附属園・小学校、地域の園・学校の協力をいただき、モデル保育・授業の実践、エピソードの収集を行い院生の研究活動につなげていった。（「保育内容学研究」「造形演習」）

また、他研究科のゼミとの共同で地域においてワークショップを企画し、両研究科の学生が参加し内容を多角的に深めることができた。（教育研究科「造形演習」と「生活デザイン研究室」共同企画授業）

2. 今後の課題

(1) 公開授業及び参観

学部の公開授業参観週間の中に研究科の授業も取り入れ、学部の公開授業と連携し教員相互が研究科の授業について学び合える場が必要である。

(2) 個別指導と指導内容の共有

少人数であるため指導教員が研究、授業、就職支援を抱え込む状況や、実習指導教員の負担などが見えにくい状況がある。一方、未開講となる授業も多く、FD活動の組織化と実践の共有性が課題となる。

平成26年度全学FD委員会委員

所 属	職 位	氏 名	選出区分
学 長 補 佐	教 授	戸 部 栄 一 ※	学 長 補 佐
生 活 科 学 部	准教授	阿 部 順 子	学部FD委員
国際コミュニケーション学部	准教授	堀 田 あけみ	学部FD委員
	教 授	北 岡 崇	学 長 指 名
人 間 関 係 学 部	教 授	吉 田 あけみ	学部FD委員
文 化 情 報 学 部	准教授	向 直 人	学部FD委員
	教 授	武 長 脩 行	学 長 指 名
現代マネジメント学部	准教授	石 井 圭 介	学部FD委員
教 育 学 部	准教授	山 田 真 紀	学部FD委員
	教 授	磯 部 錦 司	学 長 指 名
看 護 学 部	教 授	服 部 律 子	学部FD委員

※印は委員長、学部委員の任期は1年（H26.5.1～27.4.30）

平成26年度各学部FD委員会委員

所 属	委 員	
生 活 科 学 部	石 原 健 吾	及 川 佐枝子
	橋 本 令 子	
国際コミュニケーション学部	小 澤 英 二	深 谷 輝 彦
人 間 関 係 学 部	五百部 裕	
文 化 情 報 学 部	亀 井 美穂子	
現代マネジメント学部	石 井 圭 介 全学と兼任	
教 育 学 部	磯 部 錦 司 全学と兼任	山 田 真 紀 全学と兼任
看 護 学 部	後 藤 宗 理	竹 井 留 美

椙山女学園大学・大学院 FD 委員会活動報告（平成 26 年度）

椙山女学園大学・大学院ファカルティ・ディベロップメント 第 2 号（通巻 第 15 号）

平成 28 年 1 月発行

編 集 椙山女学園大学大学院 FD 委員会・全学 FD 委員会
(委員長 戸 部 栄 一)

発 行 椙山女学園大学
〒 464-8662 名古屋市千種区星が丘元町 17-3
TEL 〈052〉 781-1186 (代)

印刷 双光エシックス株式会社

